

導く力

—救済の核エネルギーへ—

長瀬 隆

目次

解説	大槻義彦（物理学）				
1章	被爆女性の良人				
2章	樺太のヒロシマが導く				
3章	アインシュタインとドストエフスキイ				
4章	Love in Vienna（バイエンダの愛）				
5章	トリウム熔融塩炉				
82 頁	66 頁	54 頁	35 頁	24 頁	2 頁

1章 被爆女性の良人

あなたは九州の大分市の生まれで、四歳年長の兄上がいた。一九五一年に二十七才でなくなつており、一九五九年にあなたに会つた私が見ることがなかつた人である。

大分中学在校中から短歌を作り始めており、西北大文学部を目指していたが、同大には嫌いな軍事教練があるので、それが無いということで中央大法学部予科に進んだ。召集にあい宮崎市の部隊に配属されるも肺結核のために除隊となり、敗戦時には大分市中島の自宅にあつたと聞く。一方あなたは大分県立第一高女を卒業、当時はそれが普通だつたと聞くが、親同士の話し合いですでに婚約が成立していて、しかし相手の陸軍経理将校だつた人が旧満州の部隊にあつて、これが一九四五年七月に本土決戦のために広島に移動。大分県で結婚式がおこなわれ、広島に移つた。十日か二週間後に原爆に遭遇。

大分市はこの間に大空襲に遭い、一九五九年八月下旬初めて大分駅に降り立つた私を迎えて、中島の住宅街の細い道に入り自宅の前まで来て、「ここよ」と言い、道路の向かい側まで火がきたこと、しかし生家は焼けずに残つたのであって、「(体の)弱い兄ちゃんが頑張つて家に水をかけて」と笑いながら語つたものだつた。原爆後自宅に帰つてから、当時の模様をそのように聞いたのである。

敗戦後辛島正道は結核療養所に入り、九州あららぎ会に属し、歌作に励み、四六〇首を残した。没後一九五三年に友人の鹿児島大教授渡辺喜三郎氏によつて、日記の一部を加えて歌集『花火』が制作発行された。そのうちの病床生活をうたつた三首が講談社版昭和万葉集に収録されている。そのうちの見出しに選ばれた一首は――

貧しく病めばかたみに（互いに）狭く守るなり花あるベッド花なきベッド

しかし時期的にはこれらに先立つてつくられたもののに、大分空襲を歌つた数首がある。

ふるさとを焼き尽くしたる炎はやおとろへにつつ朝明けんとす

暁の雲は染みたり焼け残る吾が家の前に息つきて立つ

病人である二十一歳の青年は、家の類焼を防ぐために、夜を徹して木造二階建ての家の道に面した場所にバケツで水をかけたものようである。「息つき」に疲れはてたことが語られている。日が代わつて彼は空襲による死者を見ている。

戦いはかかるものなり焼け跡の戸板に二つ幼子のむくろ

あなたの夫だった人の部隊は日本本土のどこかへの更なる移動が決まつていて、あなたはそれまでの日を過ごすべく広島に赴いたもので、そのため下宿していた。高等商業出身の經理大尉だった夫は、三度の食事は部隊でとり、就寝に帰つて来るだけで、部隊の移動日がきまり、あなたは一足先に翌日の七日にはひとり大分市に列車で帰ることになつた。その日、すなわち一九四五年八月六日の朝、夫を玄関に送り、二階の居間に戻り、持つてこられた朝食をとろうして食卓に向かつたところで被爆している。

爆心地から一・三キロの木造家屋であり、爆風に吹き飛ばされ、着ていた長袖のセーターの焼け焦げる臭いで、「イヤ、イヤ」と言いながら氣絶から覚めた。袖に手をやると、セーターのその部分が崩れ落ちた、ということだった。真夏だったのにセーターを着ていたことの理由は先に行つて述べるだろう。言つておかねばならないのは、初めて、爆心地からの距離について尋ねた私の問いに、あなたは答えづらい問だつたので、非常に低く小さな声で答えていて、私は一・八キロと誤つて聞き、そう記憶していたことである。それから二十四年たつた最初の作品、私が生まれ育つた樺太（サハリン）を主題とした作品のなかで、私は妻であるあなたを紹介しながらそのように誤記した。後に実は一・三キロだったことが判明し、その二年後に書き、都合で四年遅れて世に出した作品、あなたとの出会いとなつた外国の旅を物語つた作品、旅そのものから数えれば数えて三十年後の作品ということになる『ヒロシマまでの長い道』の中で修正することになった。

広島が新型爆弾による大損害に遭つたことは報じられていて知つてはいたが、大分の辛島家の人々にはあなたの消息は不明であり生死は知られていなかつた。事実は、中国山地寄りに北六キロの戸坂村まで歩いてたどり着き、収容所に当てられた国民学校で夫だった人と出会い、被爆者同士の生活をともにする。翌日からは起立不能となつたあなたとは異なり、その人は顔面にガラスの破片を浴びただけで、それらが摘出されると元気になり、自由に外出するようになつた。「大分県の実家にも自分で電報を打つた」のであって、すぐにはその父親は収容所に訪ねてきた。まだ八月中のことと推定されるが、郵便局が機能していなかつた大分市内の辛島家には知らせることができなかつたようで、歌集の「広島」の小見出しの七編の最初の二編ではそのことが歌われている。作者が広島・長崎両県外の人だつたためであろうか、『昭和万葉集』の「原爆の傷痕」の項目には収められなかつたものである。

こほろぎの鳴くべくなれど家離^{さか}る君が生死の便りあらずも

生きてあれば疾く^{のづら}帰り来よ秋風の野面にさやぐ聞くべくなりぬ

夫の父君は息子が元気なのを見て安心して帰り、その後にその人には内部被ばくの症状

が現れて、あなたに遺書を託し隔離されて死没する。これは大分に伝えられて、父親は再来、遺骨を引き取つて帰る。ずっと後、結婚してからもかなりたつてからあなたが話したのだが、一緒に来た弟があなたの介護ために残つた。その頃には大分市内の辛島家にも状況は知らされていて、先ずあなたの母上と正道兄が訪ねてくる。

眼路はろぼろ亡び果てにし広島の街あまたをゆくも雨に濡れつつ

あわれあわれ亡びし街の夜がきて燐火ほうほう焼ゆるの見てふ

人間の力極まれば人を殺し自らを殺すかくて果つるか

収容所内に内部被爆者が出てはじめたのは八月も末になつてであつて、症状により確實に死ぬことが知られていて、夫君も隔離されるに先立つて、泣きながら親あての言葉をあなたに述べ伝え、あなたは筆記したということだった。そのことをあなたは母と兄に語つており、それが歌われている。

まがつびに耐え来し君が面おもやせて夫つまの最後を語らんとすも

広島市の下宿の食事が粗悪だつたためにあなたは下痢を起こし、近くの山田登美子女医の個人クリニックにかかり、はやすく直すためには身体を温めるが良いといわれ、セーターケーブルを着た。この女医さんは陸軍病院に勤務する夫君と暮らすために広島市内でクリニックを開いていたのであって、不思議な縁で後に大分市で再会し、女医は会長、あなたは事務局長として一緒に大分被団協を立ち上げる。しかしこれはまだ先の話である。はやすく治さねばならなかつたのは、夫の移動の前に大分に発たねばならなかつたからであり、腹部にも厚くさらしを卷いた。そのおかげで自身が内部被ばくを免れたと信じていたようで、私が問い合わせもないのに、出会いの早期に進んでそのことを語つたものだった。加えて「(大分に)持つてゆくよう」とぶ厚い札束を手渡されて、それをその朝腹部のさらしの中に収めたのであって、その後に被爆している。(この札束がまた後に役立つ)。

気絶から覚めて見るとすぐそばにスーツケースが落ちていて、中から浴衣を取り出して羽織り三尺で締めて立ち上がる。火を逃れて川辺に至り、そこで全裸に近い男に東京までの旅費を所望されて金を与える。夫の没後、まだその父親が遺骨を取りに来る前の時期、枕崎台風で出水があり、全員避難したのだったが、あなたはどうしても起立できず、ひとり泣き暮れていて、兵士に背負われて、近くの国鉄駅の助役の家に預けられた。夜半夫婦が迷惑至極と愚痴るのを聴き、這つて行って障子を開け、金を出し命乞いをする。

「わたしにお金をもつてることに驚いていました」。

収容所には韓国人が調理したレバーや肉を売りにきていて、あなたは自身が買つて食べ

ただけではない。気がふれて自分の名前も忘れてしまい、このため誰も探し訪ねて来てくれなかつた女性がいて、あなたはそのひとにも与えて慕われていた。アメリカの医学調査チームが来たさいには殺されるのかと恐れたようで、身体を露出してみせ命乞いをし、顰蹙をかいといには隔離された。そしてその後二度と見ることがなかつた。あなたはその女性について話し、それが正道によつて詠まれている。

熱き涙あふれんとすも命怖ぢてひとり病み伏す女の話

少なからず分かりづらい歌であるが、「熱き涙」云々はあなたがそのような状態で話したということを言つてゐると思われる。ついでながら正道はこの後長期に入院し、そのまま逝くことになつた。あなたはシベリアを西進する列車のなかで、「主人の死はそんなに悲しかつたわけではありません。一緒に過ごした期間が短かつたですから。あの後の、兄の死のほうがずっと悲しかつたです」と語つた、遺稿集の「広島」の節は次の句で終わつてゐる。

戦いを聖たまごとしと言ひし此の国の遂に敗るる時にぞ会ひし

収録されている日記は一九五〇年の元旦から始まつてゐるが、その中には自身の「敗戦のころの古い手帳」からの抜き書きが挿入されている。「何となれば、平和とは、戦争の無きことならず、そは魂の力より生まれる美德なればなり」。スピノザ（1632～77）の今日では『国家論』と訳されているが、一九四〇年開戦直前に岩波文庫に訳出された時には『政治論』だったものからの書き抜きであり、かつ文語文だったらしい本の第五章「国家の目的について」の第四節からのものと読まる。同じ訳者の畠中尚志氏による一九七五年の改訳では「實に平和とは戦争の欠如ではなくて、精神の力から生じる徳だからである」となつてゐる。またこの節は「臣民があたかも獸のように導かれただ隸属することしか知らない国家は、国家というよりは荒野と呼ばれてしかるべきである」と結ばれており、正道の敗戦直後の関心の所在を明らかにしている。

すべての日本人が「ただ隸属することしか知らなかつた」わけではなかつた。戦争に抗して投獄され、敗戦によつて出獄してきた少数者がいた。その一人を良人にもつ宮本百合子の『播州平野』への感銘が記されている。「淡々とした描写の中に感じられる作者の人間愛、正義感、明日への限りない希望と信頼、こんなに素直で明るい希望にあふれた文学が、これまでの日本文学にあつたろうか」またロマン・ロラン『魅せられた魂』からの抜き書きが記されている。

東京の初期全学連傘下の諸大学のレッドページ反対闘争への共感、それへの弾圧への反

感を述べたと思われる句もある。

みな貧しく病みつつ何を恃めるや今朝も彈圧の記事は伝わる

『花火』の前半は日記からの抜粋であり、最後に一句が掲げられている。統いて歌集に移ると、最後の「ヨーデル」の小見出し纏められた十一句があり、その最後に日記の最後に記された句と同一のもの、「ヨーデル」が出てくる一句に出会う。すなわち日記の最後と、全四六〇首の掉尾を飾る句とが合わせられているのである。編集者の処置だったと推定される。そしてこの句が念頭にあつたためだろ、あなたはウイーンのレコード店でヨーデルを買い、わずかに一日だつたが、最後にはその本場であるチロル行をも果たしたのだった。

声遠く丘にヨーデルに呼ぶ聞ゆ吾がために幸を呼ばふ声とも

たいへんな美男であつたことは『花火』の冒頭に掲げられている写真からも窺うことができる。「美しいのは兄であつて、私は兄の前では、美しい」と言われたことはなかつた。「和子さんは明るい」と何度も私は聞かされた。「面白可笑しいことを言って、ひとを笑わるのが好きだつた」そうで、それはだれもが認めたことだつたようだ。そのような生まれついた性格のひとだつたが、正道の日記には「和子は美しいから」といったような言葉が何度も出ている。

勤め先（大分県庁）では目立つらしいが、自信と経験を得てゆくのは喜ばしい。
生活を楽しむということでも、なかなか良い技術を持つていて。頼もしい・

和子はいつも明るい。和子は家の青空。不幸といえば、随分不幸なことが多かつたが、和子はいつも明るい。「美しく、強く素直なれ」こんな言葉を召集されたとき、彼女のために残したのだつたが、言葉とほり、彼女は美しく、強く素直だ。

明るき芝生を踏みて帰りゆく妹よサンダルの背高くして

あなたは炭鉱主かなにかの大金持に「妾になつてくれ」と言い寄られ、勤め先にまで来られて怒つたことがある、と話した。それを指すらしい文言も記されている。

編者の渡辺氏が「生命を大切にし、美しい心を持ちづけて死んでいった人の言葉であり、生きている人々を励ます」と「あとがき」に記しているが、今日私はこれによつて目を開かされ格別に励まされている、それというのも正道氏の死によるあなたの傷心がどんなに大きかったかがわかるからである。当時肺結核の特効薬のストレプトマイシンが非常に高価で辛島家の家計を圧迫し、あなたも勤め以外にも洋裁をして助けていたことが正道

の日記からも知られる。その一方で、「原爆に遭っているんだから結婚はできやしない。しかしもつたいない。大事するから、私のメカケになりなさい」と言い寄られて腹も立つたのだろう。「メカケっ！」と吐き捨てるように私に語っていた。

正道氏は一九五三年に満二八歳で没。渡辺氏とのあいだで歌集の製作の協議にはいつた頃、一九五四年一月ビキニ環礁での米水爆実験より、マグロ漁船第五福竜丸が被爆し、無線長の久保山愛吉氏が亡くなり、三月静岡県焼津で葬儀があつた。あなたのなかで何かが炸裂したかのようだ。あなたは大分県庁労組から男子の一人とともに代表としてこれに送られており、大分駅頭での写真が残っている。

原水爆禁止の署名運動が起り、日本原水協が発足し、この年の八月、第一回の原水爆禁止世界大会が東京（前半）と広島（後半）で行われ、「生きていて良かった」の声が壇上の被爆者から発せられる。第二回は翌五六六年長崎で行われたが、あなたは県知事を会長として結成され、秘書課長が事務局長になつていたその秘書課員で、その大分原水協の一員としてこれに出席、被爆者代表のひとりとして演壇に立つてている。この大会は出席した被爆者たちにより日本被団協の結成宣言がなされた大会でもあった。あなたはこの協議に参加しており、発足した大分被団協で初代の事務局長となつた。会長は広島で会つていた山田登美子女医で夫君に従つてその出身地である大分市に移り住んでいたのである。二人で共に日本被団協史に名が出ていて、この被団協は県の協力をえて別府市に全国の被爆者が利用できる温泉施設をつくつたことで、日本被団協内で注目されていた。

翌一九五七年一月日本原水協は全国理事会で「米英ソ三国は原水爆の製造、保存、他国への持ち出しを止めよ」の決議を行い、その三国に使節団を派遣することにした。二月西北大露文の卒業を控えていて、私、瀬川修はそのソ連班にロシア語スタッフとして加わることになり、七月、その団の諸氏とともにヨーロッパ経由でモスクワに飛んだ。クレムリンで首相のブルガーリンの接見をうけて会談、各地を回り、帰路にはモンゴルと中国に立ち寄つた。北京では東京の第四回世界大会に参加した中国代表団の団長だった魯迅夫人許広平、副団長だった廖承志氏主催の晩さん会に招かれている。

ソ連では日本語学者ザルービンらソ連側の日本語スタッフに助けられたが、ウランバートルの三日間はこれが無く、食事中もひとりロシア語を話し続けなければならなかつた。若かつたのに疲れ切つていて、到着の翌日の万里の長城行には参加せず、ホテルで伏せた。また中国側の通訳から「瀬川さんは日共党員ですか」と問われ、「そうです」と答え、「どうして（それを）聞かれるのです？」と問うた。国民運動として発足した日本原水協の団にあつて、飛び離れて若い私だけが、学生運動出身の日共党員だった。しかしソ連ではそんなことは聞かれなかつたので、尋ねたのだった。「廖承志さんから、確かめるように、と言われましたので」という返事だつた。そしてその夕べの宴席で、早大への留学生だった廖氏から「帰つたら宮本（顯治）さんによろしく」と小声で囁かれた。帰国して、なんとなく実行せず、やがて忘れてしまつたことである。

モスクワでは同時期に第5回の世界青年学生平和友好祭というものが開催されていて、日本からも七〇人からなる団が参加しており、私たちはレーニン・スタジアムでのその開会式を来賓席で見ていている。また八月六日のマネージナヤ広場でのヒロシマ記念集会に出席している。閉会式の同じスタジアムには「一九五九年にウイーンで会おう」の電光板の明滅があった。二年後の次回の場所がウイーンであることが告げられていた。

あなたは大分県代表として、このとき東京で行われた原水禁の第3、翌五八年の第4世界大会に出席し、五九年にはこのウイーン平和友好祭の日本被団協の二人の代表の一人として選ばれた。いま一人は後に広島で数期にわたって原爆資料館の館長をつとめることになつたT氏（当時市庁職員）だつた。しかし彼は乗船地の富山県伏木で倒れ、医師により出国を差し止められ、あなたがただ一人の代表となつた。

私は南樺太（現サハリン）に生まれ育つておりソ連占領下で一年半暮らし、将来樺太について書かねばならないと思って引き揚げている。そしてその目的にもつとも適した学科と信じかつ願つて、当時はそこだけにあつた西北大の露文科に進んだ。しかしロシア語の勉強に集中し、またある程度まで学生運動に係わつたが、樺太については書かずまた書けず、そういうするうちに、日ソ国交回復後の早い時期に原水禁運動からソ連に出される機会をもつたのである。このことがなければその二年後にウイーン平和友好祭に行くこともなく、あなたと出会うということもなかつた。翌六〇年二月に結婚、若干曲折があつたが、一般的の貿易商社に入り、ソ連担当部門で、また数年だつたが中国をも兼務して働くことになつた。

この間「樺太について書く」という私の初志にして課題だつたものはどうなつたのか。私がそれを達成したのはようやく一九八四年になつてであり、五十歳を超えてであつて、「樺太よ遠く孤独な」という四二〇枚の一冊によつてである。

このはなはだしい遅滯が私の才能不足によることは明らかだが、また同時にそれは樺太のテーマの難しさにも起因したのであつて、私があなたの良人を長くやつてきたことが預かつて力となり、どうにかそれを克服して書けることになつたものなのである。

ソ連占領下の大泊（コルサコフ）で十月、再開された中学校の最初の授業で、二年生だつた私は、数物の教師から新型爆弾と報じられていたものの真の名称、および核爆発の初步的原理を一時間にわたつて教えられた。またそこから導かれる今後の世界戦争の不可能性の説に多大な感銘を受けた。私はそのことを記しながら、配偶者が原爆被爆者であることを明かし、その遠因がその授業にあつたと注記した。

長編の作品の前半で、生まれ育つてから引き揚げるまでを詳述した私は、引揚後の人生については駆け足的に記述した。すなわち大学を終えてすぐ、日ソ国交回復宣言があつてまだ一年とは経つていなかつた一九五七年七月、発足して三年目の原水爆禁止運動の団体の代表団にロシア語スタッフとして起用されてソ連に行つたこと、またその延長として一九五九年にウイーンで行われた世界青年学生平和友好祭といったものに行き、日本被団協の

代表として出されていたあなたと出会い半年後に結婚したことを記す。

「樺太」の表題からは予想されないあなた、つまりはヒロシマのテーマが加わることのなったのは、樺太以来の初心がこれによつて一時変容を蒙つたからだつた。あなたとの間に生まれた最初の子（男子、ツヨシという名だつた）がファロー四兆症という重症の先天的心不全の子だつた。この不運はあなたの原爆被害と無関係だつたはずではなく、私は心秘かに「樺太のヒロシマの子」と呼んでこの試練に対した。四歳十か月で他界。以後私はその子の死を目標に、あなたとの出会いから結婚に至る過程を書こうと努めることになった。つまりはテーマの移動と変更があつたのだ。しかし、その物語は数年におよぶ努力にもかかわらず、どうしても書き上げることが出来なかつた。

そうこうしているうちに、引揚後に住んだ北海道十勝の帶広で出会つた女子の一人を除くと、絶えて久しく会うことのなかつた、樺太の故郷の遠淵村の小学校同級生との再会が実現し、それが拡大することになつた。こうして一九七二年の北海道洞爺湖温泉での集まりで、長く忘却されていた記憶の回復があつたのである。私はこれに助けられて初源のテーマだった樺太に回帰することになつた。すなわち私はわが家とかかわりのあつた露日の夫婦の一家、その息子・娘である兄弟姉妹との係わりを中心とした物語を書くことになつた。

わが家に通つてきていた混血のお手伝いと、その縁で交わることになつた二歳年長の男子から私は物語り始めた。その子に従つて遊んでいるうちに、その子をめぐる悪童たちの騒動に巻き込まれることになつた。災難が自分にまで及んだので幼かつた私はその子から逃げ出している。私はその際に悪童たちがキヨミに浴びせていた「ロスケ、ヨツボイマツ、鼻高のつば」というはやし言葉を紹介しており、それがロシア語の卑猥な罵倒を著す命令形の三語の短縮形ヨツボイマツの崩れた発音形態であることを注記した。「お前のおつかさんを犯しな」が原意のバカヤローである。

類が及んで私までもが「タボ（ター坊）、たん瘤、十二瘤（こぶ）」と脅されたのであり、私としては逃げ出さざるをえなかつた。このことがわが人生のトラウマとなつた。私はキヨミをめぐるトラブルは忘れなかつたが、ロシア語であることさえ知らなかつたこの意味不明のこの「ヨツボイマツ」の語については、記憶を喪失するというよりは、強引に忘却にゆだねたフシがあつた。

大泊で、ソ連占領下で暮らすようになつて、最初に覚えた十語には入る言葉に、バカヤローを意味すると正しく理解したヨツボイマチという言葉があつた。しかし発音が類似している遠淵のヨツボイマツについては、当時すでにまったくその記憶を失つていて、それを思い出してはいない。しかしマルグリット・デュラスは、「それを説明するのは難しい」と補注しながら、「忘却もまた記憶の一種である」と述べている。私の人生はこの「失われた記憶を求めて」のものだつた。あなたとの結婚もその途上の出来事だつた。

敗戦から一年たつた夏、ソ連による勤労動員で私は遠淵の南のS村に送られ、塩蔵魚つくりの労働に従事する。私は自分が将来樺太について書く、否、書かねばならないと思い始めた。しかし書かるべき樺太とは何だろうか。それは遠淵であり、キヨミだつた。この

ため私はこの混血者の戦後の変化を見届けるべく、願い出て休みをもらい、ソ連軍のトラックに乗せてもらつて村に行く。

キヨミを含む一家の人々に会い、二泊三日後に村を去ったのだが、往路とは異なつて徒步で帰つたのであり、最後に、そこからは下り道になる丘の上で、大きな鹹水湖のほとりのそこの村に別れを告げている。私は歴史と社会の大きな激変にもかかわらず、かつての日と変わらぬ湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を認め、生涯記憶し続けることとした。それは私という人間が成立した瞬間であり、やはり、後にあなたにつながつた体験だった。

長い忘却の後、一九七二年になつてこの記憶を回復してから知つたのだが、私が書こうとしていた樺太とは、ずばりこの失われたヨッポイマツという一語の記憶であった。かくて私は、引き揚げて日本に住むことを知りながら、訪ねて会うことをしてしまつた。かつてお手伝いだつた女性を始め、その血縁の人びとを訪ねることになる。樺太の甦りであり、それへの回帰だつたが、しかしそれはまた、私の職業柄から、ソ連の深みにはまることになつた時期と重なつた。そして私は彼ら混血者たちの再会、相互の訪問が実現するためには、ソ連の崩壊に近い激変が必須であるという結論に到達する。しかしそれはまだ先のことである。

動員先のS村からは往路と同じく船で帰る。大泊の家ではその半年前からソ連の技術者のクロポトキンが入つていた。休みの日にはわが家の居間のストーブのそばでトルストイの『戦争と平和』全四巻を読んでいて、自室に帰る際には置いていたのでその露文に見入り、前途の引揚を想い、それを理不尽に思つた。すると奇妙にヨッポイマーチがこみ上げてきて、私はついに彼にその言葉を浴びせたのだが、これをヨッポイマツの失われていた記憶の仕業ではなかつたとは言えまい。マルグリット・デュラスは「忘却もまた記憶の一種です」と述べ、「ただしそれを説明するのは難しい」とした。そのような形態で私のなかではこのヨッポイマツは生き続けていて、数日後、読書するクロポトキンにこの語を浴びせ、彼を驚愕させ、この出来事がまたもや私を強く支配することとなつた。

この思い出は強烈だつた。引き揚げて数年して、私は一家の分裂とキヨミのサハリン残留を知ることになり、心痛する。そして反射的にクロポトキンとの出来事を思い出す。私は書店に行きトルストイの邦訳『戦争と平和』を買って帰り、読み終え、医学部志望だつたのに西北大露文を目指すことになる。ヨッポイマーチの方は大学二年の年に俗語を収録した辞書を引いていてフル・センテンスと原義を確かめ得た。しかしヨッポイマツの方は忘却していく、まことに一九七二年に至るまで思い出すことがなかつたのである。その記憶を回復すると、まことに鮮烈強力なその語が、どうして記憶に失なわっていたかといえば、幼かつた（三、四歳？）私が記憶し続けるこの苦しさから意識的かつ強力にそれを記憶から葬つたものだつたからである。

八人の兄弟姉妹のうちでもつとも親しかつたのはお手伝いだつた女性であり、一九七四年になつて、ようやく彼女を富山県に訪ねた。またその姉にあたる人と東京で会い、北海道の両親が上京しわが家に泊まつたときには、在京の他の数人の旧村人とともにわが家に招

コメントの追加 [t1]

いた。あなたは私たちの会話を入ってこられず、給仕をしているだけだった。（ずっと後、世紀の終わり近くに、あなたの大分市での幼馴染、トリウム熔融塩炉学者の古川和男氏が拙宅に見えたさい、私が挨拶しただけで外出したことの理由の一半は、このときの記憶にあった。私は同郷の大分市同士で心ゆくまで話させようとしたのでもあった）。

日本全体がそうだったはずだが、私たち権太人は学校の内外で「日本人の発見になる日本領であり、ロシアの東漸により一度は奪われたものを、日露戦争の勝利によって回復したのである」と教えられてきた。ところがその地にソ連が「サハリンは発見においても領有においてもロシアが先行し、侵略的な日露戦争によって奪われたものを、回復するのである」と称して侵攻してき、翌年早々には領有宣言をおこなった。また「全世界は偉大な教導者スターリンが指示示す道に従つて進む」ということだった。いつたい全体これらは正しいのかといふことは、やはり権太以来の疑問であつて、書くために解決されねばならない問題だった。もつとも戦後一九五〇年代日本の左翼でスターリンが全盛だった時期の学生だった私は、この問題に深入りするのは、今は得策ではない、と判断するに至つたのであって、ロシア語の習得の方を優先した。とはいえる私のクロポトキンが別れしなに「ソ連は良い国ではなく、スターリンは悪い」と言つております、この言葉を忘ることはできなかつたのであって、ソビエト文学に接しつつも、その問題は追求した。入学後、レーニンも読んだが、より多くマヤコーフスキイのレーニンとロシア革命をたたえる叙事詩などによつてロシア革命を肯定した後にも、スターリンへの疑問はしょくされずにいた。

こうしてやがてレオニード・レオーノフ（一八九九～一九九四）に遭遇し熱中することになる。戦前すでに二編の長編の邦訳のあつた作家である。ソビエト文学ではドストエフスキイの影響がもつとも色濃いといわれていた人で、とくに捉えられたのが、第二次大戦・独ソ戦下の四幕戯曲『襲来』（一九四三）という作品だった。それは次のような内容のものだった。

第一幕

独ソ開戦の直後、ドイツ軍が明日にも入つてくるロシア西部の町。そこにフョードルという青年がシベリアかどこかで三年の刑期を終えて町に帰つてくる。しかし医者の父の家には寄り付かず、町をうろついていて家人は噂として聞くのみである。やがて妹のオリガが兄を見かけ母に注進する。ようやく家に現れ、母親は喜び迎えるが父タラーソフは冷静である。フョードルの罪は片思ひによる、未遂に終わった情痴事件のようである。唯一の擁護者は彼を育てた乳母であつて、「いいんだよ、あんなやくざ女を殺そとしたことなんか、あんたの良さが分からなかつた女なんてね」と言う。そこにオリガの恋人である町の権力者、共産党委員長のコレースニコフが訪ねてき、フョードルは衝立の陰に隠れる。

コレースニコフは、車を用意してきたので、独軍がくる前にそれで退去するようタラーソフに勧める。しかしタラーソフは「独軍下で私は必要となる」と固辞し、逆に「あなたは？」と問われ、オリガらを従えてパルチザン活動に入ろうとしていることを打ち明けようとしたところで、コレースニコフは人の気配を察知し黙する。フョードルは衝立を出て来ざるを

えなくなる。二人は顔なじみであり、彼ら工業学校の生徒は、フヨードルらの中学校生徒とは仲が悪かった。彼はコレースニコフの意図を察知して挑発的にバルチザンへの参加を申し出、共産党員は「私も退却するのです」と嘘をいう。彼は「危険な人間は容れない、ということですか」と悪態をつき、父親に注意されて家を出て行く。

刑期を終えて町に戻ってきたのはフヨードルだけではなかつた。老人が現れてそれが革命前には富裕な商人だったファユーニンであることが明らかになる。真っ先に気づいたのはタラーソフの使用人であるココールイシキンであつて、「お帰りなさい」と歓迎する。元商人は独軍の到来を資本主義の復活と歓迎し、「新しい年が来ました。主よ、祝福を与えたまえ」と重々しく十字を切る。同時に窓からはドイツ兵らが顔を出す。

第二幕

タラーソフが住む家は、かつてはファユーニンのものだつたようで、当然の権利を主張するように、家に入り込んだ彼は主人顔に振る舞う。またすでに占領軍と通じており新しく町長となる約束も取り付けている。形勢を見るに敏なココールイシキンはすでにファユーニンの手足となつていて。

バルチザンは活動を開始し、独軍に死者が続出し、その一人ひとりに「よくいらっしゃいました アンドレイより」の書置きが残される。これはイワンに次いで多い名ではあるが、ファユーニンは、医者の職業がら、町の住民全部と面識があるはずのタラーソフはそのアンドレイがだれかを知つてゐるに相違ないと睨む。それで彼に手紙を書かせ、「犯人」を家に誘き寄せる相談をもちかける。もつて占領軍の覚えをめでたくし、家の接収を免れようという算段なのである。というのも司令官ウイッペルが家に目をつけていて検分にくると聞いたからだつた。

ウイッペル将軍が亡命ロシア人の息子である通訳モサーリスキーを伴つて現れ、それに對しファユーニンは「ここは、私が半生を過ごし、コミニズムとの勇敢な闘いで倒れた息子をもうけました家であります」と述べる。またタラーノフを紹介して、「この方の息子さんは「嘘だ、事実じやない」と制するが、「（赤軍との戦闘で）名誉の戦死をとげたわが息子とともに…」と続け、モサーリスキーに「はやく部屋を見せなさい」と急き立てられる。この間別室でその副官クンツが乳母の孫娘アニースカを犯す。

「アンドレイ」とはコレースニコフの名であり、彼を長とするバルチザン隊の代名詞である。そのコレースニコフが肩に弾を受けて負傷し、手当が必要になつてオリガがタラーソフのもとに連れてくる。彼女は兄の罪には両親をふくめて一家の全員に科があると考えていて、それを一身に背負つて償おうとしている。しかし家はすでに包囲されていて絶体絶命であるだけではなく、タラーノフ一家の全員も類を免れえない状況である。

コレースニコフは手当を受けながら、「この八年間あなたとご一緒に働いてきました。私はあなたの病院の予算を削った、燃料も必要なだけさしあげなかつた、会議の席ではおおい

に争つた。すぐそばで暮らしていながら……」と詫びる。タラーノフは手術に集中していく助手のオリガに指示を与えていた。「そのあいだずっと、一度も心を割つてお話ししたことありませんでした。いえ、もう痛くありません……」そして急にこみ上げてくるものがあつて、「実際、そんなふうに誤った眼で見られた友人たちがこの国にはどれほどいることでしょう」と飛躍する。

窓枠が激しく叩かれ、ざわめきが起り、コレースニコフは衝立の陰に隠れる。フヨードルが入ってくる。「(外は) 検査さわぎだ! (オリガに目配せし) 私には誰を追い回してのか、ちゃんとわかっている……」。オリガはその中をどうして兄が通つて来られたのかが不思議で、「夜間通行証でも貰つているの?」と尋ねる。フヨードルは武器をもつていると威張り、「寒さで凍えているので」とアルコールを所望し、父に断られる。家族全員が怒り、母親までが罵倒する。タラーノフは「これ以上はない強い薬をやろう」と言つて、カーテンを開ける。そこには痛めつけられたアニースカを介護する乳母。タラーソフは「泊める場所がない」ことを理由に、息子に出て行くよう求める。フヨードルは父に額にキスしてくれるよう求め、タラーソフは苦笑。オリガが戻ってきて、卓上の血に染まつたガーゼに気づき、慌てて隠そうとする。それがフヨードルの疑惑をまねき、わきに回つて衝立を払い、コレースニコフに「あなたには莫大な賞金がかけられていますよ」と言い、相手は「知っています」と応える。

フヨードルは「出て行け」と自分に命じて出て行き、その背中に妹は「大金もうけができるわね! 女にこだわるだけの道化者!」と罵声を浴びせ、兄は振り返つて一同を笑つて見返して去る。こうした事態を知らぬままに、離れの自室からファユーニンが引つ越しの挨拶にやつてき、一家の三人はコレースニコフをフヨードルとして紹介せざるをえない羽目になり、その負傷を「前線を通過して来たさいの負傷」とごまかす。しかしこコールイシキンの目にはこのすり替えは通用せず、乾杯の際にも手が震え、誤つて「よくいらっしゃいました……」を口にしてしまう。ト書きには「秘められた歓喜」と記される。これはファユーニンにも伝染する。

第三幕

同じタラーノフの部屋、ただし今や新町長ファユーニンの執務室となつていてココールイシキンが出す書類に目を通している。問題は、アンドレイがまだ捕まらないのでロシア側の警察署長がゲシュュタポのシップブレーから譴責されていることである。ココールイシキンは手柄をたててその後金にすわろうと願つてゐる。モスクワが落ちれば廃止になるループルの賞金ではなく、地位が狙いである。しかしモスクワが落ちたからといって戦争は終わるのだろうか? 「モスクワの向こうにはまだヴォルガがあり、さらに向こうにはウラル山脈が雪の外套くるまつて寝そべつてゐる。さらにその先は——大河と森林のシベリアだ。その先は、いつたいどうなつてゐるのか、まつたくもつて分からぬ! 北極光がさまよつてゐるだけだ…… ロシヤ——こいつは、なあ、齧れば齧るほど、残りの方がますますふくれ

てくる肉饅頭のようなものだぜ！」と新町長はぼやく。

ファユーニンの誕生日なのでロシア側の客は集まっており、占領軍指令官シブレーの到着を待っている。それに先立つてゲシタボ長のシブレーが到着し、ココールイシキンは誤つて「よくいらっしゃいました」を二度続けて口にし、この言葉に苛立つて立っているシブレーの逆鱗に触れ、「お前がコレースニコフなのか？」と首根っこをつかまれ、部屋の入口で部下に引き渡される。ファユーニンに救いを求めて「ニコライ・セルゲイヴィチ」と叫ぶが、一発で処刑される。司令官の到着が遅れたまま、開会となり、モサーリスキーがメッセージを代読する。「歴史的必然の最後の一行為が書かれつつあります。スラブ民族によって古く窮屈なヨーロッパに告詰めにされたようになつて、いたゲルマン民族は、いまやそのコルク栓を叩き破つて新秩序と指導原理をもたらしつつ、奔流のように東にほとばしり出たのであります。いまこう申し上げている最中にも……」電話が入り、シブレーが受話器を取るが、モサーリスキーは続ける。「モスクワは陥落するのであります！」

電話はウイツペル司令官ほか三人が殺害されたというものだった。犯人はひとりであつて、十連銃が使われて全員即死ということである。犯人はその場で捉えられ、連れてこられる。誕生祝いは訊問の場に変わる。こうしたことを知らずにタラーノフ夫妻が遅れて現れ、これに立ち会うこととなる。

引き立てられてきたのはフョードルであつて、彼は人払いを求めるが、ファユーニンの「面通しの必要」の主張が認められて、夫妻は止めおかれる。一服を所望し、訊問にたいして彼は「名はアンドレイ、姓は——コレースニコフ」と応える。また地位と身分、職業は「ロシア人にして、祖国を守る者」と称する。また最後の職業を問われて答えずになると、ファユーニンが発言して「ソビエト政権の郡長でした」と答え、タラーノフに同意を求める。夫人も同意する。求めて退席を許されて、彼女は床に落ちているフョードルの血痕のついたハンカチを拾いあげる。結核による血である。モスクワ近郊の戦況不利の報が伝えられて尋問は延期され、占領者たちは退場。ひとり残るファユーニンのそばにコレースニコフが現れる。「悪党をつかまえたのに、どうして喜ばないのだ」と問われて、ファユーニンは町に向かって戻つて来る途中、後退する部隊の若い兵士に励まされたことを物語る。「嘆きなさんな、おじいさん。ロシア人は必ず戻つて来るんだからね」と言われたのだ。さらにまた彼は、かつては店の門番だったコレースニコフの父親と商品を亞麻畑で買い付け思い出を物語る。子供への土産として菓子を与えたことを言い、覚えていないかと問う。本物のコレースニコフであることを知りつつ見逃してやつたのだから、その恩を忘れないでくれと頼む。

第四幕

地下倉庫が臨時の拘置所に使われている。半円形の窓が二つあつて、そこから外が見える。エゴーロフ、タターロフ、オリガの三人のコレースニコフ配下のバルチサン隊員が捉えられて収容されている。他に毛皮外套の老人とその孫にあたる少年。狂人がひとり混じつていて、ドイツ側に内通していることが気づかれている。ドアの外には番兵。

パルチザンの三人がたがいに訊問の様子を語り合う。タターロフは、コレースニコフの人相をしつこく聞かれ、教えてやれば、捕まえてこられるのかね、と皮肉ったことを話す。そうこうしているうちに、「連れてきたぞ」と声がしたのである。「見ると……」と言いかけ、狂人の存在に気づいて口をつぐむ。地上の様子が気がかりで箱を積み重ね、身軽な少年を登らせて外を観察させる。絞首刑用のブランコ状のものができていることが報告されるが、音により上空に飛行機が飛んでいることが知られるが、敵機か味方機かは不明。高射砲が鳴りはじめ味方機であると分かる。階段をのぞき見したオリガが仲間に「コレースニコフは訊問から連れてこられたようよ」と告げる。フヨードルが変わり果てたアンドレイとして連れてこられる。「一体何があつたの？　話してちようだい」のオリガの問いに、兄は「話せば長くなるよ」と答えるのみ。

処刑を覚悟して、老人は孫に「スターリンが見守つてくれているからな」と落ち着かせる。オリガが兄に「まだあの女のひとを思つてゐるの」と問い合わせ、彼は「うん」と答える。パルチザンの三人はフヨードルを交えて会議を開く。身代わりの動機について尋ねられて、アニースカが原因だつたと答える。「おれは諸君に命をさしあげた……しかし受け取りをくれとは言わないよ」。

シプレーが入つてきて皮肉たっぷりに「よつく、いらつしやいまつした」と下手なロシア語で処刑を告げる。三人ずつ、とのことでその最初はフヨードルを含む男の三人、別れぎわに、次の三人に入ることになる妹に向かつて彼は「もしお母さんに会えたならば、こう言ってもらいたいんだがね……」と切り出す。「あの晩、ぼくは一滴も飲んでいなかつたのだ、と。ただあのときは何日も眠つていなかつたので、ほかに行くところはないし……」。

少年は祖父に「スターリンは背の高い人だつたかい」と聞き、それに促されてオリガが老人に「スターインに会つたことがあるの？」と聞く、相手はクレムリンでの或る農業関係者の集会の話をする。スターインと農業といえばこの時代スターインに賞賛されて猖獗をきわめていたルイセンコ派が思い出されるが、もちろん作中では伏されている。ルイセンコが完全に失脚するのは、フルシチヨフ時代の末期、この作品の改訂版が出された一九六四年になつてのことである。以下の文もその中では完全に削除されているが、私は一九四一年の初版について述べている。

老人「農作物のことでね、おれがちょっと珍しいものを育てたもんで……（ありありと目に浮かぶように）あれはとても広いホールで、千人から人が集まつてたが、それでもがらんどうとしていて、みんな石ころ同然に見えたものさ。そこへひとりの人がはいつてきたのだ。とたんに隙間というものが無くなつてしまつてな、急に窮屈になり、全体が熱くなつた」。

広場で処刑が始まると、背伸びして見ていた少年は顔をそむける。ト書きには「二度、スターイン、スターイン！」の叫び声が聞かれ、途中で消える」とあるが、「二度」と記されているところに意味がありそうである。フヨードルは死にあたつてスターインの名は口にしなかつたのである。この間、高射砲の斉射音が鳴つていて、老人は処刑の太鼓の代わりの「礼

原作：大庭義人 設定：山本一郎

砲」かと疑っていた。やがて「空が見えなくなるほど」、パラシュート部隊の降下を少年が一同に伝える。「スターリン、スターリンガ来たんだ！」と叫ぶ。牢屋の人々は泣き出す。板張りの窓が銃床でたたき壊され、数人が下りてくる、先頭に立つのはコレースニコフ。オリガを認め、「お母さんに会えるよ」と言い、「フヨードル・タラーノフ、……フヨードル！」と探し呼ぶ。パラシュート部隊には「ロシア人はかならず戻って来る」と言った兵士が混じついて、オリガに傷の手当をうけながら、連れてこられたファユーニンと対面する。タラーノフ夫妻が登場。二人はすでに処刑されたフヨードルを見てきている。

オリガ　ママ、目が乾いているじゃないの、いけないわ。フェージャのために泣きなさい、ママ。あの人は出て行つた。そして今また戻ってきたのよ。兄さんはママと並んで立つているわ。

アンナ・ニコラエーヴナ　あの子は帰ってきた、あの子はわたしのものだ、あの子はわたくちと共にいる……

私は樺太でソ連を見。スターリンを体験して引き揚げている。その主要なすべてについては樺太の本の中で物語つており、その際、その地の最初の発見者が日露のいざれかという問題では、チエーホフの『サハリン島』に依拠した。すなわちチエーホフの「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」を始めとした一連の親日的、より正確には国際主義的な文言のすべて掲げ、それを正しいものとして記述した。つまりはソ連が第二次世界大戦後「サハリンは発見においても領有においてもロシアが優先し、日本が侵略的な日露戦争により略奪したものを、スターリンが取り戻したものである」としていたことを誤りとした。ただしその際、ソ連時代の作家レオーノフがチエーホフについての講演で「祖国を愛しながらも、彼、チエーホフはそれに媚びなかつた」と記していることは承知していたが、それについては特には触れなかつた。

私がこれを掲げることになつたのは、樺太の本から十九年を経た二〇〇三年の著書『日露領土紛争の根源』のなかにおいてである。

スターリンはソ連においてだけではなく、引き揚てから見ることになつた日本においても、左翼の世界では、猖獗を極めていた。スターリンは神のごとき存在であり、大学入学後に接することになつた共産党細胞ではその『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）史』は必読の「聖典」と見なされていた。一九五三年に死去したがまだその余波は残り、一九五六年のフルシチヨフらによる、秘密報告という形でなされた批判が現れるまで、それは続いたのである。私が『襲来』に心ひかれたのはそこにスターリン批判の臭いを嗅いだからだつた。そこにも確かにスターリン贊美の文言は存在するが、見られたように、子供がスターリンを偉いと思っているのであり、ありうることで不自然ではなかつた。主人公が流刑されていたとする設定が尋常ではなく、その無実の意識は強烈に描出されていて、私には反スターリンの作品と読めたのである。

実際この作品は雑誌掲載の段階で物議をかもし、作者がクレムリンのスターリンに電話し原稿を送って読んでもらい、「このまま発表されるよう望む」というお墨付きをもらってようやく掲載され、すると今度はすぐにスターリン賞の一位をとるということに相成つている。私自身尊敬していた戦前のプロレタリア文学運動の指導者、ロシア文学者でもあった蔵原惟人氏（当時は党分裂で排除されていたが、後に文化部長）は、この事実をもつて、スターリンが文学をよく理解していた証左であるとしていた。しかし私には情痴事件による刑というものは偽装であると思われたのである。蔵原氏にはそのことが見えてはいなかつた。樺太に導かれるようにして進んだ西北大露文の生活だったが、入会したソビエト研究会のなかでは時代がもたらしていたスターリン的なものの重圧が存在し、一時私は樺太を忘れようと努力することになる。そのための方便として共産党（所感派）に入つてみた。しかし後になって、党統一への逆流だったと知られたのだが、五四年秋に総点検運動というものの締め付けが起り、それに抗しきれず、細胞の活動を離れた。そのきつかけとなつたのがレオーノフ、特にこの作品だったのである。私は党活動には背を向け、レオーノフ作品集（露文）に集中した。

翌五五年六月に党の統一にかんする決議が出て活動にもどり、以後、一貫して統一会派（国際派と俗称）に属していた松尾隆教授に私淑することになった。翌五六六年一二月に亡くなつたが、その人が日本平和委員会の常任理事だつたので、その縁で日本原水協からソ連に出される機会をもつた。またその延長もしくは継続として、その二年後、あのウイーン世界青年学生平和友好祭の日本代表団のなかで、日本被団協代表のあなたに出会い、翌一九六〇年早々に結婚することになった。

一九五九年の百五十人のその団ではモスクワ留学を目指していた私だが、諸般の事情でそれを実現せず、あなたと結婚して、始まって間もなかつた日ソ貿易の会社員になつた。しかしレオーノフへのうち込みは續き、一九六二年にこの人が日ソ文学交流で来日した際には、会う機会がえられて、積年の疑問を直接氏にぶつつけていた。「その件では、現在改作をおこなつており。近く公刊するので見てもらいたい」ということで、一九六四年刊行の新しい戯曲集でそれを読むことになつた。

フョードルの女性問題は完全かつ全面的に削除されていた。またそれと連動するようにスターリンの名がほぼ全面的に削除されるか書き換えられていた。たとえばバラシュート部隊の降下を、少年は「スターリンが来た」と叫んだのだが、「わが軍が来た」と変更されていた。私の読みが正しかつたことが証明されたのである。

それではこの主人公の「科」はいつたい奈辺にあつたのか？ 明瞭を欠いてはいるが、何らかの形でのスターリン批判の言動が原因らしいのである。周囲のだれにもが分からぬ理由によって逮捕され、流刑地に送られたことにされている。確かには、ファユーニンが言つたような、革命後の赤軍と白軍によつて戦われた国内戦で白軍に加担して戦つたという罪だつたのではないことである。

新戯曲集には、『襲来』とは異なつてまったく発表が許されず、闇に葬られていたやはり

四幕の戯曲『吹雪』（一九三九）が収録されていた。北国育ちなので私にはよくわかるのだが、激しい吹雪のときには視界がまったく効かなくなるのであり、これはまことにそのようだな、一九三〇年代後半の、密告と肅清により國全体が疑心暗鬼の闇に閉ざされた状況を写出した作品なのである。当然のことながらフョードルにはこの時代のレオーノフその人が描きこまれていたと言える。私の読みの正しさは完全に立証されたわけであり、私は満足し誇つてよかつたはずだった。しかし作品はこの改作によつて緊迫の度合いが著しく薄れ、悪くなつてゐるのだった。どうしてこのようなことになつたのか？

前作ではオリガを最右翼として家族の全員がフョードルの罪を痴情に見ていたのに対し、コレースニコフは必ずしもそうではなく、政治的鬱屈に見ていたフシがあつた。すなわち己が信奉するスターリン（派）の落ち度に気づきつつ、生きている人物だつた。そしてフョードルに身代わりの挙に出られたことによつて責めを感じざるを得ず、パラシュート部隊による解放にさいしては、その名を連呼しつつ刑場に駆け付けた。そうすることによつて作者はフョードルの「勝利」を描いた。私が前作に、感銘を受けたのはそれが読み取れたからだった。

ところが改作では、疑いもなく一九五六年のフルシチョフのスターリン批判に触発され、一連の個人崇拜の批判に合わせて女性問題とスターリンを取り除いた結果、相対的にコレースニコフが愚鈍な人物に変わることになった。牢屋でオリガは「まだあの女のことを思つてゐる？」と質したが、改作版では次のように変更されているのである。

すなわちコレースニコフとして連行されてきた兄に彼女は当惑せざるをえなかつたのであり、作者はト書きに「フェージャの顔にかすか笑みが浮かぶが、それは妹の、茫然自失し、まことの絶望と交錯した喜びにたいする回答である」と記しているのだ。

オリガ フエージャ、きつとあんた私たちを見下しているのでしょうかね……（急き込んで）
でもね、こんな粗末なベッドの場所で一緒になれたなんて嬉しいじゃない。もうじき縛り首になるんだから、あんたが言いたいと思つていていたことを聞かせてくれない……あんたの罪とはいつたい何だつたの？

（フョードルは身じろぎもせず、まるで自分の手指に対するように、妹の膝を擦つてゐる）。
それじや、わたしが代わつて言つてあげましよう……要點だけを、ね。このところ、ずーーつとあんたのことだけ考えていたの……そしてあんたと二人きりになるのを怖れていつたわ。でもね、信じて、フェージャ。私たちが沈黙してきたのは、羞恥と恐怖のせいだけだつたのではない。全力疾走中には、気づかないことつてあるものだわ、怪我を避け、気が狂わずにすますためにね。余計なことを考へると、魂と目的は蝕まれ、鉄だつて銷つくのよ。（小声で）今はだめ、だめ、どうしても駄目なの……歴史とは火薬のようなもので——それをつくる人間たちよりも強大なのよ。

最後の「歴史とは…」云々はあまりにも含みが多い表現で、意訳の必要のある個所である、短気は損氣、時節の到来を待つ以外にない、ということを言つてゐるようと思われる表現である。言うなれば、フョードルには短気、もしくは性急に似た行動があつたようなのである。コレースニコフにはオリガのこの認識が決定的に欠けていた。改作版の彼はスターイン体制そのものである。地下牢の最後の場面。人々はみんな地上に出、残るのは二人だけである。新コレースニコフはフョードルの死にこれっぽっちも心動かされていなかつた。彼にはオリガの涙が不思議である。

コレースニコフ 上にあがろう、ママが来ているよ。

オリガ 母はもう（兄の遺体を）見たんですか？

コレースニコフ うん… どうしてあんたは泣くのだ、オーリヤ？ これもまたわれわれの偉大な勝利なのだよ！

オリガ（木霊のように虚ろに） 偉大な勝利ね：

私はレオーノフの読解に多大の時間と労力を費やした。これは卒業論文のテーマであり、私が目指したのは、『襲来』におけるフョードルの情痴殺人未遂は作者における偽装であり、スターインの告発が眞の意図であるとの証明だつた。しかし同時期の評論「ロシアの栄光」（一九四三）では対独開戦を告げるスターインのラジオ演説に触れての「われらが偉大なる父スターイン」、またアンリ・バルビュスの評論「スターイン」の表題の簡潔さと内容の大きさを賞賛する評論などを見ると、そのように論証するのは困難だつた。しかし芸術作品では別なのであつて、私は己の読解に固執しレオーノフを読み続けたのである。そして最終的には作者その人に質す以外にはないと信ずることになつたのであり、時期的にはまだ尚早だったのに 性急に留学を目指すことになつた。ソ連への留学がまだごく狭くしか開かれていなかつた時代のこと、それについての今日的評価については、やはり先にいつて述べることになる。

私はその旅の途上であなたに出会つたのであり、ゆっくりと歩むこと、すなわち待つことの重要さを知つたのであり、留学を断念したのであつた。それ故に、改作に接し、肩透かしを食つたような、馬鹿にされたような気持ちを味わつた。作品は全体が弛緩しており、最初の版の緊張が失われていた（と感じた）。それは結びに明瞭に表れていた。私はレオーノフを読むのを止めたが、それはまたソヴェト文学全体との別れに繋がつた。ソルジエニツィンが現れ、『収容所群島』がソ連の外で公刊されてソ連文学が様変わりするだいぶ以前の個人的選択また決断だつた。私はソルジエニツィンの出現にはそれほど驚いてはいない。

あなたとの結婚によつて私は、言うなれば後退を余儀なくされ、会社員になつたのだけれど、それが良かつたかどうかということでは、私は良かつたと思っている。例えば最初の会

社に勤めて、ほどなくレオーノフが新聞「プラウダ」に、アメリカにおける核シェルター騒動を風刺した映画シナリオ『マツキンリー氏の逃亡』を発表したのを見て、「こんなこと（貿易）のためにロシア語を習得したのではない」と思い、会社を辞めてその翻訳に取り掛かかたりした。その後にあなたの妊娠が明らかになって、また再び商社に就職するという屈折を経なければならなかつた。かくて私は結局翻訳の専門家に成れずまた成らなかつたのだけれども、そのような存在にならないでかえつて良かつたのだと思つてはいる。会社員生活によつて世界と日本社会を見る眼がずっと広がつたからである。

配属された木材の輸入課で隣の席の年長者は札幌の中学校の出身で、召集により樺太軍に配属され、語学の才が認められて東京外語学校露語科の一年間の委託生になり、北緯五〇度線の諜報任務に就かされた。やはりそこに配属されていた横綱大鵬のウクライナ人の父親と親しかつた、と語つていた。戦後抑留されて戦犯とされ苦難を強いられて帰国、貿易が始まるとともに就職してきた人だつた。ソ連には懷疑的もしくは批判的であるにもかかわらず、ロシア語は愛している、といつた私に似ていなくもない人だつた。

木材をやって良かったのは、積取船に便乗してアムール河口の内と外の積出港にやられたことである。アムールはあなたとともに一九五九年に列車でその鉄橋を通過した大河であるが、中国名の黒竜江にあるように褐色に黒ずんだ河であり、流れる水のため海峡の水も河口に近づくと黒さを増した。水深も浅くなり、ソ連側の水先案内人に頼ることになる。そこにおいてである、私が、チエーホフはサハリンに向かった際、ここを通過したに違いないと思うことになつたのは！ 実はこの本の最初の邦訳は『サガレン島』の名で成されていて、それを私は大泊の図書館で見かけていて、ソ連軍に入る前日、持ち帰ろうとして果たしなかつた本だつた。そのときの複雑に屈折した哀しい思い出のゆえに、また大学入学後樺太については当分は忘れて生きようと努めることになつたがために、敬遠して読まずにきた本だつた。そして最初のアムール行の後に購入して読み、多大な感銘をうけた。作家は北サハリンに到達後その流刑地を調査、その後南下してコルサコフ（大泊）に至り、そこで日本領事たちと親しく交わり、なんと、私の故郷の村、遠淵についてもロシア名ブッセ湖畔のアレクサンドロフスクの名で記述しているのだつた！

チエーホフは大陸とのあいだの海峡の発見者として間宮林蔵の名をあげ、「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」と正しく記していた。私はそれを含む日露関係史にかかる一連の文言を作品の冒頭の章に掲げることになる。それはロシア語で書かれたすべての書物の中で、私にはもつとも重要な一冊だつた。

私はソ連、それも主として極東と呼ばれている地域に行き来し、また中国で勤務しながらやがてコーカサス山脈を越えたグルジア（ジョージア）での機械プラント関係の三ヶ月の勤務に就き、同共和国生まれのスター・リンの生地、ゴリ市の広壮大な記念館を訪ねる機会をもつた。また徐々に樺太・サハリンを中心とする日露の関係史を調べるようになつた。日ソ中立条約を一方的に廢棄しての対日戦の理由としてのその日露戦争への報復論は、レーニン主

義からの逸脱であるだけではなく、それに従っていた青年時代の自身の言説からも背反しているものだった。また大戦末期の日本俘虜・抑留者は、なんと遠くグルジヤにまで連れて来られて労働についていた。己の威光を同郷人に見せつけたかったがためだった。

結局第二次世界大戦末期の対日戦は、領土拡張欲のなせる業だった。また貿易業務の実際を通して八〇年代に入るとソ連経済の行き詰まりは明白になつた。アマルリクという歴史家がイギリスの雑誌に発表した論文に「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」というものがあり、日本には七〇年代末に邦訳されていて、それを繰り返し読みながら、ソ連の行く末を占うことになった。

『襲来』が扱っていたのは独ソ戦であり、そこではロシア人はまさに「祖国を守る者」だった。しかし対日戦はそうではなかつた。第二次世界大戦でソ連は西と東では、性質の異なる二つの戦争をしていた。サハリン上空で領空侵犯した大韓民航機がソ連機に撃墜された一九八三年、私はソ連の崩壊的激変は避けられず、またそれが望ましい、という結論に到達した。そしてその時に、樺太以来の樺太が書きうるものになつたのだ。

ベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラスの映画「ヒロシマわが愛」のフランス女性は、故郷の町ヌヴェールで大戦末期ドイツ兵と愛し合い、解放後、ドイツ人は射殺され、彼女は髪を丸刈りにされる。両親は恥じて娘を地下室に入れ、髪が生えそろった時点でパリに送り出す。やがて映画女優となり、映画撮影のために広島を訪ねて、明後日はフランスに帰るという日に広島で恋におち、日本青年と一緒にする。そして広島で被爆の実態、被爆者たちの苦難を目撲して、忘れぬ傷痕のヌヴェールが癒されるのを感じ、ヒロシマに留まる決心をする。私があなたに決定づけられることになった映画だつた。

思うに若かつた私は樺太が辛かつたので忘れたかったのだ。そのためになんに結びついたのであり、被爆女性と結婚したからこそすることになった諸体験をした。あなたにもまただれにもけして口にしなかつたが、ツヨシを「樺太のヒロシマの子」と呼んだ体験はその最大のものである。

フランス女性にとつてヌヴェールとヒロシマが同義語となつたように、わたしにおいては樺太とヒロシマは同義語だつた。以前からそう思つていたのだが、七十年代に入つて樺太の友人・知己たとの再会が重なり、樺太の甦りがあつて、それへのあなたの反応に接してそう確信した。人には期待しながら待つ以外にない場合がある。混血者たちは日本とサハリンに別れて生き、再会の機会を持っていなかつた。彼らは待つ以外になかつた。それで私は結びでわが遺児にデュラスの言葉を語らせた。「耐え忍ぶということ、そういうことを知ること、それが叡智につながるのだわ」。こうして樺太の本は外でもなく一九八四年といふ年に一世に出ることとなつた。

前後してあなたが二度目の乳がんで入院、手術をうけついには両乳房のない女性になり、腎臓の片方にもがんが発見され、残る片方がなぜか萎縮していて人工透析を受けるようになつた。一級の原爆被爆者であるあなたはこれにより一級の身体障礙者でもあることにな

つた。そして一時は転移と疑われる症状の発生があり、私もあなたの死を覚悟する。誤診であることが分つて事なきをえたのだったが、この衝撃によって、書ききれずにきた一九五九年のあなたの出会いの旅が書けるものになつた。こうしてあなたの出会いから求婚に至る過程を樺太からヒロシマへの到着として捉えた『ヒロシマまでの長い道』が八六年の末に書き終えられる。

しかしながら、それは、平和運動家であり、戦前は木寺黎二の筆名に依るドストエフスキイ学者であり、戦後は本名に戻り、マルクス主義の啓蒙家、平和運動家、学生運動への助言者として生きた早大教授、私が私淑した松尾隆の没後三十周年にあたる年だった。記念行事として文集『松尾隆——戦後を駆け抜け抜けた早大教授』が制作発行されることになった。その準備の過程でドストエフスキイ関連の未完の原稿が発見され、文集にその最初の章が掲載され、その後に私はその全体に接することになった。未完かつ欠落の多い原稿であつたが、傑出した内容のもので、私がその処理に当たることになる。ことと次第によつては書きあげた小説原稿を訂正しなければならなくなる発見であり、私はそのためには作品の発表を先に延ばすことになる。当初は教授のオリジナルな論文と思い込んでいたのだが、翻訳である可能性が感得され、一年を要した調査の結果、ロシアの文艺学者ペレヴエルゼフの一九一二年の処女論文『ドストエフスキイの創造』と特定した。かくてテキストを入手、改めて翻訳し一九八九年初頭に出版社が決まり年内に出ることになつて、ようやくその後に小説作品を上梓できる状態になつた。まことに遅まきながら、樺太に統いて私は波乱に満ちたあのヴィーン友好祭のヒロシマについても、一応はクリアしたのだった。

ペレヴエルゼフの論文は今日までに書かれたドストエフスキイ論のなかでもっとも包括的にしてかつその本質を剥抜したものであつて、ロシアでは革命後の一九二〇年代絶大な権威を有したものである。その評判は日本のロシア文学界にも知られ、一九三五年に部分的には翻訳されていた。しかし全訳されることなく大戦争に入り、早大高等学院の英語担当の教官であった松尾隆は戦時下その全訳に従事、かなりのところまで進みながら、戦後に放棄していた。すでに二十年代末にソ連で、ボリシェヴィキ（多数派）に対立するメンシェヴィキ（少数派）の文学觀として弾圧されていて、戦後のスターリン神格化の状況では全訳しても出版できないと思われたためである。ひと言でも私に伝達していくならば、私は六〇年代早々には翻訳していたはずのものであつた。しかし、皮肉なことに、その場合には私は原水禁運動とのかかわりは生ぜず、その代わりに私はロシア文学者になつていただろう。すなわちはあなたに会うことはなく、したがつて結婚することもなかつた。その結果として自ら作品を書かざるをえなくなり、また書いたのである。

会社員となると同時に、原水禁運動からも離れていた私だが、一九八五年からは日本原水協の流れを汲む平和事務所に参加していた。チエルノブイリの汚染除去作業に動員され放射線害に苦しむことになつたバルト三国の元兵士らを広島大原医研に送り、その礼として一九九一年五月その三国に招かれた。私はベルリン、バルト三国を回り、ミンスクとキ

エフで Chernobyl の被災者および医者と交流している。Moscow では、以前はかならず向こうから接触してきた国家保安委員会（KGB）のスタッフが現れず、ソ連国内で異変が起っていることが感知された。

ソ連からの分離を目指して人間の鎖のデモンストレーションがあつた年のことである。独立志向はリトアニアがもつとも激しくて、直前に流血の弾圧があり、通訳としてロシア語で話して良いかどうか伺いを立てねばならぬ雰囲気だった。婦人国議員の案内で同国のイグナリアにある Chernobyl と同型の原発に案内してもらったのだったが、乞われて隣の席に座った帰路の車中、彼女はロシアの拡張欲・領土欲を宿阿と罵り、私がその地について何も語らなかつたにもかかわらず、「日本もサハリンを奪われておりますね。（日本人は）座視していくのですか」と問うた。帰国して私は所属する樺太連盟の機關紙にこのことを書いたが反響は大きかった。

ソ連では 1957 年にウラル地方の核開発の秘密都市で大規模な事故があつたとのことだが、ソ連の崩壊後 Medvedev が著作で明らかにするまでは、ソ連国内では報道されなかつた。Chernobyl はそういうわけにはゆかず、クレムリンと共産党からの人心の離反を招き、ソ連の崩壊を早めた。

二度目の、Chernobyl 後の Minスクについて語るべきことは無い。語るとすれば、数えて三十四年ぶりだつた白ロシアの首都で、1957 年の初めての滞在を書いては来なかつたことに気づいたことである。モスクワに到着した日本原水協の使節団はクレムリンでの首相謁見で、「第二次世界大戦で最大の、二千万の犠牲を払つたソ連国民には、広島・長崎の日本国民の体験はよく理解できます」という言葉を聞いた。今日振返つて考えると、ウラルの核事故を知つていたはずの人の口からである。この言葉は、使節団の行く先々で繰り返された。そして私はやがて不快になり、それは昂じたのだったけれど、自制して口には出さなかつた。そしてついに、長崎の被ばく者だった、あなたも知る杉本亀吉さんが、Minスクでその言葉に接したとき、「言葉を返すようですが」と断わつて反論し、Minスク側は黙としたのだった。

冷戦終結のソ連から帰国して北海道帯広に両親を訪ね、帰路に花巻で下車。初めて宮沢賢治記念館を訪ねる。弟の清六氏が樺太の賢治の足跡を訪ねようとしているところで、その相談に応ずるためだつた。そこでゴルバチョフのヤルタで拘束のニュースに接する。統いて Moskva 市内での Don・Pas 騒動。年末ソ連の国名は消滅。想定していたことであり、歓迎しこそそれ、すこしも驚かなかつた。驚いたとすれば、その終焉が非常にあつけなかつたことだつた。

あなたは電車で透析専門のクリニックに通院していたのだが、透析後の血圧の降下が甚だしくなり、一人では通院できなくなつて、また回数も週二回から三回に増え、一九八八年私は一戸建ての家（土地）を売り、同じ私鉄沿線のクリニックに近い場所の集合住宅に移り住んだ。また同時に会社を退社し、執筆に専念することにした。松尾隆教授のペレヴェルゼフについての沈黙とじき長子の沈黙を重ね合わせて『微笑の沈黙』（一九八六）を書く。

またその中でペレヴェルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳をやりかけたのだが、中止したことを記した。私は自身のドストエフスキイ論を構想していて、そのなかにその論文を生かそうと考えたのである。そしてそのことをも『沈黙の微笑』には記しておいた。

戦後学生運動の総括を目指し、東京大学国際派細胞の『一九会文集』と同時並行するよう に、一九九八年末から、年に二回の間隔で『西北大・一九五〇年・史料と証言』全六冊の、 制作発行が始まった。一九五〇の数字は、その年が大分市のあなたの正道「兄ちゃん」も注 目し共感していた全学連の反レッドページ闘争があつた年だからである。私はそれに「松尾 隆」を連載執筆したが、それは教授がそれを鼓舞する有名な「所感」を発表していたからだ けではない。それに触れた関連する文章は文集『松尾隆』にすでに何編も収録されていた。 私は木寺黎二とのベンネームでドストエフスキイ関連の業績を残した教授と戦後本名にも どり、共産党に入りマルクス主義の啓蒙宣伝家と成った教授のあいだに、魅力とともに断絶 もしくは亀裂があると感受していた。そのことは『文集』に寄せた拙文「松尾隆における分 裂と統一」に記してあった。私はそれを敷衍することになったのである。

もつともそれが何に起因したかについては、発見された遺構の処理の過程で明らかにな り、ペレヴェルゼフに係わる教授の「沈黙」とその意味については、『微笑の沈黙』では記 していた。しかし書き足りてはいなかつた。多面的だつたこの人は昭和十年代を通じて、『早 稲田文学』に依り、同時代の日本文学、とくに転向問題について多く執筆しており、その紹 介と評価を私はまだていなかつた。私はそれを『史料と証言』全六回の連載によつてする ことになつた。全部で二二〇枚。木寺黎二の業績に脱帽していた埴谷雄高さんは亡くなつて いたが、やはり面識があり、ペレヴェルゼフに関心のあつた小田切秀雄さんが毎号賞賛と鼓 舞の葉書おくつてくれた文章だつた。

そしてまさにその仕事の最中に、である。先に一九八八年に大分市の幼馴染の古川家の弟 の雅章氏が町田市つくし野の一戸建てだつた家に訪ねてきていた。そして兄の和男氏が、現 行の危険なウラン原発とは異なつた、安全なトリウム熔融塩原発なるものの研究に従事し ていることを語つた。それは私も同席して聴いていた。ところがその後にあなたの状態の悪 化が原因での転居があり、移り住むことになつた現在の川崎市市宮前区の集合住宅の家に、 今度は弟氏に案内されるようにして当の和男氏が訪ねてみえた。述べたように挨拶だけに して私は外出したのだったけれど、敗戦時には熊本の五高にあり、京大に進み、原子力発電 の研究者になつたその人は、自身の研究について語り、ただそれだけについて長く語り、他 のことは一切語らなかつたとのことだつた。フクシマ後に気づくことになつたのだが、それ は幼馴染で原爆被爆者となつたあなたへの唯一可能な挨拶と信じていたためだつたと考え られる。その翌々年の二〇〇一年氏の、一般向けとしては最初の啓蒙書『原発』革命』が 上梓され、あなたは贈呈されていたが、私は手に取つてみようとはしなかつた。当時の私の 閑心は別なことにあつたのだ。

2章 樺太のヒロシマが導く

チエーホフの『サハリン島』における、親日的でありながら厳密には国際主義的な記述。それは、その名がまったく挙げられていないにもかかわらず、シーボルトの大著『日本』に基づいていることは明白だった。ソ連側が忌避黙殺しているにすぎなかつただけのことだったのだが、崩壊後のサハリンに現れた大学の新しい郷土史教科書に接し、時代の変化が知られた。サハリンの地名が清代のポルトガル宣教師製作の地図によることを記し、チエーホフが記さなかつた依頼者の清国皇帝康熙の名まで挙げながら、当のチエーホフの名は伏せられているのである。異常であり、その秘密は世界に先駆けて一九八三年にサンクトペテルブルクで刊行された『日本』の露訳にあると思われ、探し回つて日本でただ一冊神奈川大にあることが分り、稀観本室で閲読がかなつた。立派に製本された本だつたが、扉に国家による検閲のために見本として翻訳制作されたものであることが銘打たれていた。通読すると、サハリン発見にかかる日本人の貢献が完全に削除されていた。つまり検閲はそのための処置だつたのである。

このことから疑いの余地なく明瞭となつたことがあつた。すなわちチエーホフは、サハリント行以前か以後かは定かではないが、いずれにせよ『サハリン島』執筆以前には、露訳の歪曲の事実を知り、日本関連の記述は全部シーボルトのドイツ語原書に依拠し、その翻訳者として執筆しているのである、しかしシーボルトとその『日本』の名は伏せられているのだが、その理由もまた明らかだつた。それを明かすならば、『サハリン島』が出版できなくなるからだつた。そしてそのことから、日露の最初の外交的接触から第二次世界大戦までの、領土問題を中心とした全関係史が明らかになつた。こうして私は『日露領土紛争の根源』の執筆に入り、二〇〇三年にそれを上梓した。

原稿が完成し、校正も終わつた段階で、私は実際に出版された本と、私が依拠した検閲用の本との異同を確認する必要を感じ、サンクトペテルブルクに飛び、帝政時代の図書の所蔵ではロシアで最大のシチエドリン図書館で調査した。『日本』の翻訳は検閲本だけで取りやめになり、一般には市販されていなかつた。拙訳書はこのことを後書きに記して出版されてゐる。

久しくロシアに行き来して暮らして來ながら、ヤルタは私が行きたいとは思わないできた土地だつた。理由はそこがヤルタ会談の地だつたからである。そこにも今や晴れてサンクトペテルブルクの帰路に訪れた。会談の場所である宮殿前で物売りの女性から手編みの帽子を、私はあなたへのみやげとして買った。

翌二〇〇四年は日露戦争勃発から百年の年であるが、その年に日本の広瀬武夫が旅順港閉塞作戦で戦死。これはヨーロッパで報道されており、南ドイツの温泉地にあつたチエー

ホフはその死について謫言をいいながら死去したことを、妻クニッペルの弟が証言している。すなわちそれはチエーホフ没後百年でもあつたのだ。モスクワの南メリホヴォに在る作家の領地跡の記念館で演劇祭があり、これに出席、三週間後の同国際学会での報告者にエントリーし、主催者であるモスクワ大教授に原稿を手渡した。この際、長く外国人には閉ざされていた生地、黒海沿岸のタガンローグを訪ねたが、まことに有益だつた。古くはスキタイ文明の中心地、近代になって交易で栄えたこの市にはイタリア商人が住みその文化が伝わり、七つの異なる宗教宗派が共存していた。また商店だつた生家には漢字の入った中国の茶箱があり、アジア人の血が入つていた作家の東方への関心、その国際主義の原点が確認できた。ロシアは北と南では歴史と民族が違うのである。

一旦帰国して今度は国際学会に行く。私の報告は長すぎるということで短縮され、シーボルト関連の記述は削除され、すでに報告集に印刷収録されていた。このため実際の報告は元の原稿に即して行わざるをえなかつた。ともあれ一石は投じたのであり、初めてのことであり、とりあえずは満足しなければならなかつた。それらの経緯の一切を記し両稿を掲げて、私はこの年初めて自身のホームページを立ち上げた。新聞社の目にとまり、一文を書き、少し遅れてテレビで話す機会もえた。思いがけず、また嬉しかつたのはシーボルト学会からの高い評価だつた。研究者たちは『日本』の初めての外国誤訳がロシアで成されたことは知っていた。しかしそれがどんな翻訳になつていたのかは誰も調べてはおらず、国際的にも私が初めて成したのである。

日本にドストエフスキイの会という学会がある。一九七〇年に早大露文科関係者よつてつくられ、私も一九八八年にペレヴエルゼフの原書をその図書館から借りだすさいに会長の新谷敬三郎教授に世話をになり、入会をすすめられたので入会していた。また訳本が出てからは、新谷氏は亡くなつていて、会長は大学では後輩の木下豊房千葉大教授に代わつていたが、その定例の研究会で訳書について報告した。以来ずっと会に所属し、二〇〇〇年に千葉大と西北大を会場として国際ドストエフスキイ学会が行われた際にも、聴講者として出席していた。しかしその後『日露領土紛争の根源』に集中した二年ほどはその集まりには欠席した。

それを世に出すことができ、またメリホヴオ学会の後に札幌で国際学会があり、さらになつた東京でのチエーホフ記念展に係わつて一段落し、私はふたたびドストエフスキイ関係の集まりに顔を出すことになつた。ドストエフスキイの会の姉妹関係にある「ドストエフスキイ全集を読む会」という会があり、そこに『ドストエフスキイ 父殺しの文学』という本を出した鶴亀という外語大教授が講演者として招かれていて、私はそれを聞いた。フロイドに心酔する人物であつてそれに依拠してドストエフスキイを解説しようと努め、やたらにサディズム（嗜虐嗜好）とマゾヒズム（被虐趣味）の二語を連発する軽薄な感じの講演であった。

集まりの後、ビールを飲む席が有り、私がペレヴエルゼフの訳者であることを告げると、

相手は「あの本には世話になりました」と答えた。さっそくその『父殺しの文学』を求めて読んだ。たしかに論の展開でペレヴエルゼフを引用している箇所があつたが、正しく行つてゐる箇所と歪曲してゐる箇所とがあつた。またその人は『カラマーゾフの兄弟』の新訳を出し始めていたが、国際ドストエフスキーハー学会の副会長の一人でもある木下氏によると誤訳・奇訳が多いとのことで、会のHPに発表された批判文を読むとなるほどと納得された。強調されねばならないのは、先行諸訳で正しく訳されている箇所でそうした現象が生じていることであり、かつ原文を恣意的に改変して面白可笑しく立論している著書まで出していて、厳しく批判されねばならなかつた。

ペレヴエルゼフは南ロシアのハリコフ市の生まれ、同地の大学の物理数学部に学び、ロシア社会民主党（革命後に共産党）の革命運動に従事、捕らえられて西シベリアに流刑。『ドストエフスキーハー創造』（1912）で文芸学者として登場、一九一七年の革命後にモスクワ大教授に就任、ドストエフスキーハー文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、また未公開だった『悪靈』のなかの「スタヴローイギンの告白」の章を公開。それについての評価である「ドストエフスキーハーと革命」を執筆、一九二一年のドストエフスキーハー生誕百年祭で報告、同年刊行された『創造』の新版に「序文に代えて」と括弧で記し、冒頭に据えた。しばしば社会主義に反対する小説と非難されてきたこの小説をマルクス主義の立場から擁護したものだつた。また後にソ連作家同盟の発足、社会主義リアリズムの強調に対する流れに反対し、「マルクス主義文芸学の必要な前提」で「文学が政治を行ひきないよう、政治もまた文学を代行できない。両者に必要なのは相互理解と相互援助である」と主張した、しかし二十年代末この両論文は激しい非難攻撃をうけ、ペレヴエルゼフは「失脚」、文学界から消された。著者は出身のハリコフに隠棲、ロシア古代文学の研究に従事、一九六七年に没していた。一九八二年に一巻選集が出て復活したが、弾圧の対象となつた二つの論文、および非難・攻撃者に対する反論である「ロシア文芸批評におけるドストエフスキーハー」は収録されなかつた。これは結びに「ただマルクス主義文芸批評のみが、ドストエフスキーハーの本質を解明したのである」とあるように、自説の擁護に貫かれたものだつた。すなわち批判者たちの方がマルクス主義に反していることを明かすおのだつた。

ソ連崩壊後血縁者によりさらに新たに一巻選集が編まれたが、事情は変わらなかつた。二〇〇〇年日本で国際ドストエフスキーハー学会のシンポジュームが行われたが、ロシア側の团长格のサラースキナ女史がその報告のなかで「ドストエフスキーハーと革命」からの肯定賛成的な引用をおこなつたので、「あれは未だ復権していませんね」と質すと、彼女は「私が最近『悪靈』関係の論文集に收めて出版しました」と強調した。

それを含め、ペレヴエルゼフの『ドストエフスキーハー創造』は今日に至るまでの、おびただしいドストエフスキーハー論の中でもつとも包括的でありかつその本質を剔抉した唯一のものである。ソ連崩壊後にも、それを予見していたマルクス主義者として評価されている値打ちのものである。しかしながらペレヴエルゼフが本国ロシアで長く闇に葬られ、その余波として日本でも全訳が一九八九年の私、瀬川修を待たねばならなかつた損失は大きく、二十一

世紀に入つて日本で突如ドストエフスキイの「第一人者」として現れた鶴亀教授に見られるように、拙訳書を読んでも、その価値を把握しきれずに、利用できる箇所のみの引用に留まっていた。その『ドストエフスキイ』は「父殺しの文学」の副題を有し、『カラマーゾフの兄弟』が表面上では「父親殺し」をテーマとしているからなのだが、ペレヴェルゼフの立論に反すること甚だしい。しかし遊びに似たそのような試みが歓迎されているという風潮の発生があった。それを止すべく、私はペレヴェルゼフを宣伝し、足りていな箇所を補足すべく『ドストエフスキイとは何か』（七百枚）を執筆、二〇〇八年に刊行した。

これを執筆しながら、私はしばらくぶりでレオーノフにも回帰している。もつともそれは『日露領土紛争の根源』の場合にも起こっていたことであり、私はチエーホフの先に掲げた文言ここでも記し、その際それらを賞賛するかのよう、レオーノフのチエーホフ論のうちの「祖国を愛しつつ、彼、チエーホフは彼女（ロシア）に媚びなかつた」を、補強補足するものとして掲げたのである。¹ またレオーノフは一九六二年の評論「作家の仕事」のうちで、AINシュタインが、ドストエフスキイについて「この作家から受けたものはガウス（ドイツの大数学者）から受けたものよりも大きい」と述べていることを挙げ、「ここに文学研究の今日の課題がある」と記していた。私はこの評論は全文翻訳していたのであるが、発表のあてがなく放置し、自身その探求に積極的に向かうことはなかつた。それが思いがけなくもドストエフスキイ論を書くことになつて、少なからず勉強し、結びでそのことを記すことになつた。AINシュタインの世界観が日本の空海のそれと非常に近い事とともにであつた。

サハリンには会社の業務の関係で、日本領ではなかつた北サハリンにも行つており、南も私が行つたことのなかつた敷香、ロシア名ボロナイスクにもやはり仕事の関係で行き、案内されて北に向かう道に立つたこともある。早大露文の戦前の卒業生である杉本良吉と女優岡田嘉子が一九三一年に北緯五十度線の国境を越えてソ連領に入つたときに宿泊した町であり、馬車を走らせた道である。樺太で生まれ育つた日本人である私にとつてこれは悩ましい事件であり、あるいは西北大露文に進んだ遠因の一つとさえいえた。

その結果私は一九五七年の最初の訪ソで岡田さんとのひとを見ることになる。クレムリンでの首相との会談が終わつて帰つたホテルで、エレベーターを出ると近くの長椅子に日本人女性の顔があつた。待ちくたびれて放心状態で、わが団の年配者が「岡田嘉子じゃないか！」と言つて近づき声をかけた。「（通訳として）お役にたちたい」という申し出だったが、その筋から差し止められたのであろう、その後は現れなかつた。しかし二年後のウイーンの帰路には許されていたようで、あなたは会つており一人でとつた写真が残つてゐる。その後来日し、演劇活動にも従事したようだ。帰国し、ソ連の崩壊後に、杉本良吉が入ソ後早い時期に銃殺されていたことが明かされ、集合墓地に花を捧げる日本のテレビの映像に接した。

その樺太であるが、住んだ南の大泊を中心とする亞庭湾沿岸地方に人が入れるようになつたのは、本を書いて五年たつた一九八九年になつてである。中学校の同窓会で再訪者の報

告を聞いた。第五回の卒業生、句集『凍港』の俳人山口誓子氏の再訪記が朝日新聞に出た。遠淵村にも人が入り、サハリン残留邦人一時帰国促進会の招きで、わが幼馴染の混血者たちも来日し、わが原点であつた露日混血のキヨミとも戦後六十四年目にして東京で再会を果たした。やがてソ連が崩壊してそこも容易に行けるようになり、多くの人たちが再訪するのだが、私は行きたいと思ったことがない。そこで過ごしたソ連占領下の最後の時期、引き揚げてからは一度とは見ないものとして見て暮らしていく、その思い出が妨げになつて、行く気がしないのだと思う。

そしてふと振り返つて、大分市生まれ育ちのあなたにとつての原点を考えた。そしてそれはあなたがまさにあなたになつたという意味では、そこは大分市ではなく、また先祖の墓地がある宇佐市でもなく、広島市の被爆した地点、中心部の白島町ではなかろうかと考えた。もちろんあなたはかつてそこにもう一度立つてみたいなどと言つたことはなく、事実行つてはいないのであるが……。

最初はあなたとの縁で、後には会社業務の関連でソ連人を案内して何度か行つていた広島である。しかし或る年からそこに樺太以来の親類縁者が住むようになつて意味合いが変わつた。母方のすぐ下の妹である叔母が、引き揚げて後、函館で結婚、夫が広島高等工業（現広島大）の出身で広島の缶詰会社に勤めることになり安佐南区に住んだのである。そのご主人が亡くなつて葬儀に行き、小型バスで火葬場に向かう途中、思いがけなくも窓外に「戸坂小学校入口」の表示を見かけ、私は思わず内心「ここかあ！」と声をあげた。あなたは火を逃れ、河を歩いて渡り、指示にしたがつて当時は戸坂村と呼ばれていた村の国民学校まで歩き、収容されている。そこが戦後に広島市に吸収合併されて区になつていただつた。

それから数年して今度は叔母が亡くなつてやはり葬儀に行き、同じ葬儀会社の宿泊施設に泊まつて翌朝、カーテンをあけて眼前に小さな川が流れるのが見、私はまたもや「この川なのか！」と思つたであろう。疑いもなく太田川に注ぐ支流のひとつであるその小川が、原爆の年の九月台風で増水し、あなたは兵士に背負われて駅の助役の家に連れて行かれたのである、そのことはシベリアの車中で聞き、本にも記していた。私の内に、あなたの被爆地点から戸坂の小学校までを歩いてみたいという思いが生じた。

問題はそのルートだつたが、それを教えてもらうには恰好な人がいた。生まれ育ちは福島県の社会心理学者なのだが、志をもつて広島に住み、広島大原爆医学研究所の心理学の専任講師の傍ら、在韓国の被爆者の支援活動なども手掛けたりする社会活動家となつた渡辺正治氏だつた。その所長であるS氏らとともに一九九一年春のベルリンに始まりミンスクとキエフで終わつた旅では親しく行をともにし、お付き合いはその後も続いていた。

「途中に山があり、その東西に道がありますが、奥さんはどちらを通つたのでしょうかね」と問われたが、そのうちに自分で調べ、経路図を途中の写真とともに送つてくださつた。もつとも私がそれを実際に利用したのは、数年遅れて、その時氏はすでに亡くなつていた。

私は長崎のシーボルト記念館に所用があつて行き、その帰路広島に下車、従弟の奥さんに乗車で案内されて、あなたが被爆したといつて安田女学院の前（の住宅地）に立つた。校

門をくぐりぬけて入ると、原爆死した教員と生徒の名が刻まれた慰靈碑があり、折り鶴に覆われていた。川に向かって進むとすぐに「被爆者たちが渡りました」と記された吊り橋に遭遇して、不思議に思った。あなたは川に入り歩いて渡っているからだ。後に案内者が調べてくれて、その学校が原爆後南に五百米移動して建て替えられたものであると知らせてくれた。

被爆体験の概略は知ったうえでの求婚だったが、細部にわたって知ることになったのは、結婚後であって、それも長い期間にわたって、かつ断片の継続としてであった。夫婦になつていなかつたならば、私が生涯知ることがなかつた物語である。大分市での結婚式の後、別府温泉での夜、あなたは「わたしは妊娠しないと思う」と言い、私は黙し「なぜ?」とは問わなかつた。やがて川を歩いて渡つていて局部から時期はずれの大量の出血があつたことを聞き知る。広島で知り大分市で再会した山田女医先生に話したところ、「わたしもその時間にそうだった」と答えたとのことだつた。あなたはそのことから、妊娠する機能が破壊されたかも知れないと思うことになつたようである。しかし子供は欲しかつたから、予めの避妊には抵抗したのだ。

パンツはその場で脱ぎ、川の水で洗いはき直して進んだ、と私は思いこんでいた。尋ねて確かめるまでもないことだつた。ところが、である、或る時、血まみれのパンツは脱いでそのまま水中に捨てたことをあなたの口から聞いて驚いた。とすると、新しいパンツは何時どこで得たのだろう。聞く気持は起きなかつた。

「戸坂での暮らしを書いてみたら」と勧めたことがある。「しょつちゅう熱が出て、事柄の日時の前後関係がはつきりしないので、とうてい書けない」ということだつた。

戸坂小学校を訪ねてみたが、校舎は建て替えた際に当時の位置よりから高台に移されていた。出水のさいに避難し一時世話になつた駅員官舎らしきものは残つていたが、路線そのものは廃止されていた。

私はあなたに会う前すでに東京で、また最初のソ連行の団で何人かの被爆者に会つていた。しかし箱根・熱海以西には行つたことがなく、一九五九年あなたに求婚するため大分に向かう途中、下車して初めて広島を訪ね、原爆資料館に入つた者である。被ばく者との出会いがロシア語がらみであるという特殊性を持つ。

会社員になつて二年目、アムール河口の木材積出港からの帰路、珍しく揚地が広島と決まつて、船が江田島沖を通過していくとき、折り返しアムール行の電報が入り、あなたに冬物の衣類を持って広島に来るよう電報を打つた。会社からの書類も必要だつたのであなたが出張扱いで広島に来たものである。

広島県では初のソ連材の外材輸入協会によるテスト輸入で宴会に呼ばれ、一泊して翌日広島駅にあなたを迎える、平和公園内の映画『ヒロシマわが愛』の舞台となつたホテルに宿泊、二度目の資料館の見学をした。ウイーン友好祭のプログラムにはダッハウのナチス強制収容所跡の展示館行が組まれていて、それに誘つたときのことだ。あなたは「そんなものは見

たくありません」と激しく、「私は会議で、何度か広島に行きましたが、資料館には入らないのです。あれは原爆を体験しなかった人のために在るのですから!」と激しく、私はショックを受けた。「女の髪で編んだテーブルクロスが有るそうです」と好奇心あらわに言つたためだつた。私はあなたが原爆で髪を一度全部失つたことがあるのを忘れていたのだ。

だから私はそのあなたがどのように陳列物を見るのかが気がかりで、後ろに付いてくるあなたを何度も振り返って見たものだ。あなたは体を前かがみにし、私の足の動きを見て歩き、陳列物を見ようとはせず、顔を上げずについて来た。まるで陳列物の間から亡靈が出てくるのを、あるいはまたその中に引き込まれるのを怖れるかのようであり、面白い見物を見た今も目に浮かぶ。あなたは館内を一巡しながら、陳列物はまったく見なかつた。公園内を逍遙し、外国人にケロイドを見せ、見料を請求したことで「原爆一号」の異名をもつことになつた旧知の人物の土産物店にも立ち寄つた。あなたと過ごしたただ一度限りの広島である。

私はあなたと結婚することによって樺太という故郷の喪失者がヒロシマに到着したのだと考えてきた。私の最初の作品『樺太の孤独』が樺太にヒロシマを探る試みであったとすれば、第二作の『ヒロシマまでの長い道』は樺太からのヒロシマへの到着を扱つている。

あなたは連続してがんに襲われたとき、「全身からヒバクシャが噴き上げて来たみたい」と悲鳴をあげた。あたかもそれまでは、被爆者であつても被爆者ではなかつたかのようだつた。しかし私の「ヒロシマへの到着」は二〇一一年三・一一の福島原発事故以後、すなわちフクシマ後に修正もしくは拡張を迫られることになった。他でもなく古川和男氏によつて、その著『原発安全革命』(二〇〇一年の『原発』革命の増補改訂版)によつてだつた。そ

してまた、氏の後継者たちに教えられて読むことになった、古川が多大に依拠した米オーケリッジ研究所ワインバーグ博士の『最初の核時代』(一九九四、英文)によつてだつた。

一九九八年キュリーらによつて原子核の分裂現象が発見され、その際に発生する膨大なエネルギーが、アインシュタインの「物質量とエネルギーは相互の変換が可能である」という相対性原理(一九〇五年)によつて計算できるものとなる。この原理は原爆にも利用できるとともに、平和目的の発電にも利用できるものであり、一九四五年の五月、原発の開発に先立つて、ワインバーグ博士は、師ウイグナーとの共著「トリウムを利用した液体燃料循環型の原子炉」のなかで、すでに「軽水炉で冷却できないと、燃料が破損し、プラント全体が放射能で汚染され、修復はきわめて困難になる」とフクシマを、遙かにはるかに先立つて正確に予言する言葉を残していたという。これは一九五八年刊の原子力発電の教科書に収録され、古川和男は一九五九年、すなわち私たちのウイーン滞在中のあの年、ロンドン留学中にこれを読み、自身この研究開発を生涯の課題とすることになつていた。

ワインバーグは米国立オークリッジ研究所所長として原発の開発に従事、また冷戦の勃発とともに要請されることになつた潜水艦の核エネルギー炉の開発にも従事した。これは

ウランを利用した固体燃料の軽水（普通の水）炉だった。しかし陸上の公共用の炉では、プルトニウムその他の有害物質を産しないトリウムを良しとし、それに適した液体炉、すなわち熔融炉の開発を目指し、大きな成功を収めた。しかし核弾頭のためにプルトニウムを必要とした政軍産共同体に圧迫され、その研究は禁止に追い込まれた。このため潜水艦の軽水炉が上陸してき、それが公認の陸上の発電用原子炉となつたのである。

古川和男博士は述べている。

ところで、私は「原子力」という言葉が嫌いである。なぜ「原子力」なのだろう。原子に関わる化学反応であるといふのであれば、まさに「化学力」である。「原子力エネルギー」などと言わずに、素直に「（原子）核工エネルギー」と言えばいいではないか。「核」は核兵器を連想させるから嫌だと言う人がいるが、本末てんとうである。正しい認識は正しい用語から始まる（66～67頁）

atomic bomb が原子爆弾と訳されたことの影響で、その後に *nuclear reactor* が登場しても、日本では核工エネルギー炉ではなく原子力発電炉、つまり原発と称してきた。これが日本で独占的に跋扈したウラン軽水炉の呼称だった。しかし正しくは核エネルギー炉と言わねばならないものである。

さてこの原発であるが、これは普通の発電とプルトニウムの双方の取得の目的とする準軍事炉であり、このため団体は巨大と成り、操作もまた複雑で大事故は避けられなかつた。ワインバーグは起こりうる過酷事故に心痛し、憂鬱症に陥り、陸上の軽水炉を「ファウストの買い物」と罵るようになつた。ゲーテの最晩年の詩劇『ファウスト』の主人公が悪魔メフィストフェレスの惑わしによつて行つた取引に例えたのである。「悪魔の買物」と訳してもよく、事実それによる部分訳がある。鬱病は昂じ、所長職の解任の動きがおこり、ついには辞職を余儀なくされた。かくて、疑いもなく古川の助言があつて、救済を求めて広島と長崎を訪ね、悟るところがあつた。原子炉の世界で大統領とまで称えられながら、そこから排除された己の生涯を核工エネルギー時代の最初、第一期の出来事と概括した。そして来るべき第二期が、自身が手掛けたトリウム熔融塩炉の時代となることを願いかつ信じ、一九九四年に自伝『最初の核時代』を公刊する。それは「残念なのは、私がその時代を見られないことである」と述べて結ばれている。

古川和男はワインバーグが中断せしめられた仕事を受け継ぎ、一九八五年に FUJI（不二、富士）として理論的には完成した。残念ながらその多大な努力にもかかわらず、ワインバーグが米国で被つたと同じ運命をたどらなければならなかつたのであり、フクシマの年の一二月に八十四歳で亡くなつた。しかし生前に事業の発展のためにNPO法人ITEMS、すなわちトリウム熔融塩国際フォーラムおよびTTTS、トリウム・テック・ソリューションを発足させていて、その事業は後継者たちによって継承されている。

私はこの古川和男の事績を称え宣伝すべく、二〇一四発年に『トリウム原子炉革命』を上

梓した。「古川和男・ヒロシマからの出発」を副題に記した。それはなぜだつたか。古川氏の試みが『ヒロシマまでの道』の中の、私がシベリアの車中であなたの両腕から手の甲にかけての火傷の痕に気づいた箇所に関連していたからである。

「（一）一月に）大分に帰りましてね」と彼女は始めたろう。

「噂を聞いてすぐに小学校の同級の男子が四人見舞いに来てくれたんです。ところがわたしの状態があんなにひどいとは思っていなかつたのですね」

大分に帰つた彼女の（一度髪がすっかり抜け落ちた）髪の長さは、戦後、髪を伸ばしはじめたであろう男子の友達のそれよりも短かつたろう。一度はすっかりむけ落ちたというその皮膚が完全にもとの状態に戻つていたはずはなかつたろう。訪ねてきた男友達はお化けのようなかつての女友だちを見たと思われる。

「わたしを一度見るなり顔を背け、その後は互いに顔を見合させて話し、ちらりとわたしを見つけてはすぐに顔を背けるのです。とうとう逃げ出すように帰つて行つたのですが、その姿の可笑しかつたこと」と彼女は真に可笑しそうに口に手を当てて笑つたろう。

「ど肝を抜かれるような話であり、実際彼は度肝を抜かれたのである。彼らが去つた後、彼女は泣かなかつたはずはないと彼は思つたろう。

フクシマの後、古川和男に誘われ、テレビ局で「著者に聴く」という古川出演の番組を聴取し、誘われて食事を共にした。友人と言う資格で出席していたので何かを話すように言われ、「妻が友人なのでして私は……」と口ごもり、古川氏に助けを求めた。すると氏は「たいへんな美人でした」と始めたのである。帰宅してそれをあなたに話し、その後に右の事実と、その二十四年後に書いた本文とを思い出し、その男子の中に古川氏がいたのかどうかをあなたに尋ねた。「居たとも、居なかつたとも言えない」という返事で、かつそれらの男子の名をひとりもあなたは挙げることが出来なかつた。このことはあなたが見舞客に対し、顔を上げず俯いて対したことを意味する。あなたの話では普通に面と対したようだつたのだ。私は呆きれはて、氏にはこのとき見舞客の中にいたのかどうかを質そうと思つていてその死に出会つていた。仕方なく他の人（村山富市元首相の弟氏など）に当たつて見たのだが、確実と想定される人が亡くなつていて和男氏が居たかどうかは確定できなかつた。しかし噂は聞いたであろうし、また右の文は読んでいると思われた。またそれは氏のあなたについての文章からも確信された。こうして私はウラン・ブルトニウム路線を忌避し、安全なトリウム路線で原発を目指した氏の原点があなたの悲惨な姿にあつたと結論したのである。それが副題の意味するものである。

まことにトリウム熔融塩炉であつたならば、スリーマイル島も、チエルノブイリも。そしてフクシマもなかつたのである。しかし容れられず排除されたのであって、古川は著書の冒頭で「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きのなかで、時には不当な扱いをうけることがある」と記していた。そしてこれはドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』の

序文の、キリストの再来を念頭においた主人公についての言葉を想起させるものであった。「一風変わった人物、どちらかといえれば奇人だということである」。「奇人こそが全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風に吹き廻しで、一人残らずなぜか一時その奇人から背を向けることがある。……」

ドストエフスキイはその続きを書いてはいない。しかしその「一時」が終わり、奇人が奇妙な人ではなく奇特な人であったことを、「残りの人々」が知るに至るのである。ひとり孤立して十字架上で殺された人物はそのような形で、名譽を回復することが暗示されている。まことにこれはエビグラフにある「一粒の麦、もしも地におちて死なずば、ひとつにてあらん。もしも死なば、多くの実をば結ぶべし」を受けた文言なのである。

「永遠に女性的なもの、導き手われらを高みに上らしむ」で終わる『ファウスト』はもちろん優れた著作であるが、ゲーテとは比較にならぬ苦労人だったドストエフスキイは『悪霊』で触れているように、『ファウスト』を少なからず甘い教養主義の作品と考えていて、『カラマーゾフの兄弟』ではイワンが幻視する悪魔に悪魔メフィストテレスの名を挙げて批評させている。またワインバーグはチャエルノブリと冷戦の終結は知つてはいたが、予言はしていたがフクシマを実際には見ることなく逝つた。苦労の度合いも日本の古川の方が大きかったと思われた。米国ではスリーマイル以後原発の建設は禁じられたのに対し、日本はそれを奇貨として建設ラッシュに入り、今世紀にはいるや原発ルネッサンスを口にするまでに至つていたのである。悪魔の跳梁の度合いはより大きかつたのだ。私はそのような観点で『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を執筆した。

樺太で、ソ連占領下で暮らしていた十四歳の年に、将来樺太について書くことになるだろうと思った。その物語の主人公は私であるはずではなく、混血のキヨミであり、そのためには彼の戦後の変化を見ておく必要があつて、遠淵に行つた。二泊して三日目に村を去りつつ、湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を見出し、それを理想とすることになった。この体験が曲折を経てあなたに繋がつた。こうして非常に時間がかかつたが、『樺太よ遠く孤独な』に始まる一連の著作活動に入ることができた。雑誌連載したので活字にはなつてはいるのだが、単行本にはなつていない『松尾隆』を含めると八冊の本を出した。しかしその八冊目は、系列としては理系ということになり、またそれ以前の物がすべてロシア・ソ連がらみであるのに、それを離れていることでも違うものになつた。

最新のものは、執筆準備の勉強の段階で私は或る変容を蒙らないではいなかつた。古川和男が賞賛し、その著書『岐路に立つ核エネルギー炉』を翻訳している米国初代原子力委員長のリリエンソールは、邦訳されているものは全部読んだわけだが、大戦中、連合国としてソ連に肩入れしていた人物たちを、「自由がない国」であるということで冷淡だった自分と比較して非常に教えられた。すなわち同じ人物たちが、ソ連が核爆発に成功すると、ヒステリックな冷戦遂行者に変じたのであって、それに対してもリリエンソールは「そんなに危険な国

ではない」とたしなめ、「容共」と攻撃されたのである。その者たちが、核兵器に有用なブルトニウムをもたらすということでウラン原発（軽水炉）を押し立て、それを産しないことで安全はトリウム原発を弾圧したのであり、リリエンソールは冷戦に反対し、後者を擁護したのだった。こういう人物はソ連にはいなかつたと思われた。

これまで付き合いのなかつた科学技術関係の人々と交わるようになり、私自身自分は変わつたと意識せざるをえなかつた。もつともこの変化は突如起つたものでもなかつた。恩師だつた松尾隆は万能の一面があり、「科学の誕生」、「宗教と科学」などの講演記録、を残しており、「零の発見」を必読と推奨していた。また私はレオーノフがAINシユタインのドストエフスキイ愛好に注目し、「文学研究の重要な課題」と言つてることを知つており、その評論「作家の仕事」の訳稿を保持していた。したがつて『ドストエフスキイとは何か』においても、ペレヴェルゼフに依拠し、その不足を補う形で執筆しつつ、私はこの問題に触れないでいることはできなかつたのであつて、触れてはいるのである。

思い起こせば、古川和男の「不遇」な生涯からすぐに『カラマーゾフの兄弟』序文の「奇人」を想起したことを含め、私は或る予感から、それなりの準備をしていたのだった。しかし今やそれに関連し、著作を公にして、私は年来の「AINシユタインとドストエフスキイ」という、その存在を知り意識してきながら、わが手には余る問題として先送りしてきたわけでもあつた問題に取り組むことになつた。

しかしそれは人工透析の生活にはいつてから三十年になろうとしていたあなたの骨髄の、造血能力に衰えがみえはじめた時期と重なることになつた。

フクシマの年の年末、古川博士の葬儀に向かう私を、「わたしからも「よろしく」申し上げてください」と明るく言つて送り出している。私は遺棺のお顔に手を合わせ、後ずさりしてもう一度前に進み手を合わせた。

それから二年して本が出ることになつて、私は帶に、学部学科は異なるが、松尾隆教授との関係では兄弟弟子といふことになる、元日本原水協代表理事、平和事務所代表の吉川嘉清氏から推薦文をもらつた。その一部は新聞広告にも出したものだが、それを見てもあなたはいかなる感慨をも覚えないようだつた。

二〇一五年近くの総合病院に入退院を繰り返しつつ、八月、盆を家で過ごすべく帰宅したが、容体が悪化して病院に戻つた。八月二九日夜半に死去。八十七歳だった。長男の四歳十か月の死から数えて四十八年、私と、当時一歳に満たなかつた次男にそれぞれ片手を握られながら静かに息を引き取つた。出会つてから五十六年目のことだつた。

調査と研究は本格的にはあなたの没年の年の初めから行われ、亡くなる頃にはほぼ終わっていて葬儀の後に執筆開始ということになり、十一月にドストエフスキイの会で報告。年末に原稿を提出、これが二〇一六年四月に、年一回の会報誌である『ドストエフスキイの広場』に前年度の報告文の一つとして掲載された。その全文をここに掲げよう。私のあなたへの思いの反映があるからだ。

また続けて「ペレヴエルゼフとバフチン」という2018年発表のエッセイを掲げる。表題の評論の補注の意味を有するからである。なおバフチンはソ連時代にも著作が出ていた形式主義の文芸学者であり、1970年にはその『ドストエフスキイの詩学』（原題）が邦訳されている。

ペレヴエルゼフの『ドストエフスキイの創造』の拙訳本文は一九一二年初版のものであるが、革命後の一九二二年ドストエフスキイ生誕百年の記念行事で彼は「ドストエフスキイと革命」という講演を行い、それをその年の新しい版に「序文に代えて」と記して冒頭に据えた。内容は『悪霊』論であり、マルクス主義の立場からこの作品を擁護したものである。そのなかに「同時代の人々は彼をほとんど理解せず、また理解できるはずもなかつたが、それは彼の視力があまりにも強大で、しかるに盲人には目明きが理解できないからである」の文言がある。

知られているように、『悪霊』は雑誌連載中に編集者が「スタヴローギンの告白」の章の掲載を強く拒否したために、中断後、これを除外して継続され完結した経緯があった。ペレヴエルゼフはそれを知らずに『創造』の本体を執筆していく、一九一七年の革命成功後、自身が中心になつてドストエフスキイ文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、また保存されていた「スタヴローギンの告白」を初めて読み、『悪霊』の認識を深めた。また革命後の現実に触れて、ドストエフスキイが革命の否定的側面をも予見していたことに驚いた。それらのことが「ドストエフスキイと革命」には反映した。しかしまさにこの論文が、後に、二十年代末にスターリン派の忌避に会い、「失脚」の原因となつた。彼は三十年代以降文学界からは消え、ロシア古代文学の研究に向かい、一九六八年に没している。彼以後ソ連では文学内容に触れたマトモなドストエフスキイ論は現れてはいない。

作家レオーノフ（一八九九—一九九四）はその出発当初からドストエフスキイの影響を指摘されてきた人だった。戦前に『穴熊』と『スクタレフスキイ』、また戦後に『ロシアの森』（スターリン批判後に新設のレーニン賞一位を受ける）が米川正夫らによつて訳されているが、これは訳者が親近を感じたが故である。しかしレオーノフは、二十年代の『泥棒』および三十年代後半（大肅清期）の戯曲『吹雪』がドストエフスキイの悪しき影響として批判され、両作は戦後の選集に収録されなかつた経緯があり、チエーホフ、ゴーリキーについて優れた評論を書きながらドストエフスキイに言及するのを避けてきた。

私は一九五二年の西北大露文の入学であるが、一年余のマヤコーフスキイへの熱中の後、長期にわたって捉えられることになったのはこのレオーノフであった。特に強かつたのは戦時下の戯曲『襲来』である。独軍が入つて来る直前に刑期を終え、ロシア西部の町に帰郷した主人公フヨードルは、妹の恋人にして共産党の地区代表者であるコレースニコフにパルチザンへの採用を願うが断られる。コレースニコフのパルチザン活動は独軍を恐怖させるが、負傷し医師（フヨードルの父）のもとに逃げ込むが包囲されて絶体絶命である。それを、フヨードルがコレースニコフの名を名乗つて救い、処刑される。

この作品は論議をよび雑誌掲載が危ぶまれた。作者がクレムリンのスターリンに直接電話を入れ、スターリンの承諾を得て掲載され、その後にスターリン賞一位を得た。このことを取り上げて蔵原惟人は「スターリンと文学」でスターリンが文学を理解していたことの証左とした。しかし私は主人公の情痴事件（女を殺そうとしたが未遂）が原因で刑に服していたとする設定が疑わしかった。私はその反スターリン思想が隠された真の原因ではなかろかと思つたのである。スターリンは前年の一九五三年に死んでいたが、フルシチヨフらによるスターリン批判はまだ一年先のことだった。私はこの疑問を闡明にすべくレオーノフの露文全部を読むことになった。

レオーノフは一九五六年以来晴れて公認の作家となつた人である。一九六〇年のボリショイ劇場のトルストイ没後五十年祭での基調報告の榮は彼に与えられており、一九六一年一月のプラウダ紙には米国での核爆弾に対するシエルター騒動を風刺する映画シナリオ『マッキンリー氏の逃亡』を発表し、好評だつた。かくて作家同盟機関誌『ズナーミヤ』はレオーノフにインタビューを行い、四月号にそれが「作家の仕事」の表題で掲載された。そこで彼はaignシユタインのドストエフスキイ愛好について触れて述べた。「二人の偉大な人物を接近せしめたものは何か、それは思想の方向の一一致、実験を敢えてする能力だつたのではなかろうか？　これこそは芸術の理論家にとっての大きなテーマである」「ドストエフスキイには人間存在の複雑さを伝える力があつた。彼は肉眼では補足しえない赤外線と紫外線を持っていたかのようだ。彼は在つたことだけではなく、在りえたかもしれないこと、すなわち人間関係の極端にして極限的な表現を行つた。びつこ女とのスタヴローゲンの結婚のごときは現実には有りえなかつたのである。彼女の姿、その皮膚を想像してみたまえ、さっぱりした白地の服を着こなした貴族の坊ちゃんであるスタヴローゲンが、そのような女に手を出すようなことは在りえなかつたはずである。しかしドストエフスキイには、スタヴローゲンの崩壊の表現として、彼ら二人の親密な関係が必要だつたのであり、彼はそれを創造したのだった」ところでaignシユタインであるが、一九五〇五年の特殊相対性理論および一九一五年の一般相対性理論はソ連でも支持され、一九二二年の来日時には、ソ連科学アカデミーは名誉会員に迎え、ロシア革命を支持していたaignシュタインはこれを快諾している。しかしその後にスターリンの一国社会主義の確立があり、ソ連共産党内のユダヤ人党員への迫害があり、aignシュタインは忌避された。第二次世界大戦後、aignシュタインがラッセルと組んで行つた世界政府樹立の提案、反核

兵器のパグウォッシュ宣言などにはソ連は異議を唱えており、批判と反批判の応酬があった。スターリン批判後にこれが改善されたのであって、AINシユタインとドストエフスキイはパラレルの関係にあったといつてよい。したがってレオーノフの発言は非常に斬新だつたのである。

レオーノフは一九六二年に来日し、私は会社員になりソ連貿易部門で働いていたが、機会を得て会っている。私は積年の疑問を述べ、氏は「改作中なのでそれを見てほしい」と答え、一九六三年にそれを読むことになった。それにより私は積年の疑問が正当であつたことを知ると同時に、新たな疑問に直面した。改作版は前作よりも感銘の度合いが薄れていたのである。同様なことが、私が劇団民芸の依頼で訳した戯曲『金の馬車』の改作版でも生じていた。私はレオーノフを読むのを止めた。それはソ連文学との別離でもあつた。私は南権太の生まれであり、ソ連占領下で一年半暮らして引き揚げている。その体験はまだ権太に在った当時から書かなければならないと考えていて、そのために露文科などに進学していた。そして私は八十年代に入ることにはソ連の崩壊は避けられないと考えるようになり、そのような立場で長編小説『権太よ遠く孤独な』を執筆、一九八四年に上梓した。また続いて一九八六年、一九五九年夏のウイーン平和友好フェスチバルの日本代表団で日本被団協代表だった妻との出会いから結婚に至までを『ヒロシマまでの長い道』にまとめた。ところがこの刊行は或る事情から一〇八九年にずれ込むことになった。

西北大露文科教授に松尾隆がいた。戦前は木寺黎二のペンネームで『ドストエフスキイ文献考』を著し、またシェスト三巻選集の翻訳スタッフだったが、戦後はマルクス主義哲学の啓蒙家、平和運動家、学生運動の助言者として働き、一八五六年に四十九歳で亡くなっていた。その三十三回忌の行事の過程で一連の遺構が発掘され、その中にドストエフスキイ関連のものがあった。ペレヴエルゼフの処女論文『ドストエフスキイの創造』の未完かつ空白部の多い翻訳であったのだが、この推定に到達するまでに私は一年を要している。ようやく特定でき翻訳しなおして出版社がみすず書房に決まつて、一九八九年に『ドストエフスキイの創造』を公刊した。

一九一二年、帝政ロシアの反動期のマルクス主義的ドストエフスキイ論、一九三四年当時全十八章のうち断片的に三つの章が翻訳されながら、全貌が明らかにされていなかつた論文を、ソ連の崩壊が迫りつつあつた年に全訳し公刊したのである。松尾が放棄したのは、訳書の解説に記したように、ペレヴエルゼフが「批判」されて闇に葬られていたからだつた。また岡沢主任教授が、戦前自ら翻訳した論文を戦後自著に自身の論文として収録したことも関係していた。全訳して公刊する場合には、そのことに触れざるをえず、後輩としては逡巡せざるをえなかつたのである。

私の妻は大分市の生まれ育ちであるが、たまたま広島市に滞在していて爆心地から一・三キロ地点で被爆、救出されている。長子がファロー四兆症という重症の心臓障害をもつて生まれ四歳十カ月で逝くことがあつたが、当人は普通に健康だった。これが一九八四年からがんのために連續して両乳房を失い、片方の腎臓にもがんが発見されて一九八

五年から人工透析の生活に入った。また血圧の関係で一時一人では通院できなくなり、國外出張の多い私のサラリーマン生活にも支障が生じた。以後私を支え励ましてくれたのは、微笑んで立つ亡き長子の励ましの言葉だった。こうして私は『微笑の沈黙』（一九九六）を書いた。

もつとも「微笑の沈黙」は松尾隆も同じだった。私は教授のドストエフスキイを知る没年最後のただ一人の学生だったが、ペレヴェルゼフの名はまったく聞いていないのである。もしも聞いていたならば私はその書と次作の『ゴーゴリの創造』は六十年代の初めには訳しており、ロシア文学者になっていた。伝達が成されなかつたために、私の人生は現にあるようなものになった。教授は昭和十年代の『西北文学』誌でも同時代の日本文学の評論家としても活躍しており、その紹介と評価を、私は一九八八～二〇〇一年に制作発行された『西北大・一九五〇年・史料と証言』全六冊に連載して行った。

チエーホフは一八九〇年委サハリンを訪ね、帰国後『サハリン島』を著したが、そのなかで「サハリンの処女探検お権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初にサハリンを領有したのである」と記している。シーボルトの『日本』に依拠したものであることは疑いなかつたが、二〇〇二年になつてその露訳を調べていて、帝政政府の検閲で日本人の業績が削除され、地図の製作者名まで改ざんされていることを発見した。つまりチエーホフはそれに気づき独語原書に当たつて執筆していたのである。この結果日露関係史の全部が闡明できて二〇〇三年に『日露領土紛争の根源』、またペレヴェルゼフの翻訳との関連で二〇〇八年に『ドストエフスキイとは何か』を上梓。後書の最終章でaigneauに言及、彼がイワン・カラマーゾフの非ユーリッド幾何学に言及していることに触れた。そういうしているうちに二〇一一年にフクシマが起つたのである。

大分市は瀬戸内海に面しており、少し海に突き出た土地に佐賀閑と呼ばれるところがある。そこに日本興業という会社の精鍊所があり、その所長古川氏は大分市中島町に家族を住まわせていた。わが妻の生家とは斜め向かいであり、家族同士の付き合いがあり、長男の和男氏とは同年生まれ、中島小学校では同期だった。（ついでながらこの学校の先輩に村山富市元総理がおり、その兄弟とも彼女は懇意だった）。古川家は戦後数年して大分県を去り京都に移り、わが妻は一家のその後の消息を知らなかつた。ところが長い別離の後、一九八七年になつて弟の雅章氏が拙宅を訪ねて見え、京大の化学科に進んだ長兄の和男氏がトリウム熔融塩炉なる原子炉の研究に従事していることを聞いた。現行のウラン固体燃料炉（軽水炉）とは著しく異なつて副産物として有害なプルトニウムを産しない、事故に際しても安全なものであるということだった。また一九九九年に雅章氏に案内されるようにして当の和男氏が来客。その二年後の二〇〇一年には、それまで国内外の専門誌に論文を発表してきた氏の、初めての一般読者を対象とした啓蒙書『原発』革命が文春新書の一冊として世に出、妻は贈呈されていたが、私は開いてみようとはしなかつた。所属する市民平和運動の団体、平和事務所の一員として、チエルノブリを訪ね、またバルト三国の被ばく者と医師の広島・長崎招致に従事していたにもかかわらず、だつた。もつ

とも妻のほうは和男氏を支持していて、フクシマ後、増補改訂版の『原発安全革命』の新聞広告が出たときには、歓声を上げて買い求めてきた。私も気になっていたので、それを取り上げて読み、のめり込むことになった。

著者である古川和男氏とはこの年三度お会いし、語り合つた。当時すでにがんに冒されていて一二月に他界、私は氏の業績について著作を目指すことになり、三年を要し、未刊の『松尾隆』まで含めると八冊目となる本『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著した。私はこの過程でAINシユタインとドストエフスキイを同時に対比して考える体験をした。

特殊相対性理論から出てきた学的結論に物質のエネルギーへの転化があり、その量は質量と光の二乗の積に等しい。すなわち $E=mc^2$ の発見である。これに基づきジョリオ・キュリエが一九三九年に、ラジウムを用いて核分裂とその連鎖反応によるエネルギー取得に成功。第二次世界大戦が始まり、ナチス・ドイツが原爆を開発しようすることを怖れた二人の亡命核物理学者、すなわちウイグナーとジラードが、やはり米国に亡命中だったプリンストン高等学術研究所のAINシユタインに頼り、その署名になる原爆製造を求めるルーズベルト大統領への書簡が作成される。テネシー州の荒野の一角オークリッジに研究所が作られ、ウイグナーがその初代所長になり原爆が製作され、西部のニューメキシコ州の砂漠で実験される。この時目標としていたドイツはすでに降伏、日本のみがまだ抗戦していく、AINシユタインは反対だったのだが、日本に投下された。

原爆に使われた原理は発電にも利用できるものであつて、ウイグナーは、それはそれでの工学的なものとはまったく異なつて化学にラントとなるべきだと予言、所長を弟子のワインバーグに譲り、このワインバーグが熔融塩炉の基礎を築いた。また使用物質は有害なブルトニウム（長崎に使用）その他の放射性廃物を產生するウランではなく、無害かつ世界で多量に産する（したがつて安価な）トリウムが選ばれていた。ところがまさにこの長所が、冷戦に利益を見出す政産軍複合体の忌避するところとなつたのであり、米国においては弾圧され陰謀をもつて葬られた。

その研究は日本人古川和男によつて引き継がれ継続され、ついに一九八〇年FUJI（不二、富士）として完成される。大きな関心を惹き起したが、米国におけると同じ理由によつて、日本の核武装を予定している勢力によつて隠微に葬られた。平和的かつすべてにおいて優れた原発が陽の目をみなかつたのであって、古川和男は『原発安全革命』のなかで己の業績について「人間社会のさまざまな動きの中で、ときには不当な扱いを受けることがある」と嘆いた。

この言葉は『カラマーゾフの兄弟』の序文の「奇人」についての定義を想起させた。すなわち「奇人こそが時によると全体の核心を自らの内部に藏し、逆に残らずなぜかその奇人に背を向けるといった場合がある」風の吹き廻しによつて、ひとり残らずなぜかその奇人に背を向けるといった場合がある」云々のキリストを念頭に置いた文言である。古川和男が講演で人類と世界の救済を訴えていただけにそうであった。旧ソ連のAINシユタイン学者クズネツォフは、ドストエフスキイ

キーについて「簡単に規定することのできない、ある雰囲気を通じて影響を及ぼしてゆく」と述べている。まことに『カラマーゾフ』の「奇人」は古川和男にぴったりだった。こうして私は『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を完成したのであるが、その後に課題となつたのは、その邦訳があることを知りながら、読まずに過ごしてきたこのクズネツォフ（一九〇三～？）の『ainschtyainとdostoevsky』であつた。

クズネツォフには大小取り混ぜて四冊の著書があるが、ソ連での公刊の順に記すと次のようである。

① 『ainschtyain』一九六二。邦訳（上下二巻）一九七二。

全三十章の大著、八番目（数詞は振られていない）の章に『dostoevskyとmoerat』の章がある。邦訳は第三版による、三版を重ねる。

② 『ainschtyainについての試論』一九六五 露文、未訳。

刊行年は①よりも遅いがすべて①以前に執筆のもの。五十年代末から六一年までの間に諸雑誌に発表された六編を集めたもの。これらを基礎に大著である①が執筆されたのである。ちなみに第一編は「ainschtyainの世界観と相対性理論」、第二編は「エピクロスとルクレツィー、ガリレオとアリスト、ainschtyainとdostoevsky」についての覚書」というもので、このなかで初めてainschtyainのdostoevskyに言及した書簡の文言が紹介されている。したがつて先に掲げたレオーノフの一九六一年の言葉はもちろん、一九六五年刊のバフチンの『dostoevskyの詩学』の「結び」の章の最後でのainschtyainについての言及は、クズネツォフのこの最初期の論文委負うていると見なされる。すなわち同時期に刊行が開始されたainschtyain露訳全集の訳者にして三人の編集者の一人だったクズネツォフこそがバイオニアであり、ケドロフの『詩的宇宙』（一九八九）もまた然りである。

③ 『ainschtyain 生涯、死、不滅』一九七六 露文の最大の著、未訳

①の全三十章は各章に題辞があり、表題を有するものであるが、全体の通しの番号がない。これは相対性理論の業績が、ainschtyainの世界観、哲学、人格と不可分と著者が考えたためであつて、それなりの成果を挙げているのであるが、評伝と業績が混濁した印象を与えることになつたと述べられており、増補改訂とはいえない新しい本とみなされる。すなわち先の本では全三十章だったものを「生涯」の編に十九章、「死」の編に三章、「不滅」の編に四章、合計二十六章にまとめて記述した。ただしこれに加えて別に「パラレル（対比）」と題した部を設け。七つの章を収めた全部が「ainschtyainとdostoevsky」といった具合に○○○○に対比される人物を収めたものである。その人物とはアリストテレス、デカルト、ファラディ、マッハ、ボー

ア、ドストエフスキイ、モーツアルトの七人である。もちろんこれらの人たちは①の『ainschtyain』にも有つたものだつた。しかし努めて本文から外し、これに収めたのである。もつとも『ainschtyain』においてもつとも頻繁かつ多大に登場しているのは一位にスピノザ、続いてニュートンだつた。この二人を除外しては、評伝は書けなかつた。このため二人は本文であるところの「生涯、死、不滅」の中に収められて、ここには登場していない。

クズネツォフのainschtyainへの敬愛は比類のないもので、「死」「不滅」の章名は『ainschtyain』にもあつたものだつた。しかしこの新しい本、著者が最終版と考えていただらう版においては、その思いはもつと昂じ、人類の救済者、新しい宗教の創始者もしくは教祖の地位にまで高められている。それをもつとも強く現しているのが、「生涯」の最初の章の表題である。なんとそれは新たにラテン語で「Ecce Homo（この人を見よ）」と記されているのである！

『ainschtyain』において一つの章に収められていたドストエフスキイとモーツアルトが分離独立せしめられ、それぞれ別な論文にされていて量的にも倍以上になつていることが注目される。加えて著者はこの二つについて「読者に格別な教養を要求する章である」とことわっている。読者に物理系の人々が多いであろうことを予想してのものであろうか。ともに非常に魅力のある章であつて、この二つだけでも邦訳し一緒に出したいという欲望にかられる。双方ともに日本では愛好者が多く、また双方について著作がある日本の批評家が想起され、ともにこの批評家の弱点を明るみにする内容のものであるだけに、なおさらそうなのである。しかしその内容が本文と固く結びついていてこれだけを分離するのが不可能で残念である。世界中の多くの言語に翻訳されており、全文の邦訳が望まれる。

「ドストエフスキイ」についてだけ触れると、これまで全く言及してこなかつたキエルケゴルとサルトルへのドストエフスキイ把握への批判的言及が見られる。すでに『ainschtyain』に強くみられているが、また控えめにしか表していないが、クズネツォフはマルクス主義者であり、ainschtyainとドストエフスキイの架橋の試みの基礎にあるのはレーニンの『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』である。それらに有るマッハとカントの観念論への批判が、ainschtyainのそれと一致しているとの確認が、彼にこの対比の論文を書かせたのである。

④ 『ainschtyainとドストエフスキイ 十九世紀の主たる倫理的・美学的問題と現代物理学との関係にかんする研究』 1975年、英文より重訳あり

一九八五年ロンドンで③と同年に出版、②よりも小著。③の「ainschtyainとドストエフスキイ」よりも量的に小さく、内容も相当に違う。問題は③と比較してどちらが先に執筆されたかということである。私は内容を比較して、④は③の後に書かれたと考える。量的には小さいが、これが一九五七年頃に初出と推定される著者の「ainschtyainとドストエフスキイ」の合計三編の到達点とみなされる。

その理由は、それまでの三つの「AINSHUTAINとDOSTEFSKI」においては、前者が主、後者が従の関係にあつたものが、対等の関係に進み出でているからである。例えば④では高らかに宣言されているのだ。「DOSTEFSKIをAINSHUTAINの目を通して見、AINSHUTAINをとDOSTEFSKIの目を通して見る」というと、いうことに仕事を絞ってきた。このようにすることによって、二人の人間の或る特徴がくっきりと浮き彫りにされてくる。われわれの仕事はいまや、DOSTEFSKIの芸術的仕事の内容とAINSHUTAINの科学的仕事の内容を並列的に描き、それ以後におけるその発展を比較し、現代の科学と現代の生活における、そして可能な限り未来にまで及ぶ、その進歩の線を追求してゆくことである」（邦訳書28頁）。このような決然たる態度表明は④以前には無かつたのである。

DOSTEFSKIへの控えめながらの批判的コメント（同31頁）があるが、継承しているとみられるベルヴェルゼフへの言及が無いのは、その復権がまだ先のゴルバチヨフ時代に入る直前の一九八二年のことでの、この時期にはまだ「解禁」されていなかつたからである。

AINSHUTAINがDOSTEFSKI関連で残したのは書簡のなかの渺たる二、三の言及だけで、別に論文やエッセイが有るわけではない。レオーノフであれば「自分の小説と戯曲がDOSTEFSKI論なのだ」と言つたであろう。彼にとって最大の関心事は物理学の領域の問題だった。その書簡の一つが「DOSTEFSKIはどんな思想家よりも多くのものを、すなわちガウスよりも多くのものを私に与えてくれる」なのである。しかし相対性理論は非ユークリッド幾何学の成立なしには有りえず、またガウスが同郷ともいってべき南ドイツ出身の大数学者であり、AINSHUTAINが曲率の計算にその数式を利用したと伝えられるリーマンの師匠筋の非ユークリッド幾何学者であることを思うと、この言葉は非常に重いのである。そして世界にあまたいるAINSHUTAIN学者・研究者のなかでクズネツォフただ一人がこの問題に鍤鉛を下した。それも科学史家としての出発点からそうだったのである。それはいかなる観点からであったか。

物理学と文学という異なるジャンルの間で共通な何かが起つたのである。もつともそうしたことは人類の文化の歴史において繰り返し見られてきた、とクズネツォフは主張する。古代ギリシャに原子（アトム）の名称の発明者であり、唯物論の祖と目され、AINSHUTAINがその人に同時代人を見出していたエピクロスがいる。その人物を賞賛して長詩を捧げた詩人にローマのルクレツィがいた。またその長詩に励まされた物理学者にガリレイがいて、またそのガリレイを理解して称えたアリオストの文学が存在した。私はクズネツォフの最初期の論文集②所載の論文のひとつについて述べている。その最後の方に、述べたように、「AINSHUTAINとDOSTEFSKI」が置かれているのだが、その結び近くで彼は言う。

「思うに、宇宙的かつ道徳的調和の探求の天才的藝術的擁護である文学（DOSTEFSKIを指す——引用者）に関する、水が浸透するような綿密な研究が、AINSHUTAIN

インにとって非常に重要なかつ必要だったものである。それはまことに巨大なしみ入るような力を帶びた研究、ジャンルの境界をいとも容易に通り抜ける研究だったのだ。そして締めとして次のように述べられる。「文化の歴史が可能なのは、歴史的改革の諸主体を貫き通して定義しうる、何らかの同一の基層の存在が有るからである。変化の概念は、変化しつつあるものを定義しなければ意義を失う。文化の歴史においては、遠く古代ギリシャの初めから、若干の共通する定義と特質が見出される。それらは変化するが、文化の歴史を連続する過程として、歴史的変化にも関わらず同一性を内包するものとして語ることを可能にさせるのである」。つまり大事なのは、異なったジャンルの根底に存するものの省察なのだとというのである。エピクロスにとって物理学と倫理学は同じものだったのだ。

いわんやアインシュタインとドストエフスキイのように所属する文化のジャンルを代表する存在でありながら、同時にそれを超えているような存在については、ジャンル内だけの研究では不十分なのであって、互いに異なったジャンルから見る必要があるのである。クズネツォフのこの観点はますます発達して最後の英語版において絶頂に達している。もつともこの邦訳のある最後の小著を理解するためには、未訳のものを含めてクズネツォフの全部を、それも繰り返して読まなければならないのであるが。

アインシュタインは一七世紀のオランダの思想家スピノザに深く学んだ無神論者・唯物論者であり、絶対的権威を否定する民主主義者であり、クズネツォフは全作を通じてそのことを強調している。まだ若かった時分から冗談めかして口にしていた「神とは気体上の脊椎動物である」は、それをよく現す言葉として有名だった。宗教はキリスト教も、自身が属するユダヤ教も嫌いだった。「唯物論思想に真に帰依している科学者だけが真に宗教的である」（「わが世界像」）。

彼は一九〇五年の(1)特殊相対性理論

- (a) 運動する物体の長さ……縮む（光速を超えると長さが虚数になる）。
- (b) 運動する物体での時間……遅れる（光速を超えると時間が虚数となる）。
- (c) 速度の加法……速度の単純和よりも小さくなる（光速を上限とする）。
- (d) 運動する物体の質量……重くなる（光速に達すると質量が無限大になる）。
- (e) 運動する物体のエネルギー……運動エネルギーのほかに静止エネルギーをもつ。

および一九一五年の(2)一般相対性理論

- (a) 重力場では光は曲進する。
 - (b) 重力場では時間が遅れる。
 - (c) 重力場では高速は遅くなる。
 - (d) 質量をもつ物体が運動すると、重力波が発生する。重力波は高速で伝わる。
- によって世界的に有名になった。特に一八一九年のイギリス人による日食観測により(2)の(a)が証明されたことが決定的だった。

それは第一次世界大戦の終了による平和の時代の到来、またロシア革命が世界を揺るがせた時代でもあった。ロマン・ロランの反戦運動に加担していたアインシュタインはロシア革命とレーニン、新生のソ連に對しても好意的だった。一九二二年日本に招請されているが、当時の日本にもアインシュタインとレーニンを同列に受け止める雰囲気が存在した（金子務『アインシュタイン・ショック』大正日本を揺るがした四三日』参照）。広範な日本人が率直に歓迎しており、その後昭和に入るとともに戦争に向かった狂気の日本人とは別民族であるかのようである。日本には非常に好ましい印象を抱いて帰国しているが、その彼が係わりをなしとはしない二発の原爆が広島・長崎に投下されて第二次世界大戦は終了した。

一九五四年に米水爆実験による三度目の核被害があり、これを契機に原水爆禁止の国民権運動が起こる。日ソ国交回復宣言の翌一九五七年ソ連は日本原水協の使節団（私が加わっていた）を迎へ、首相がクレムリンで謁見する。同時期に世界青年学生和平友好フェスチバルが行われ、日本代表团の長崎の被爆者永田尚子のモスクワ・マネジナヤ広場でのスピーチはその姿とともに大きく報じられた。私はクズネツォフのこの時期、つまり最初期の論文にこの日本の反映を見る。「アインシュタインにおいては物理学の解決は道德問題の解決と結びついていた。科学の結論は人々の生活に如何に影響を及ぼすか？ 科学の進歩はヒロシマの人々に如何に償うか？ 学問の進歩と人々の安全と幸せの調和の条件とは如何なるものか？」こうしてこの思想は大著『アインシュタイン』に引き継がれて「原子爆弾の悲劇」の章が書かれることになった。そしてヒロシマは最後の④の書でも繰り返されているのである。注目されるのは、これがドストエフスキイにおける調和の希求と同一平面で把握されていることである。

④の第一章の表題でクズネツォフはドストエフスキイの文学を、レオーノフに呼応して「実験的リアリズム（の文学）」と命名して掲げた。しかしそれが調和を目指したものであることは明らかにされているが、実験の細部はかならずしも明瞭ではない。私が補足するところになる。

全作品の中心に位置するのは小市民であつて、社会での地位からくる精神的特徴は、貴族地主の上層への憧れと下層への転落への恐怖であり、この二極のあいだでの動搖である。貧しく圧迫されているが、それからの出口を求めて、それが見出されずもがいている。その過程が極端にして、しばしば残忍、苛酷な方法で実験的に描かれている。第二作の表題にあるド・ボ・オ・ヒ・ニク（二重体および二重人、分身）の語がその特徴をよく伝えている。彼ら二重人は極端な場合には、二極分裂をきたして発狂し、己の幻影を見るようになり、精神病院に収容されるか、他者の庇護にはいる。それとは異なり、社会に反逆する我意の者は犯罪者になつて収監され（『死の家の記録』）、忍耐して生きる温順な者（原型は『弱い心』）は神を信じる宗教狂人か僧職者になる。後の二者は生きてはいても死んでいるのと同然であり、語り手をつとめる二

重人は「生きている人はいるのか！」と痛切に叫ばざるをえない。「我々はとつくる昔に生きることを止めてしまった先祖から、死んだまま生まれて来たのだ」（『地下からの手記』）。「野に生きている人はいるのか？」とロシアの勇者は叫ぶ。勇者ではないが、私も叫ぶ。しかし応答はまったく無い……」（『おとなしい女』）。「生きている人」とは意思と意識が調和した人であり、ペレヴェルゼフの考えでは、ドストエフスキーノ時代にロシアには存在しなかったプロレタリアートである。

『地下からの手記』は、誰もが指摘するように、それまでの文学活動の作家自身による哲学的総括であるが、意思と意識の分裂と相克が中心テーマであったことが表明されている。それを克服しての「生きている人」、すなわち調和の人間への到達が志向されている。したがって現状をよしとする「地下万歳！」を叫んだ直後に「ここまできて、まだ嘘をつこうというにか！ 嘘というのは、いちばん良いのはけして地下ではなく、ぼくが渴望しているがら、けして見出せない何か別なものだということを、二二が四ほどにはつきりと知っているからだ！」地下なんかくそくらえ！」と反転することになる。「何か別なもの」——それは調和であり、処女作以来の課題だったわけだが、この作品に至って初めて明確に哲学的に定義された。以後これを目指す極端な実験が『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、手をかえ品をかえて延々と継続されることになった。

その作中には貴族地主といった上層の人々も登場する。しかし彼らは精神（内部）において小市民であり、上辺に異なった衣装をさせられただけの仮装人間である。つまり上層の人間としてはきわめて例外的で稀な人々である。現実には存在しなかつたと言つてもよい。マイシキン、スタヴローゲン、ヴエルシーロフなどがそうである。

彼らがいかに本物の貴族地主と異なるかを知るために、ツルゲーネフやトルストイなど正真正銘の貴族地主階級出身の作家たちが書いたそれらの人物と比較してみればよい。興味深く面白い人物たちではあるが、その人工性は免れえず、上首尾に描くためドストエフスキーノは作中に語り手を配置しなければならなかつた。「私」の場合があり、三人称の人物の場合もあるが、いずれにせよドストエフスキーノの独創、革命といつてよい手法であった。そしてこれによつてペレヴェルゼフのいう「強大な視力」、レオーノフが言つた「赤外線、紫外線」等の普通の肉眼では見えない世界が開示されたのである。またそれによつて、埴谷雄高やジラールが述べたように、後代である二十世紀が超ええた高峰となつた。

AINシユタインにおいては絶対的空间また絶対的時間は存在しない。それらはともに相対的であり、また空间なしの時間はなく、その逆もまた同様である。世界は空间の三つの点（もしくは線）と时间からなる四次元のものとして、それらが無数に共存しているものとして存在している。つまりそれ（ら）は肉眼では見えず、心眼に依らねばならない。クズネツォフはAINシユタインとドストエフスキーノを結びつける

アノロジー

ものを類似ではなく、環および心理的なものとして説明している。私の見るところで
は、AINSHUTAINは四次元の心眼でDSTエフスキーを読んだのであり、その文
学に相対性理論を必要としている精神を見出したのであり、己が鼓舞されるのを感じ
たのである。

その同時代人のフランス人に相対性理論を「時間と空間のアマルガム」と非難し、
一書を著したベルグソンがいた。AINSHUTAINは「時間があって空間がない」と
その片手落ちを批判した。要するにベルグソンは肉眼でしかものが見えない観念論者
だったのである。問題はこの人物をたいへんな哲学者と勘違いし、DSTエフスキー
を執筆した日本の批評家がいることである。クズネツオフはこの人物を知らなかつた
はずだが、このロシア人が描き出すDSTエフスキーはこの日本人とはおよそかけ離
れており、それ自身がベルグソン批判、AINSHUTAIN擁護となつてゐる。

AINSHUTAINのモーツアルト愛好を研究しながら、クズネツオフはモーツアル
トが自身の創造の瞬間（に起こつたこと）を説明できない、と語つていたことを知
り、AINSHUTAINの物理学での同様な発言（文章として残つてゐる）とを結びつ
けた。また彼は、ブーシキンが自作『オネーゲン』について「タチヤーナがどうして
(貴族と) 結婚したのか、私には分からぬ」と語つたことに注目した。芸術家も物
理学者も実験の過程で当初は想定していなかつた結果に到達することがある。こうし
て彼はエンゲルスのバルザック論、レーニンのトルストイ論にも示唆されたであらう
が、芸術家がしばしば意図に反した成就をしめすことに着目しつつ、「眞の調和、眞
の実存」について、「ドストエフスキーはそれをわれわれに、アリヨーシャ・カラマ
ーゾフやゾシマの公認の正教のうちに見出せようとしたのだが、彼の詩学は、彼の描
写の能力の全重量を天秤の受け皿の反対の受け皿に投じてしまつたのである」（訳書
79～80頁）と結論している。すなわちイワン・カラマーゾフの問い合わせこそが、名
うての無神論者、唯物論者だったAINSHUTAINの心を動かしたので、間違つても
ゾシマやアレクセイであつたはずはないというのである。

クズネツオフが④を著した一九七五年当時米ソの核武装競争はまだ真盛りで、核弾
頭に最適なプルトニウムを副産物として産出することで米ソはともに原発にはウラン
軽水炉を選んでいた。トリウム熔融塩炉は逆にプルトニウムを産しないことでともに
斥けられていた。したがつて④にはスリーマイル（一九七九）、チエルノブイリ（一
九八六）はともに反映されていない。私は『樺太よ遠く孤独な』（一九八四）でソ連
の崩壊を予想していた者であるが、そして崩壊はまことに起るべくして起つたので
あるが、チエルノブイリはそれを促進したと見る。レオーノフもクズネツオフも生
涯の最後にそれを見たはずなのだが、この頃はまだ予想していなかつたと思われる。

AINSHUTAINとラツセルが提唱し、日本からも湯川秀樹が加わつて発足した反
核兵器のパグウォッシュ会議は、二〇一五年一〇月五十四か国が参加してその第五十

一回会議を長崎で一週間にわたっておこなつた。そのポスター「核兵器に使われる恐れがある世界の核物質データ」によると長崎で使われた分離プルトニウム（外に広島の高濃縮ウランがある）だけでその保有量はロシアが一七八・〇トン、英一〇七・二、米八九・三と核兵器保有国が続き、四位になんと日本の五七・一が登場している。ちなみに中国はすでにトリウム熔融塩炉に着手しているが、わずか一・八トンであり、日本の蓄積を、核武装を目指しているものとして警戒していく当然である。

フクシマ原発事故のうちの一基はこのプルトニウムを使用しており、現行の原発を続けるかぎり、プルトニウムの产出は止まず、他の核廃棄物質とともに世界各国が地中に埋めつつある。日本も青森県六ヶ所村にその施設を建設している。地中三百メートルの場所にガラスで防御して治め、はるかに後代の人類に渡すのだそうである。この状況を一語で表す言葉として私が思いつくのは「地球はその表皮から中心まで人間の涙でびしょ濡れになつていい」である。

これはイワンの言葉であり、クズネツォフがドストエフスキイの衷心の思想として繰り返して引用しているものである。ドストエフスキイは今日の状況まで洞察していたはずはないのだが、その「実験的リアリズム」の方法はかかる言語表現にまで到達していたのである。そしてその後の二十世紀の作家でこれほどすごい言葉を記した人は皆無であり、あまたのドストエフスキイ論者のなかでクズネツォフ一人だけがこれを取り上げた。

①を繕く人は冒頭の「はしがき」の章に「彼（故王）は完全な意味で人間だつた」という『ハムレット』による題辞を見て驚く。クズネツォフはこの父王の位置にスピノザを、ハムレットの位置にAINシユタインを置く。「二世紀に及ぶ衰退（この世の闊節ははずれたわい）」の後に、若きAINシユタインは「己がスピノザの調和を復活せしめる運命を担つてることを自覚した（ああ、なんという因果か、おれがそれを正す運命に生まれて來たなんて！）」。①の後半「相対論、量子、統一場理論」の章のなかでクズネツォフは言う。「調和の理想はスピノザの世界、互いに作用しあう物体の相互的、相対的な運動が起ころる統一的な世界である。AINシユタインはこの古典の理想を復活し、一七世紀に発見された相対性原理を一九世紀に発見された新しい現象に拡張した。「この世の調和（闊節）」は復活された。しかし最初に復活されたのは、慣性運動についてのものだった（特殊相対性理論）。きわめて大きい知的緊張の結果、AINシユタインは世界像から絶対的な加速運動を取り除くことができた（一般相対性理論）。しかしそれ以上進むことはできなかつた。「科学のなかには、電力場と重力場のなかに、世界の理想的調和に反する相違が残つていた。他方では、素粒子の運動の中に、世界の理想的調和の最初の図式に収まらないような特性が見出された。この図式から脱落したニュートン力学ばかりではなく、調和を復活させたAINシユタインの力学も、位置と速度が初期条件と相互間の相互作用で定まる粒子の連続的運動から出発する。しかし二十年代には、粒子の位置と速度が、一般的にい

つて、次のどの瞬間にも、限りない精度をもって決定されるものではないことが明らかになったのである」。

こうして没年まで三十年におよぶ統一場の理論の探求が始まるのであるが、それは普通の意味では実を結ばなかった。アインシュタインは告白する、「重力理論（一般相対性理論の別名——引用者）が完成したときから四十年が経過した（二〇一五年現在では百年ということになる——同）。この四十年はただ一つの努力——重力理論を一般化し、物理学全体の基礎となる能力をもった場の理論を創りだそうという努力——に完全に捧げられた。同じ目的のために努力した人は沢山いる。現れて私に希望を抱かせたものの多くを私は放棄しなければならなかつた。しかし最近の十年で、私は自然で、希望のもてるようと思われる理論が得られた。しかし私は、この理論を物理学にとって貴重だと見なすかどうかという質問に答えることができない。この不確実さはすべて非線型場の理論に不可避な打ち克ちがたい数学的困難と関連している」。そして困難を縷々説明して最後にレッシングの言葉を引用している、「真理を探し求めることは、真理を持つていてことよりも素晴らしい」と。

クズネツォフはこれを受けて言う。「科学はその発展の各段階で、発展の内的な力、遺産として次の時代に伝えられる問題を組み入れる。その時代にはしばしば認められないもので、次の時代に明らかになる矛盾、現在は存在しない証明を将来に持つてゐる仮説、これがその時代の科学的理論を次にくる科学の発展に結びつける結び目である」。「統一場の理論は科学のなかに非常に強力な傾向を持ち込んだ。それは理論物理学を相対論と量子論のアイデアの総合へ、種々異なり、今はまだ関連がなく、ときには互いに矛盾しあい異なる場にかんする諸観念を総合へと押しやつた。この意味で、統一場の理論は科学の主流のなかにあつた」。アインシュタインが示した「真理を求める努力」は豊饒な未来を約束している、と彼は説いたのである。

幼少期に新旧聖書の荒唐無稽に愛想をつかし、スピノザに学んで無神論者として生き、晩年にはプリンストンの自宅にはガンジーの肖像画を飾っていた人だった。
 「神」の語は「自然」の雅号だった。そのアインシュタインが、大天才となつて後、人生の後半での学的苦闘のなかで弱音ともとられかねない言葉を残している。「神がサイコロ遊びをするとは思えない」はまだしもであつて、統一場の理論に関連して「今度も道に迷つてしまつた」と嘆き、「神は狡猾である。しかし惡意はない」を繰り返し、「そうはいつても神もいくらかは惡意があるかも知れないぢやないか」と陽気にではあつたが嘆息をもらしたとも伝えられている。

「私はいま『カラマーゾフの兄弟』を読んでいます。これは今まで手にしたなかでもつとも素晴らしい本です」云々の手紙が書かれたのはこの時期のことで、前後に統一場の理論の苦労とベルリンでのナチズムの圧迫の訴えが挟まれた文言なのである。すなわちアインシュタインは、神の有無をめぐつてのイワン・カラマーゾフの苦しい探求に他人事ではないものを覚た。

『悪靈』のキリーロフにおいて神は存在しないと結論した人物を描き切ったドストエフスキイにとつて、問題は神の子にして人間、つまりは神人であるキリストにあつた。これについてのドストエフスキイの結論は、もつとも若く、したがつてもつとも未来に接近している少年クラーソトキンである、というのが『ドストエフスキイとは何か』において私が記した結論だつた。「キリスト教なんていうものは、下層階級を奴隸の状態に押し込めておくために、富裕な上流階級に奉仕していただけじやありませんか。もし彼が現代に生きいたら、さつそく革命家の仲間にはいつて、めざましく活動したに違ひありません」。クズネツォフはこれには言及していないが、AINシユタインはここにドストエフスキイの衷心の思想を見た、と私は信じている。

原発はその建設に巨額な資金を必要としてきた。フクシマによって危険が証明されたからといって止めるわけにはゆかないのは、廢炉のためにもつと金が要るからである。銀行筋もすでに融資した金の回収が必要である。したがつてその先に第二第三のフクシマがあろうとも原発を続ける以外にない——経済産業界のこの思惑が安倍内閣を誕生せしめた。己の資本主義的な利益のためなら人類の文明を消滅せしめてもよいという思想が存在しており、世界は危機に瀕している。古川和男は地球の救済を訴えていた。

差しあたつてプルトニウム増産の道を立ち、核武装と核戦争への道を閉ざさなければならぬ。いつたいどうすればよいか。

古川和男博士の理想の繼承者である(株)トリウム・テック・ソリューションは現存するウラハReactor(炉)内に小型のトリウムReactorを設置することによつて、Reactor内でプルトニウムを消去するRinRの技術を提案している。そしてこれさえも容易に受け入れない日本を見限り、OECD(經濟協力開発機構)の機関であるノルウェーのハルデン原子炉と契約を結びその実験改製作の作業に入つてている(その後カザフスタンに移した)。日本とは異なつて核武装を望まずプルトニウムの処理に苦しんでいる諸国が支持してくれており、私たちはRinRが日本に輸入されて利用されることを願いつつ、現存するプルトニウムをすべて消去し、すべての核兵器を消滅させようとしている。その先に安全にして経済的、かつ民主主義的なトリウム熔融塙炉の全世界的展開があると信じて。

「すべての道はローマに通じている」という格言があるが、一九四五年八月六日および同九日以降では——すべての道はヒロシマに通じている。クズネツォフ氏はもちろん、AINシユタインもドストエフスキイも異存はあるまい。まことにこれこそが、「AINシユタインとドストエフスキイ」という巨大なテーマの今日における展開なのである。

ペレヴェルゼフとバフチン

その政治思想ゆえに嫌いな小林秀雄だったが、文学の鑑賞家としては優れていた。例えばドストエフスキーについても①その第二作『ドヴォイニク』（二重人、分身）について「作品それ自体が発狂している」と言つており、その全作の男女の恋愛について②「悪夢のようだ」と述べていて的確である。また③『悪霊』のキリーロフおよびスタヴローギンと『カラマーゾフの兄弟』のゾシマにふれ、対立的な宗教観の持ち主を書き上げた作家をどう定義すべきか困惑していて、これももつともである。これらを受けて寺田透はスタヴローギンなどを例として「作家は作中人物を愛することなしには作中に生かしえないというのが一般的原則だが、ドストエフスキーの場合には役に立たない」としている。ただし二人はともに指摘においては正しいのだが、その原因については解明できず、またしようともしていない。

二人のうち小林は、一九三五年に断片的に翻訳紹介されたペレヴェルゼフを読んでいて、『ドストエフスキーの生活』のなかでは二か所でその名を掲げて生かしているが、寺田はペレヴェルゼフを知らなかつたようだ。しかしながらバフチンは読んでいて、その論が情熱（つまり作品内容）への言及に乏しいことを不満とした。一九二〇年代優れて指導的だったペレヴェルゼフがスターイン派によって弾圧排除された後のソ連での、ドストエフスキーについて語るにしても、形式に限定せざるをえなくなつていて状況に気づかなかつたためである。

弾圧されたペレヴェルゼフは出生地のハリコフの大学でロシア古代文学の著作に従事、一九六七年に没。一九八二年に『ドストエフスキーの創造』を含む主要論文が一巻選集にまとめられて出、（ソ連崩壊後に遺族によりさらに別の選集が出された）、日本では私が一九八九年に『ドストエフスキーの創造』を全訳した。小林も寺田も、もしも存命だつたならば、抱いていた疑問がそこでは、基本的に完全に解明されていることを知つたはずである。

ドストエフスキーはドヴォイニクという、その社会的位置では小市民に属する人物群を創造したのである。その出発点となつた第二作『ドヴォイニク』は、主人公の発狂で終わるだけではなく、まことに作品そのものが「発狂」している失敗作であるが、注目すべきは、若かった作家が、兄への手紙に残るように、この作によりゴーゴリを超えた天才に成ったと舞い上がつたことで、あまりの不評に冷静になりやがて誤りを認めることがある。失敗の原因は、当時の流行の進歩思想だった社会主義（後にエンゲルスにより「空想的」と定義される）の不勉強にあると思い、ベトラシェフスキーの会に加わり、一度は死刑判決をうけ、シリヤに流刑。以後この語は使用せず、再出するのは晩年の『未成年』においてである。しかしこの間にあって、この語は常に念頭にあり、己の二重性を哲学的に考察する人物を主人公にした作品を書いた。『白夜』に初出した「片隅」を「地下」と言い換えた『地下から手記』である。原語のポートポーリエには邦訳に見られる「室」の意味はなく、またこの語は反

帝政的地下政治活動をも意味していた。したがつて言葉を言い換えることによって、彼は以後の文学活動を芸術的地下活動になると決意したのである。

地下人は己に意識と意思の矛盾と対立があることを自認・表白する。この二つをペレヴエルゼフは、作家が使用した言葉を使用して我意（キリーロフ）と温順（『おとなしい女』など多数）に分類し、その双方をもつ者として二重人（ドヴォイニク）を定義する。またそれが分離独立した「我意の人」と「温順な人」の範疇を設定する。その作品では、二重人を中心として、これらの三つのタイプが描かれている。作家の愛情は温順の側にあつたが、二重性を描くという課題により、我意の側面をも力をこめて描かねばならなかつた。ドストエフスキイその人が「二重人＝芸術家」（ペレヴエルゼフ）だつたためであり、このことが解れば小林と寺田の疑問は氷塊るのである。

意識と意思は本来調和していなければならぬのであり、それが「生きている人間」の条件である。しかしどストエフスキイの人物群においては、それは無かつた。そのことを地下人は「生きることを止めた先祖から、死んだまで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口＝調和を求め、生きた人間を見出し創造しようと努めた。

革命から3年たつた一九二一年、ペレヴエルゼフは『悪霊』を論じた「ドストエフスキイと革命」において、ドストエフスキイの人物群においては、それは無かつた。そのことを地下人は「生きることを止めた先祖から、死んだまで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口＝調和を見出せば、生きることを止めた先祖から、死んだまで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口＝調和を求め、生きた人間を見出し創造しようと努めた。

革命から3年たつた一九二一年、ペレヴエルゼフは『悪霊』を論じた「ドストエフスキイと革命」において、ドストエフスキイの人物群においては、それは無かつた。そのことを地下人は「生きることを止めた先祖から、死んだまで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口＝調和を見出せば、生きることを止めた先祖から、死んだまで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口＝調和を求め、生きた人間を見出し創造しようと努めた。

ソ連時代のエルミーロフに代表されるドストエフスキイの否定論は、ペレヴエルゼフがミハイロフスキイに見たものの流れを汲んでいる。すなわちナロードニキの理論家は第二作のゴリヤートキンについて「同情されねばならぬ人物が虐められている」と非難、作家を「残酷な才能」と定義した。これに対し、ペレヴエルゼフはゴリヤートキンが狼（我意）と羊（温順）の両面を内に持つ二重人であることに気づかない短見と批判した。ドストエフスキイ文学は全体として社会主義革命を待望するものだったからである。

ソ連崩壊後のドストエフスキイ復活の機運とともに顕著になつた傾向に、ロシア正教、キリスト教系統のものがある。これは歴史的にはメレジコフスキイの流れを汲むものである。すなわちキリスト教が現れるのが『罪と罰』からであることをもつて彼はそれ以前の全作品を無価値なものとして退け、ドストエフスキイをキリストの再来による救済を説く作家と賞賛し定義した。ペレヴエルゼフはこれをも誤りとする。

キンの「キリストが現代に生きていたら、革命家になつてめざましく活動したに違ひありません」は、検閲にひつかかる怖れをなしとはしない言葉であつて、それを「最後つ屁」的に敢えてしたとき、ドストエフスキイは最後の作品と予感していたと見るべきだろう。その決定的証左はこのクラーソトキンによる「カラマーゾフ万歳！」である。単数であり、アレクセイを指すのであればその名を記していいはずなのである。この小説は後半に至つてロシアの未来を占うものとなつており、私はクラーソトキンの描出に漠たるレー寧出現の予感を見出してきた。そして己の全文学活動を振り返り、どんな時代が到来しようとの己の著作が無価値になることはないと信じ、よくぞここまで書いたと自賛したかったのだと思われる。すなわちこの「万歳！」は、アレクセイに託して、自分に向い「ドストエフスキイ万歳」と言つてているのだと読まれるべきではなかろうか。と、続編の有無を問うた文章で私はかつて記したことがある。

貿易会社に勤務、久しくソ連に行き来していたので、主として経済から崩壊は予感されていた。こうしてアマルリクの「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」に注目していく、まさにその年にそれからの引用を含む自伝小説『樺太よ遠く孤独な』（1984）を上梓。しかし人心が決定的にクレムリンを離れたのは原発事故（1986）によってだつた。一九九一年春広島大原医研の学者らとベルリン、バート三国、 Chernobyl 地区に行く。ソ連はその年末に崩壊。これを契機にロシア革命そのものが誤りだつたとする潮流が起つた。そして社会主義革命の「失敗」を洞察していくことと、ドストエフスキイが注目されることになる。『悪霊』の五人組の一人シガリヨフの「全き自由（への希求）から出発して全き專制に終わる」という文言がその証左なのだ、という。

マルクスは人類（厳密にはロシアその他を含まぬ西欧）社会の資本主義に至る発展過程を叙述して、最終的にはコミニーン（共産）主義のユートピア社会に到達すると予言した。この予言の実現を目指して行つた革命が人神スターリンの專制に至つたのである。ドストエフスキイの予言は的中した、というわけだ。しかし待つてくれ、シガリヨフの言葉を作者ドストエフスキイの思想の表白と捉えてよいのか。『死の家の記録』のペトロフらは本能に従つて行動しただけで、思想を持たなかつた。これを語つたのは、先行する作品『虐げられた人々』のワルコーフスキイの「全てはくだらない、くだらぬるのはこの私だけだ。全世界は私のためにつくられている」である。ピョートル・ベルホヴェンスキイの口を通じて語られるシガリヨフの思想はこの延長である。すなわち彼が「自由」を口にするとき、それが意味するのは自分勝手なやりたい放題の自由であつて、フランス革命の「自由、平等、博愛」の「自由」ではない。言葉は同じでも、中身はまったく違うのだ。そのことをペレヴェルゼフはまことに明確に説いていた。

ロシア語にヴィートという単語があり、これは「眺め」と「品種」の意味をもち、ときどいて誤解を招くが、こうした例は社会思想の場合は頻繁にあり、かつ日常的である。「自由民主党」を名乗る政党があるが、その党がその名の通りの政党であるとは、その党の党員でさえ多くは信じていないのと同じである。シガリヨフの「自由」は最初から専制を求めての

「自由」であつて、容易に專制に転化しうるのであつて、最初から專制を求めているのと同じなのである。その專制が達成されたとき、「全き自由」がえられるような最初から非倫理的な「自由」なのである。狼による羊群の支配。

ペレヴエルゼフはメレジコフスキイのメシア思想はマルメラードヴァラを救わないと断じつつ、その誤ったドストエフスキイ觀が、『罪と罰』以前の作品を切り捨てたことから生じたと指摘した。それによつてドストエフスキイを貫く一本の赤い糸、『罪と罰』以降がその發展であるところのドヴォイニクがまったく見えない論の展開となつた。ドストエフスキイの本質がこの一語にあることが見えていないといつう一点において、この保守にして帝制擁護の論は、左翼急進主義的なミハイロフスキイそれと同じなのである。すなわち、作品を分析することなく、自身が抱懷する思想によつてドストエフスキイを裁断しているのだ。同様にこの文芸学者は、「生きた人」とは無縁であることをもつて、キリーロフとゾシマを同一とした。「相違はただ、一方が呪詛を口にしつつ破滅するのにたいし、他方が運命への服従と感謝とともに破滅することにある」。

自身のうちに我意と温順の両者を含み、その相克を生きるドヴォイニク——これこそがドストエフスキイが描き創造しようとしたものである。ただしそれを徹底して行つたのであつて、その過程で我意だけの、またその反対に温順だけの人物群をもまた創造された。この性格でもあり心理でもあるものは、階級的には都市（農村ではない）の小市民のものであつて、上流の貴族地主階級のそれではない。しかしロシアを全体として描くためにはこの階級をも書かなければならなかつた。こうして作品には貴族・地主もまた登場するが、これらはすべて外見（衣装）が上流であるだけで、中身（精神、趣向）は小市民のそれである。その階層の人間としてはすべきわめて例外的であり虚体とみなされる。それをペレヴエルゼフは「仮装人物」と定義したが、これにも述べた三種類があつて、たとえばムイシキンは温順の人のうち唯一主人公として、それも性的不能者として登場している。また三つのそれぞれが男女に別れていて、その恋愛関係が二重人同士の場合、小林が言つた惡夢（その典型的は『賭博者』）のごときものになるが、またとくに温順な女性においては、看護婦願望（ダーシャなど）、すなわち性的個性（自己主張）を欠いたものになる。『弱い心』のシユムコフはムイシキンの原型であり、間違つて結婚する羽目になり、パニックを引き起こして狂死した。

仮装人物は現実には存在せず、作家の觀念もしくは想像のなかにしか存在しないものなので、これを成功裡に描くためには、ドストエフスキイは作中に記録者を配置しなければならなかつた。その嚆矢は『ステパンチコヴォ村』ということにならうか。以上の諸要素が織りなしていいる小説の外的現象形態が、結果としてバフチンのいうポリフォニーということになつたのである。

4章 Love in Vienna (カーネンの愛)

旧姓でいえば辛島和子だったひとよ、わが妻よ

あなたが亡くなつて墓に収め一周忌が過ぎたころのことである。第五福竜丸の母港だつた静岡県焼津に住む小野田という人から書信を受け取つた。あなたとの出会いであつた一九五九年のウイーン平和友好祭で全学連代表の団員でありチエコのプラハ大に留学した小野田勇の兄にあたる人からのものだつた。顔は忘れているはずだが、あなたも彼には会つてゐる。そして何よりもあの旅の全貌を記した私の『ヒロシマまでの長い道』には、大学での後輩としてちらりと出てくる人物である。思いがけない人からの便りであり、数度にわたるメールのやりとりの結果次のような事実が明らかになつた。

父が戦死した母子家庭で、弟は西北大露文科に進んだが、一九五九年に「金のかからぬい留学だ」と言つて、国際学連のルートで留学した、と母から聞いていた。当時自分は名古屋に就職していく詳しく述べ知らなかつた。しかしある時期から数年おきに弟が来日し、その都度知らせて來たので会つたが、常に外国人と同伴していて、ゆつくりと話し合うことができなかつた。自分の関心事はどういう経緯での留学だつたのかということで、それを知るべく質したが、けして答えず、そうこうしているうちに本年初めにプラハで死去した。国際学連を通じての留学と聞いていたので、たまたま二〇〇八年に同学連の副委員長だつた石井保夫氏の『わが青春の国際学連』が出ており、ネットで検索すると先生（私、瀬川修のこと）の長文の書評が目に留まつた。また貴HPから露文科で先輩であることを知り、弟をご存じなのはなかろうかと思い、お尋ねするのである、ということだつた。戦後すぐに学生運動が起り、東大を中心とする官学連と西北大を中心とする私学連が一九四四年に合併して全日本学生自治会総連合（全学連）が誕生する。これが、直ちにあたかも当然のことのように加盟した国際学生団体に、ソ連の息がかかつた本部をチエコのプラハに置く国際学連というものがあつた。その頌歌の一番は——

学生の歌声に若き友よ手を伸べよ／輝く太陽、青空を再び战火で乱すな／
われらの友情は原爆あれども絶たれず／闘志は火と燃え平和のために闘わん／
団結かたくわが行く手を守れ

されず、日本の学生運動では愛称されていた。ついでながら関西ではそれほどでもなく、一九五一年の天皇の京大行幸の際には学生たちは日本製の「平和の歌」で迎え、天皇への戦争責任を問う質問状を大学学長に託した。京大では大事件だったもので、二〇〇一年には京大でその五十周年の集会があり、東京での前夜祭的なセミナーを、依頼により西北大が仕切り実行した。またその記録集である「戦争と天皇制」を私が編集製作した。その際の京大出身者との接触で感得されたのだが、一九五〇年の日共分裂で徳田・野坂派に属した関西では、国際学連歌を東京で優勢な国際派の歌と考え、好まなかつたようなのである。加えて、占領下であつたにもかかわらず、百貨店で日本で最初の原爆展をおこなつており、歌詞のなかの「原爆あれども絶たれず」にも違和感があつたようである。

世界青年学生平和友好祭はこの団体と、規模ではもつと大きい世界民主青年連合（ブタペスト、日本からは民青同盟が加盟）の共催で、隔年、社会主義国の首都を開催地として行われてきたもので、世界平和評議会（パリ）の会合に出席した大山郁夫は来賓として招かれて一九五三年のブカレストに出席しており、これが最初の日本人の参加だつたと目される。

一九五九年のウイーンは、フルシチヨフの「異なつた社会体制の平和共存」の思想に基づき、初めて社会主義圏外の、しかしNATOに加盟していない中立国オーストリアに開催市を持つものだつた。

時は移り、一九六七年ソ連軍のチェコ制圧により、国際学連は消滅し、石井はプラハを去り、西ベルリンの自由大学で教鞭をとり帰国していたことは、その著書に記されていだ。しかし小野田勇はずつとプラハに留まつて、東アジア関係の貿易機関もしくは企業で働いていたようだつた。

私は、その兄なる人には弟氏を知つてゐること、また作品『ヒロシマまでの長い道』に一か所に、固有名詞なしで出でてゐること、またそのページを知らせた。加えて「金がかからぬ留学」だつたはずのこと、それも本には明瞭に記してあるので見られたい、と伝えた。その箇所とは次のようなものである。

留学は彼ひとりの問題ではなかつた。団の全学連グループには彼以外に、東ドイツとチェコへの二人の留学予定者がいた。空路で行けばいいものを彼同様に団に加わつてきていたのである。ただしこの中で共産党が神経をとがらしていたのは名前の知られてゐる彼だけだつた。まことに日ソ協会の（共産党员の）H氏がいうように彼および彼のグループがしようとしていることは規約違反なのだつた。それゆえに彼は団とともに帰る（帰国する）だらう。だがそのためには（国際学連の）I書記その他の関係者にそのことを打ち合え、了解をえておく必要があつた。（以下、中略）

（彼女と別れて男子宿舎に向かうと）建物の入り口では、打ち合わせを終えて戻つた者たちと彼は鉢合わせた。そのひとりが血相を変えて彼に食つてかかつた。こんな大事な時にどこに行つていたのかいうものだつた。彼は返事をせず、自分のベッドに向かい、腰を下ろした。ふと見るとスーツケースがなかつた。驚いていると、「気がつきましたか」とチェコへの留学予定者が言つた。その話すところはこうだつた。

コメントの追加 [12]

た。明朝の離団にあたって（日共系の）民青同盟が実力をもつて阻止するかもしれないのに、予定者の荷物を全部今日の午後にホテルのI書記の部屋に運んだというのだった。あまりさえその際に自分がやると民青の連中に疑われる所以（日本から同行してきた）スジョーノに口をきいてもらつて同じ建物の（同国人の）インドネシア人たちにやつてもらつたというのだった。（最終日の大行事だった）「太平洋沿岸諸国集会」に彼が出席していた間にこういうことがなされていたのだった。（一二二一～三頁）

こうしてあの夏、ウイーンで私は一度はあなたと別れ、団を離れてブタペスト経由でプラハに向かったのだ。そしてそこから空路、列車で東進する团を追うことになり、ナホトカで合流、帰国している。

小野田兄は最後に、留学の経緯にこだわる理由を明かしてきた。それは、弟には出身の静岡高校での女友たちで文通していたひとがおり、「あなたは自分史を書こうとしているそうですが、僕には書けません。なぜならば僕の人生は「裏切りに続く裏切り」の連続で、とうてい書けるものではないからです」という文面のある手紙を見せられたためなのである。それで弟がけして語らなかつた留学の経緯に問題があつたのではなかろうか、と疑うことになつた、と言うのである。

私は念のために、外務省に入りプラハ勤務の長い露文科の後輩に質してみた。「プラハには日本人はまだ数えられるほどの非常に少ない時代でしたから、その者たちで会ってビールを飲んだ仲です」とのことだった。しかし留学の経緯については語らず、私の名も口にしなかつたとのことだった。そうこうするうちに母親の遺品のながら、石井保夫に対して送つた問い合わせに対する返信と思われるものが出て来たと連絡があつた。とすれば緯は石井に問い合わせればよいのであつた。いわんや石井は東大医学部では先輩であるブント書記長島成郎によつて、その著『ブンド私記』（1999）の中ではでは「国際学連に派遣した」と明記されている人物だからである。

そしてついでながら共産党との対決を強調したこの島書においては、原水協と平和委員会は「日共寄り」と切りすてられており、私は主観的にはこちらに属していた。またあなたは第四回の東京での原水禁の世界大会で、ブンドに向かい一つあつた全学連とは論争した仲だつた。

また同書には西北大的ブンド派の代表者として露文科で二級後輩の片山迪夫の名がしばしば登場している。私が言葉を交わしたことのない人物で、小野田の留学に係わつたのは、トロッキズムの理論家として島から称揚されているこの片山であるはずなのだが、学科の名簿ではずいぶん前から「行方不明」と記されており、どうの昔に死去しているはずであった。参考までにそのことも伝えておいた。

すでに『トリウム原子炉革命』の執筆が『ヒロシマまでの長い道』とその続編『微笑の沈黙』なしには試みられず、また成しえなかつたものなのである。すなわちあなたの縁で私が古川氏を知つただけでは不十分だったのであって、本では女主人公が大分市で一時

時非常によく知られた女性が女主人公になつており、そのためこの本が大分市の新聞でも取り上げられ、古川家の縁者の知りところとなつた。かくて和男氏も読み、拙宅に訪ねて見えることになつたはずなのである。また私のほうもそれらの作品の延長として、古川氏とその仕事を捉えることができたのである。つまりあなたについて書いてきたので、フクシマ後の現在に繋がつたのだ

自分の一九五九年の体験と生き様を一九八六年になって書き、そして書き上げたのである。しかしそれはだれに読んでもらうためだつたろう。それは先ずだれよりも作品の中に登場する「大学の学生運動の先輩」であり「原水禁運動の團格で要職」にある人物だつた。名前は伏せられているが、松尾隆教授との関係では兄弟子となる吉田嘉清氏だつた。氏に対して「彼」と三人称化されている私は、出国にあたつて、「モスクワへの留学を目指して行くこと」を述べ、「その実現にあすかつて力あつた二人の全学連〇Bの名」を告げていた。二人はともに原水禁運動とはかかわりがあつた学生運動出身者であり、吉田氏もよく知る人たちだつた。

ついでながら団の役員会は、団長、四人の福団長、事務局長の六人で構成されていたが。このうち私を除いて三人が、松尾教授を知つてゐることが後に知られている。一人は西北大出身で学内で講演を聞いており、その印象を文集『松尾隆』では「学者というよりはアジテーター」と記していた。また一人はあなたが属した社会文化班の班長でもあつた憲法擁護国民連合事務局の久保田忠夫氏で、外部で講演を聞いていた。そしていま一人は、一九五〇年総選挙のさい飯田橋で出隆東大教授の選挙演説中、逮捕されて裁判にかけられた十二人の一人であつて、東大国際派細胞の中心メンバーの一人でもあつたS氏である。松尾教授が特別弁護人として出廷しており、松尾隆没後三十周年の西北大での集まりには見えていた。いずれも当時同じ団のなかにあって私がまつたく知らなかつたことだつた。

あの団では、帰路の車中で私、瀬川修ら三人の全学連グループの団規約違反無視の離団が動議として出され、その中心にあつたのがS氏であつて、私は帰団したにもかかわらず、団解散に先立つて除名されている。そのとき氏は日共青年学生対策部の路線で行動していたはずなのだが、六〇年安保の後、この派が「修正主義者」としてごつそり党を追われるか出ることになつた。こうして「松尾隆を偲ぶ会」で見ることになつたのだが、私が進んで挨拶したのは、それから十余年たつて、招かれて吉田嘉清にしたがつて東大一九会の会合で向かい合つて座つたときである。私が挨拶すると、顔で思い出したようで「トロッキスト」と低くうめいた。団の中でブントのトロッキストと見ていてことの名残だつた。

私はその後にS氏もまた避けがたく登場している、『ヒロシマまでの長い道』を謹呈することになった。「貴君にとつて樺太がどんなに重要であつたかが分かりました」という挨拶状があつた。そしてその後の関係は親しいものに変わつていつた。なにしろ例年一月九日に行われる所以その名が定まつた一九会の会合には必ず招かれることになり、また市

の主催する非日共系左翼の季刊理論誌『労働運動研究』に書くようになり、石井保夫の『わが青春の国際学連』の書評もこれに掲載されたのである。

しかしながら小野田勇の「裏切り」云々を聞いて、私が言葉としてはかつての團規約違反を謝罪していないことに思い当たり、小野田の件を紹介しつつ、非常に遅まきながら謝罪して手紙を書いた。「わたしこそ大変にスター・リン的に画一主義的だったと思います。貴君はドストエフスキイにつき著書のある人ですが、綿井も私なりにドストエフスキイは読んでおります」とあった。あなたに触れて「奥さんは清楚な感じの方だったと記憶しております」ということだった。つまり「昨日の敵は今日の友」「雨降って地かたまる」、和解は成立しているのである。

出来事は古く、まだ若かった時、六〇年安保の前年のことで、『ヒロシマまでの長い道』からも年月が経過しており、小野田勇の「裏切り」をも視野に入れつつあるいは補足し、改作する必要があるのかも知れない。

その二年前の一九五七年七月だった。原水協の訪ソ使節団の五人の団員各氏は、羽田空港ロビーで吉田嘉清の司会の下、新聞社のフラッシュを浴びつ一人ひとり抱負を述べた。すべて年配者で、ただひとりに二十代前半の若者だった私もまた最後に己のそれを述べた。それからゲートをくぐつていったのだが、その入り口にはレーニン平和賞授与が噂されていた安川理事長夫人の田鶴子さん、全学連幹部で東大のKとMが立つていて「しつかりやつてきてちょうだい」、「がんばつて来い」と私の手を握った。吉田氏が駆けて来て、電報を手渡した。書記長の高野秀夫をはじめとする西北大の友人たちからのものだった。私の青春のもつとも輝かしい一瞬のことだが、作品では省略されている。この高野は反ブランド派のリーダーだった。露文科の片山らによるブント傾斜を西北大への「裏切り」と批判非難し、私のモスクワ留学に反対し、後に葛飾かどこかの区議を何期か勤め、落選して江戸田川に入水自死した。革共同書記長を務め、夫婦で革マルに殺害された西北大の本田のことも忘れない。しかしこれは私たちの一九五九年とは無関係である。

私は本の中で「それはすべきではなかった。しかしせざるをえなかつた、そして、して良かつた」と回想されることになつた旅であった」と記している、つまり複雑に屈折した出来事だったので、書くことには何度も失敗し、そうこうするうちに初源である樺太の復活、その甦りがあつて、樺太を書ききることをえた。

ところがまだ本が出ないうちに、あなたが二度目の乳がんでついに両乳房を失つた。検査の過程で腎臓にがんが発見され、片方だけでは生きられないことが明らかになつて、年末に人工透析の生活に入つた。加えて一年後には転移が疑われることになつた。それらの諸事件の結果として書きうるものになつた旅物語である。誤診であることが明らかになり、「命拾い」をして退院してきたあなたはその時の心境を告白している。「空なる心境にはなれなかつたわよ。無、虚無だつたわ」。そうした段階になつて書きえた旅の物語だつた。

古川和男氏の場合も思いがけなかつたが、焼津からの小野田兄の問い合わせも同様だつたのであって、私は本を全面的に再読して、結びに置かれた、しかし長く忘れていたあなたのこの言葉を見出して、今日感慨を覚える。あなたは元来が活動的な性格だつた。週三度の人工透析の生活がそれを奪つた。

まことに本の主題は表題に掲げたようにヒロシマであり、あなただつた。時代背景としては、ブント共産主義者同盟成立の翌年、六〇年安保反対闘争の前年である。しかしそれはまさに背景として描かれればよいことだつた。小野田勇の「語りえない裏切り」もまたそれに属していた。すなわち友好祭の団には「全員一致して帰国する」という約束事があり、それを破り偽つて離団し、留学を果たしたのだったのだ。一方私がそのことを書いている、書きえているということは、それを目指して出国したのだったが、断念放棄して帰国したからである。そして年月を要したとはいえ本に記し、その兄の問い合わせに対しても、本の貢ナンバーを記して答えることができた。これはあの団にあなたが居てくれたならばこそ実現したことだつた。

年数がかかつただけではなく、思いがけなくも、松尾隆のドストエフスキイ関連遺稿（ペレヴエルゼフ）の発見とその処理のため、発表が一〇八九年とさらに三年遅れに流れこんだのだが、ブントの裏面史に光を当てたものとして、その先駆性も評価されたいものである。安保国会の突入にしても、島が「四、五人は死ぬかもしれない」と語っていたという風説がある。いずれにせよ一人の女子学生でも痛ましいのに、三、四人も死んだらどんなことになつたのだろう。

その題名から想起されるのは、それに先立つ安藤仁兵衛の『日本共産党私記』（199）であるが、私に關係なしとはしない島成郎の『ブント私記』が出たのは、一九九九年である。私に対しても十年遅れだつたことでもあり、私は本屋で立ち読みしただけで購入しなかつた。ところが『西北大・一九五〇年・史料と証言』製作時に収集した資料を、求められて大学の資料研究センターに収めることになり、老衰した吉田氏に代わり、保管先の吉田家で私がその処理をおこなつた。その際に書き込みのある島書を見出し持参、しばらくぶりで目をとした。次に一文が小野田勇にも関係がありそうである。

ブント書記長としての私の活動は多岐にわたらざるをえなくなつたが、正直な話、最も苦労したのが金集めであった。闘争が思いがけない規模に一挙に膨張したため、闘争資金も十倍、二十倍も要求される。（略）金にまつわることは裏方によつて行われるため「正史」には残らないのが常で（略）： ただブント書記長として私が果たした最大の貢献はこの非公式の金つくりにあつたことだけは証言しておこう。（略）私たちの「刑法犯」の犠牲になりながら愚痴ひとりいわずに許してくれた方々におそまきながら感謝とお詫びを著すしだいである。（105頁）

ブントの幹部は概して短命で、島はこの翌年に、また中枢ではなかつたらしい香山健一はその前年に亡くなっている。この派の数人のインタビューを収録した書に『60年安保 6人の証言』(2005)があり、その証言者の一人に、文化大革命下の中国に出張していくて出会った東大中文出身の旧知の小野寺正臣がいた。一緒に毛沢東の故郷紹山を訪ねた仲である。そのことを話すと「ストレスが多いから」ということだったが、この人物もそれからほどなく亡くなつた。森田実だけが存命で政治評論家として活動し、最近も共産党否定の文章除議会の雑誌に発表している。宮本顯治が嫌いで1958年に共産党を除名されからば、共産党を憎み続けて生涯を過ごしたことになる。

あの団で初めて会つたのはあなただけではなかつた。そのうちには『ヒロシマ』にも『微笑の沈黙』にも私たちの親しい友人として登場している当時は物理学生連合の会長にして全学連代表、後に高名な物理学者になつた大槻義彦がいる。大衆的には「火の玉」の解説で知られた学者だ。私とあなた、また彼と彼が好きだつた女子大生の四人は、すでにソ連を横断する列車の中で親しく、ウイーンでは、彼の言葉によれば「実の兄弟姉妹のような関係」になつており、それは帰国、団の解散後も続き、今日に至つてゐる。

物理学者はあなたの葬儀には海外にあつて、「これが被爆者か」と驚いた初対面のあなたについて回想し、三〇年におよぶ人工透析に触れて「大変だつたろうと思い、涙に暮れています」という長文のメールを送つてくれた。また帰国後には花輪をもつて焼香にきてくれた。彼は森田実には断固たる批判者である。それもなんとあの旅のシベリアの車中での話し以来なのである。彼自身かなり長く共産党員だつた人である。

多くの副次的事柄を省略排除もしくは簡潔な記述にとどめ、もっぱらあなたに捧げられた作品であり、それなりに完結している。不十分な箇所があるが、書き直す必要はないと思われる。レオーノフの場合とは異なつた、私がしなければならないのは今日ただいまの問題、あなたに導かれて到達・開眼した古川トリウム熔融塩炉FUJIについてである。それこそがその後の『微笑の沈黙』を経ての私が到着した地点であるからだ。いわんや原水爆すなわち核兵器の禁止と廃絶、平和で安全な核エネルギー炉の両問題はあの六〇年安保前年の年にはすでに存在していたのであり、古川学は六〇年安保が何であったかだけではなく、日本と世界の戦後が何であったかを明らかにするものだからだ。

人生では時として、短い時間帯に非常に大きな諸事件が重なり合つて起つて、その後の人生がそれについて考えるためだけのものになる、といった時間帯がある。私の場合は一九五九年夏の27日間の8ウイーン平和友好祭の旅がそれだつた。一九八六年にやつと書き終えられ、しかし一九八九年になつて公刊した第二作が主題とした諸事件であつて、表題にヒロシマに入る物語である。それから二十五年たつて、副題にではあるが、やはりヒロシマが入る作品を著すことになつた。

この間私には次の仕事を何にしようか思案した時期がある。ペレヴエルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳を手掛け、結局『ヒロシマまでの長い道』の続編としての小説『微笑の沈黙』に取り掛かかることになった。時あたかも、大分市のあなたの父上役後に母上を迎えて住むべく入手した持ち家だったが、その母上が亡くなり、また一時あなたが一人では電車で通院できなくなつて、それを放棄し、透析クリニック歩いて行ける場所に転居することになった年だつた。その苦難の日々の物語で、一九九五年の公刊である。それを書き終えた直後に、所属する市民平和運動の団体、平和事務所の機関紙『ピース・ピア』に寄稿した文章があることに思いあたつた。そしてこれが、両作の理解に資し、いま何をなすべきかを指示するので、以下に掲げることにする。

ヒロシマとは何か（1994・11）

ヒロシマについて書かれている思想的、文学的な文献はすでに多大である。しかしながらそのなかからもっとも重要にしてかつ根源的なものを一つだけ選ぶとすれば、それは大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（一九六三—四）でもなければ井伏鱒二の『黒い雨』（一九六五—四）でもない。それは日本人によつて書かれたものではない。それはベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラス（一九一四—）の映画のためのシナリオ『ヒロシマわが愛』なのである。

彼女は、アウシェビツツを描いた優れた記録映画『夜と霧』の映画監督レネに従つて、ヒロシマを主題としたシナリオを書くべく一九五八年に来日した。

かくて広島市に滞在し、原爆資料館には三度足を運び、原爆病院を訪ね、『原爆の子』を始めとする関連するすべてのフィルムと資料を見た。その結果後に彼女が記しているところによれば、「ヒロシマについて語るということは、それについて語ることは不可能である」という結論に到達した。

彼女は「原爆を悲惨として描くことは日本人にまかせよう」と考え、広島における一組の男女の行きずりの恋の物語を作つた。平和を主題とした映画の撮影のために来広したフランス人女優が、その仕事が終わり、明日は帰国するという日の前日にヒロシマの日本人男性と性的に結ばれるといふ物語であつた。

映画は最初の情事が行われた翌朝のホテルの一室から始まる。ヒロシマの男性は彼女に広島に留まってくれるよう頼む。せめてもう一日、というわけだつた。しかし二人はそれぞれ配偶者いる人々なのである。

フランス人女性が広島で恋におちたのは、原爆を知つたことの衝撃のためである。彼女はヒロシマで原爆を見た（知つた）と思う。しかし原爆を見る（知る）ことは不可能なのである。それを見知つてゐるものから見るならば、旅行者のヒロシマ理解などというものは底の浅いものであつて、デュラスは「君は何も見なかつた」という声を広島の虚空に聽かない

ではおれなかつた。そして作品の女性はその声に引き留められ、その言葉の意味を知るべく、日本人の男性を受けいれたのである。

大江健三郎は『ノート』のなかで「広島は人類全体のもつとも鋭く露出した傷のようなものである」と述べているが、デュラスはそれよりも六年前にまさにそのように実感し、それを表現したのだった。

一九六四年に大江がそのように記したのは、原爆の災害がまさにそのようなものであつたがためである。しかし彼が『ノート』を書くためにはその事実だけでは不十分だつたのである。彼が告白し、今日では非常によく知られているように、このとき同時に彼の最初の子息が脳に障害をもつて生まれていて、彼がそのことに驚愕し、打ちのめされていて、彼がその悲運を引き受けて闘う必要に迫られていたからであった。そのことが被爆者の理解を深めたのであり、彼はその「個人的体験」から広島を把握し、『ノート』を書きえたのだった。

それと同様にデュラスは女主人公の広島への理解と共感の根底にあつたものとして、女性のフランスでの過去を明らかにする。戦時下で十八歳であった彼女は占領軍のドイツ兵と恋におち、情事にふけつた。そして「解放」後にドイツ兵は射殺され、彼女は髪を刈られ、町中を引きずりまわされ、故郷の町にはおれなくなつて、パリに送り出された。その到着の朝、新聞おトップ記事に広島への原爆投下が報じられていたのだった。

広島で彼女は己が過去の傷痕を思い出す。そして常にヒロシマの痛みとともに生きることによって、個人的な傷を忘却に委ねようと決意し、またそれが可能となつたことを知るのだった。

デュラスがまた大江がそうであるように、私は広島もしくは長崎の生まれ育ちではない。私は樺太に生まれ育ち、ソ連占領下で暮らし、十五歳の年に引き揚げた。大学ではロシア文学科に進んだ。師事した先生に平和運動家だった人がおり、その縁で一九五七年に日本原水協の訪ソ使節団委加わることになり、この前後に初めて被爆者である人々に出会つた。

『ヒロシマわが愛』という作品の存在を知つたのは、その二年後ブタペストにおいてだった。国際学連の英文の機関誌で岡田英治とエマニエル・リヴァのスチール写真の載つた紹介記事を読んだのであった。私はその二週間後に東京の小さな映画館で、『二十四時間の情事』の訳名で封切られていたその映画を見て感銘をうけた。私はその翌日に西下し、初めて原爆資料館を訪ね、大分市に至り、現在の家内に求婚したのだった。彼女はヒロシマで一・三キロ地点で被爆しており、この時期大分市に住み、県被團協の事務局長をしていた。私たちは平和運動にかかわってこの年ヨーロッパへの旅を共にしていた。

結婚後一九六二年に最初の子が生まれたが、その子は心臓に欠陥があつた。ファロー四兆症の二つを有する重症のものであり、満四歳になつた時点での手術が予定されていた。そのような状態で、商社でソ連貿易の担当者として勤務しつつ私は大江の一連のヒロシマにかかるルポルタージュを読むことになった。一九六三年に雑誌『世界』で読み、翌年岩波新書に収められて読んだ。その小説作品はそれ以前から読んでおり、その後も多く読んできている。そして今日しばらくぶりで『ノート』を読みなおした。そしてこの作家が出発以来マ

ルクス主義者ではないことを繰り返して表明してきたことについて考へざるをえなかつた。

大江とは異なつてデュラスはマルクス主義を標榜する人である。彼女は戦中のレジスタンスからフランス共産党に入り、一九五〇年にスターリン主義に抗して除名されている。以来彼女は共産党とソ連にきびしく対決してきた。共産党のマルクス主義にたいしては「すでに死体硬直を起こしている」とまで言い切つていた。ところがそれを予見していた観のあるソ連の崩壊が現実に生じて後には、一転してマルクス主義擁護の姿勢を示している。彼女はいまや死語と化した感のあるプロレタリアートという言葉を生きいきと語つてゐる今日では稀なる作家のひとりなのである。最近のインタビューで彼女は述べてゐる。「私は七年間共産党員でした。魂はいまでも共産主義者です」「共産主義のうちで成功したものは何ひとつありません。全体的な殺人のようなものでした：現在それが不可能だということはみんな知つています。でも共産主義の思想は、その夢はいまもここにあります」。

大江は共産党員だったことはなく、マルクス主義者か実存主義者かということでいえは、実存主義者として出発した。そしてそれは国際的にはスターリン批判があり、日本でもとくに学生運動のなかでそれに呼応する動きがあつた年に彼は登場しており、一九五八年には記している。「ぼくが全学連の指導者に会いたいと考え始めたのはこの事件（一九五八年の日共本部のこと）が契機となつた。それにぼくも三十万の学生の一人として全学連に属している。そこでぼくは全学連の委員長と委員、二人とも共産党から除名されたという点で、勇敢に身をもつて全学連の中央執行委員会の独自性を主張した『一人に会つたのである』」「香山健一氏と森田実氏はじつにすばらしい青年であつた。僕は彼らとおなじ学校の学生であることを誇りにしていいと思う」「これは明らかに予測できることであるが、十年後日本の革新政党のリード・オフ・マンは全学連の執行委員会で育つた鋭い頭と逞しい行動力の若者たちに握られるであろう」（「叫ぶ全学連とふるえる学生」、雑誌『文芸春秋』1958年号）。大江はこの文章をその後の評論集に収録していないが、まさにそれゆえに注目されねばならない。

大江は「ふるえる学生」の立場でこの文章を書いた。そしてそれは後に『ヒロシマ・ノート』に連なり、反核の論客になつてゆく立場でもあつた。そしてここで思い出されるのは、この時期「叫ぶ全学連」（つまりブンド共産同）の「反ソ・反スターリン主義」を支持していた人に吉本龍明がいたことであつて、この評論家は八十年代に入つて反核に異論を唱えて論陣をはることになった。（以下、先の章に記述した文章と重複するので大幅に削除）

大江健三郎はまことに賢明かつ幸運にも左翼運動に加担しないですんだ。その文学的成績はもちろん才能によるが、また多大にそのことにも負つてゐるのである。しかしマルクス主義者であった人に師事し、共産党に属したことのある私の場合には、そのことを視野の外に置いて、己のヒロシマを語ることはできなかつた。なぜならば私は一九五九年に共産党からの離党を決意すると同時に被爆者の家内との結婚を決意していたからである。それが書

けるようになるためには、私は先輩の吉田嘉清が共産党を追われるのを待たねばならなかつた。

大江は『ノート』の結びにおいて『被爆者の同志』であるよりほかに正気な人間として生きようはない』「正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したい」と記している。私は結婚して五年してこれを見たのであるが、我が意をえたと思つたものだつた。しかし結婚の結果私の人生で何が生じ、また人生がどのようなものになつたかを私は知つてゐる。一九八四年以来、わけても一九八八年以來私は彼女のおかげで苦難の生活をよぎなくされて生きてきた。それがもし原爆のためであるとするならば（もちろんそれを証明する手だけではない）、私は原爆が何であるかを十分に知つた。なにしろ彼女には二十回は死んでもらいたいと思つて生きてきたのである。

どうにか持ちこたえることができたのは、私に先天的な病異変をもつて生まれ、四歳十か月で逝つた子があつたからである。私はその子に命じられ励まされて、彼女を救つたのだった。そのことに思い当たり、夫婦の二十余年を記すことになり、二年を要して最近私は『微笑の沈黙』六八七枚を書き終えた。

この先は一九五六年に四十九歳で逝つた松尾隆教授について書こうと考えてゐる。戦後精力的に平和運動に従事し、原水爆禁止運動の前史を作つた人だつた。その運動の成立は教授の晩年の出来事だつたが、それを「日本の（パリ・）コミュニケーションですのう」と生地の長崎県島原の言葉で語り、それに多大の期待を寄せていた。

島原半島の南端の高来町の真宗の寺の出身である。現在は甥の血筋にあたる人が住職であり、南国的な植物の茂る広い庭の一角にはその人によつて建立された立派な親鸞の銅像が立つてゐる。そしてそこからは一八三七～八年にキリストianが立てこもり、最後は玉碎して果てた原城跡の岡が望まれるのである。また寺の裏山は今日では公園になつてゐるが、日本最初のセミナリオが置かれた場所だということだつた。一帯は老若男女すべてが乱によつて死に絶え、乱後にはまったくの無人の血となつたところである。つまり現在の住人はすべて乱後に移住してきた人の子孫なのである。真蔵寺は近くの柳川立花藩から出ていた。

幕府は仏教の場合でも一つの宗派が強くなるのを警戒し、各宗派の寺を一つずつ置いたという。それらの寺の僧侶たちは毎年乱の終焉の日には集まつて、合同で城址跡で読経を行つてゐる。

当時好んで移住したと思つたものはいなかつた。かくて幕府は西日本の諸藩に人を送るよう命じ、諸藩は囚人を送つたと伝えられてゐる。土地の人たちは、寺の住職一族以外は囚人お子孫であると認識している。たとえば半島一帯は九州では例外的に素麺の生産が盛んであるが、それは讃岐の小豆島からの移住者が伝えたもののことだつた。（重複するゆえに後略）

百五十人の三十五歳の年齢制限以下の男女による、ソ連経由でウイーンに至る、船と列車による長い旅があつた。私は両親はじめ人々に「モスクワに留学する」と言つて旅立つてゐた。

国交回復からまだ数年でまだほんの数人が特殊縁故的な形態で留学を果たしていた時期のことである。東京＝モスクワの空路が開かれるのはずっと後、六十年後半になつてからである。

その二年前のモスクワ行の延長として留学を目指したのだったが、私は団とともに帰国し、翌年あなたと結婚した。式は一月に大分市で挙げられた。続いて四月末に北海道十勝の親族だけの式。そして五月、東京で披露宴ということになった。上野駅で送つてくれた年長のロシア文学者に、当時すでに業績を著していたが、後にソルジエニツインの『収容所群島』の翻訳で広く知られることになった木村浩さんがいた。その人が披露宴で私たちの結婚が英字紙で『Love in Vienna』の見出しで出ていたことを描い摘んで話してくれた。

あなたは大分県下ではテレビやラジオにも出演する有名な被爆者活動家で、それまでも、新聞にも書かれていた。その延長で結婚にあたつては西日本新聞（福岡）の取材をうけ、「辛島和子さんに春」の見出しで、結婚が私たち兩人の写真入りで大きく報じられていた。これが東京の英字紙の目に留まり、記事にされたのだと思われる。これで見られよう、木村さんは私たちの結婚をすんなりと認めてくれた。しかし同じくロシア文学者であり、後にS社の新しいドストエフスキイ全集の中心的翻訳者となつた江川卓さんは違つていた。氏によれば、「留学する」と言つて出国していった私、瀬川修がおり、帰つてきて半年後に結婚した瀬川修があるのであって、そこには無ければならない「中間が無い」と挨拶で述べたのであつて、私には理解できることだった。「中間」——それを口で言うのは困難で、書く以外になかつた。後に私が初心に立ち返つて樺太について書くことになつたとき、私はあなたをその物語に連れて行つた。すなわち私は、樺太大泊で、在校していた中学校の最初の授業で原爆について教えられ、大きな感銘を受けたことを記しつつ、引揚後の最大の事件としてあなたの結婚を挙げ、その遠因がその授業に有つたとしたのである。

私の最初の樺太の本は、わが家とか係わりのあつた露日の夫婦とその混血の息子と娘たち、彼ら彼女らの敗戦後の分裂と別離の物語である。その状態は1984年には解決のめどは立つていなかつた。それは硬直した国であるソ連の崩壊に近い変化を待つ以外になかつた。かくて私は、結びにおいて四歳十ヶ月で逝つた私の長子に「耐え忍ぶということ、それを探ること、それが叡智に繋がることになる」というデュラスの言葉を語らせることもつて、作品を閉めた。

木村浩さんからは心のこもつた熱い手紙をいただき、これは今も大事に保持している。しかし江川卓さんからは音沙汰無しで、早大横田瑞穂先生の偲ぶ会の席で見かけたので挨拶すると、「立派な仕事だと思いました」ということだった。私は氏の言った「中間」はその作品によつては書けていたとは思つていなかつたので、そのことも起因して、すぐに次作として『ヒロシマまでの長い道』に取り掛かることになつた。あなたを、あるいはまた原水爆禁止の大義を指摘された「中間」として書くことになつた。

ペレヴエルゼフの『ドストエフスキイの創造』に取り組まなければならなくなつて、完成から三年遅れて1989年に翻訳書と同時に出了のだったが、朝日その他に新刊紹介が出

かつて書いた文章「ヒロシマとは何か」を再読することになったのは、あなた、辛島和子との出会いが、時期的に完全にデュラス文学との出会いと重なっていることを確認するためでもあった。あなたがあの稀有のフランス女流に導いたのであり、そしてそのあなたが自身ではまったく意図しないで、夫の私を、幼馴染の古川和男氏に、そのトリウム熔融塩炉に導き、私がそれに関連して本を書くことになり、そしてそれが、それ以前に書いた（および訳した）本同様に、即ちそれなりの影響をもつことになつたからだ。そしてそれから四年たつて、歓迎すべき新しい動きが出て来たのであって、私はそれについてあなたに報告したい。

私はすでに1980年代末に弟の古川雅章から兄和男氏の研究について知られ、その後にチエルノブリにも行つて来ていた。またこれとの関連で反脱原発の動きが強まり、それらの動きとも接触があった。しかしヒロシマについて考え方、原発との関連をつきつめて考えることはしなかつた。すくなくとも十分ではなかつた。私が現行の原発が否定されねばならないものとして真に目覚めるためにはフクシマを待たねばならなかつたようである。

もつとも福島原発は、すでに久しく住む集合住宅の隣人が、リタイアしていたとはいえてこの勤務者であり、天皇の訪問の際には説明者のひとりだったそうで、あなたはその夫人と親しく、私にとつても身近な存在だつた。しかし古川兄弟の訪問をうけていたことの意味は

たので送らなかつた。私としてはむしろペレヴエルゼフにたいする反応を期待した。江川氏がペレヴエルゼフを知らず読んでもいいことは明白だつたからである。そういうするうちに氏の健康状態が良くないことが知られ、やがて亡くなつた。葬儀には赴いている。そして私は後に自著『ドストエフスキイとは何か』において彼の『謎解き『罪と罰』』の欠点を指摘することになる。

小野田勇の「裏切」云々から明らかになつたことに、私が氏からの要求であつた「中間」については、『ヒロシマまでの長い道』においても不十分にしか書いてはいないことだつた。小野田勇がこの本を読んだかどうかを私は知らない。知つているのは、数度にわたつて来日していたとのことだが、私を探して会うということをせず、私もまた同様だつたことである。共有した思い出が苦いものだつたためである。

私は意図していたモスクワ留学を実現せず、あなたと結婚し、会社員になつた。そのことを喜んでいる。その持続が古川和男という稀有の眞実への到着に繋がつたからだ。思えば不思議な邂逅である。

5章 トリウム熔融塩炉

大きく、フクシマ後に古川書を一読してただちにその驚嘆すべき価値を知った。こうしてすぐにお会いしたい旨手紙を差し上げたのである。たまたま民放の「著者に聴く」という番組に出演が決まっていて、誘われてそれを局で傍聴することになった。控室でお会いすると「ここまで書いてくれるとは（もはや言うことはない）」という感謝の言葉とともに、雑誌論文の増刷を手渡された。「安全な原発はなぜ潰されたのか」という表題のもので、執筆者は同番組の司会者、雑誌『芸術春秋』の元編集長堤堯氏だった。購入はもちろん、私がページを開いてみたこともない右寄りの雑誌『正論』がその掲載誌だった。

著者への堤の惚れ込みは大変なもので、堤はこの後すぐに追いかけるように大磯の古川宅にカメラを持ち込み、冒頭で「なんとかしてこれを実現させて差し上げたい」と宣言してロングインタビューを行つた。そこで古川は数々の貴重な証言を行つていている。一九八〇年加速器熔融塩蔵増殖炉 A M S B の発明により、自民党にトリウム利用促進議員懇話会（会長：二階堂進、会員一〇八名）が発足しており、この際、米オークリッジ研究所所長ワインバーグ博士は総理大臣中曾根康弘に親書を送っているのだが、握り潰されていること。その「失礼」が無念とともに語られている。「家族をはじめとした多くの人々の励ましと支持のもとに進められてきた研究、また啓蒙活動であった」が、「たつた一人（だけ）の時もありました」とも述懐されていて貴重である。まことにその核エネルギー炉研究は、原発研究の一条の清らかな流れであり、その学は「荒野での叫び」だった。

私は堤にも感服し多大に刺激される。彼に負けまいと励み、途中で、要請されて『日露領土紛争の根源』の著者として同じくこの人主催の「著者に聴く」の番組に出演したりしながら、二〇一三年末には初稿を完成した。そして、古川『原発安全革命』の発売元である、堤の古巣の文芸春秋社から出してもらうべく堤に相談、彼のアドバイスに従つて同社の担当者に送つたのであるが、なぜか出版には至らなかつた。堤に会つて質すと、「原爆にせよ原発にせよ、放射線による被害は誇張されている」ということだった。そしてその後、堤の番組には『それでも原発は止められない』といつた原発擁護の著者の番組が組まれるようになり、私は彼の変節を確認した。その後古川雅章と和男子息の和郎・堯氏との番組が土壇場でキャンセルされている。そして最も重要なのは、「この原発であれば、 Chernobyl も Fukushima もなかった」と帶に記して発売した古川本を同社が廃刊（？）にしたことである。どこからかの圧力がかかったとしか思われない激変だった。

フクシマ後日本原水協の初期の勤務者だった武藤一羊はその著書『潜在的核保有と戦後国家』に記している。「一九五七年、政権に就いた早々、岸（信介）は参議院で、「自衛権の範囲内で核保有は可能だ」とし、衆議院でも「核兵器という名前がつくだけでみなが憲法違反だ」というが、そうした憲法解釈は正しくない」とした。一九六〇年の安保改定で日本を米国の覇権戦略の自発的参加者に組み込んだ岸信介は、改憲を政治的使命としながらも、現行憲法のもともと自衛のための核兵器は保有しうるとする驚くべき憲法解釈を導入した首相となつた。この立場は以後歴代の自民党政によって引き継がれ、繰り返し再確認されてい

る。しかしそれらは原子力産業とは切り離された言語空間に位置づけられてきた。実態と名分は別々に用意され、いつでも合体できるように並べておかることになったのである」（94頁）。武藤はこの後、『戦後レジームと憲法平和主義』での「安倍極右政権」批判に向かう。

古川和男は自らが立つ位置を、エネルギー問題における「第三の道」と呼んでいた。すなわち右手に現行のウラン・プルトニウム軽水炉の原発路線があり、左にそれに反対する太陽光発電を中心とする各種の再生可能エネルギーの路線がある。原発の発足当初、ウラン派とトリウム派の抗争があつたことが忘れられて久しく、原発派も反原発派も、対象とする原発がウラン軽水炉だけとみなしていることでは一致している。フクシマ後これが訂正されるかと期待されたが、国際社会でのトリウム路線の評価の高まりとは逆行して、日本国内では変化は小さかつた。――

存在しているのは両派の対立であり、フクシマ直後では後者のほうが優勢となつた。にもかかわらずウラン軽水炉の再稼働が進んでいるのは、原発問題を隠蔽して選挙に勝った自民党によって安倍内閣がつくられたからである。そして岸を継承する安倍晋三によつて、憲法9条「改正」と原発再稼働はセットで進められI ている。

その安倍政権の近年顕在化している、もはや腐臭を放つまでになつてゐる腐敗の原因はどこに在るのか。それは突然表面化したのではなく、長期にわたる蓄積の結果である。内心の不安を押し隠しつつ、「安全だ」「安全だ」と自他を欺きつつ、四十五基ものウラン軽水炉を建設し、二〇〇五年頃からは「原発ルネッサンス」を口にするに至つていた勢力が強固に存在した。この腐敗は日本社会全体にまん延しないではいなかつた。それが近年、「取り戻そう、日本」の合言葉の下、政権の下で膿となつて現れているのである。

原発推進を目的とする国家機関、原子力委員会で委員長代理をつとめながら、他方でバグオッシャ運動に参加してきた人に鈴木達治郎氏（一九五一）がいる。フクシマで衝撃を受け、自己批判しつつ民主党政権下で長崎大に新設された核兵器廃絶研究センターの教授となつた。こうしてこれまで二度広島で行われてきた同会議の国際会議を、二〇一五年初めて長崎で開催することになる。一時なりを潜めた原発派が盛り返してきてはいる、と氏は観察していく。その近著『核兵器と原発—日本がかえる「核」のジレンマ』（2017）では、冒頭で「三・一一以前に逆戻りしているのではないか、という危機感」を表明した。

鈴木は「脱原発か否か」の「二極対立」について述べる。しかしこの対立する二つの勢力が、原発を現行のウラン軽水炉を念頭においていて、他にはいかなる原発も存在しないという認識では共通していることを語ろうとしない。彼は原子力が「ジキルとハイド」の「二面性をもつた技術」であることを指摘する。それは現行のウラン原発については当てはまるが、トリウム熔融塩炉については当てはまらないことを、フクシマ以前においてはともかく、以後には知つたはずである。2016年にはITMSFの吉岡律夫と木下幹康を原子力委員会で話させているのであるから。しかしそのことを著書においては語らない。

古川和男に日本国内に早くから支持者がいなかつたわけではなく、拙当該書はそのいくつかを紹介した。しかし執筆当時はその存在を知らず、最近になつて知つた重要人物に元朝日論説委員の科学ジャーナリスト、飯沼和正氏（一九三二～）がいる。トリウム熔融塩原子炉関連の最初の執筆は一九七七年『金属』という専門誌の「原子力発電・トリウム・サイクルの検討を」というものであつて、そこには古川の名はまだ出ていない。彼が加速器熔融塩増殖炉 AMSB 発明したのは一九七七年、続いてその単純小型密閉式 FUJI の発明に至つたのは一九八五年であり、二〇〇一年に『原発』革命が出て一般にも話題となつた。「原発」と括弧で括られている原発は、現行のウラン・プルトニウム原発を指しており、それを革命的に変え、それにとって代わる新たな原発の提示を目的とした書だつた。

二〇〇九年に米議会に「トリウム原子力法案」が提出され、六月飯沼は社会民主党的機関誌『社会民主』に、東芝で福島原発の設計に従事してきつつ、当時すでに古川和男の筆頭の後継者となつていた吉岡律夫（現 ITMSF 名誉会長）の校閲を経て、連名で「ウラン」から「トリウム」への政策転換か!?」を発表。七月にそれらを要約するエッセイ「核兵器の廃絶をめざす「トリウム原子力」の研究」を出身の京都大学新聞に寄稿している。拙著と完全に一致する主張が展開されており、心強く貴重だと思われる所以左に紹介させていただく。

トリウム原子力 飯沼和正・吉岡律夫

「トリウム原子力」とは現行の「ウラン核燃料」とは別系統の独立した原子力（発電）技術である。核爆弾の原料であるプルトニウムの產生とは無縁か、もしくはその減量に大きく役立つ技術である。だがそれは久しく政治的に“埋め殺し”にされてきた。それを今、京都の若手研究者たちは気付いて、叫び声を挙げ始めている。（略）

米オバマ新政権の側は独自にその技術的重要性に気がついている。昨秋、上院にはすでに「トリウム原子力法案」が提出。その一方でこの四月には旧来のウラン原子力法にもとづく重要施策、「GNEP」計画の「断念」が明らかにされている。

研究の自由が公認されている大学で、今こそ「トリウム原子力」への本格的な取り組みを始めるべきではないか。そのことを深くせつに望みたい。

現行の原発技術体制はウラン系核燃料によって立っている。しかしこのウラン系「核燃料サイクル」は必ずプルトニウム（核爆弾の原料物質）の产生が伴う。というよりは、プルトニウムの产生と利用が大前提として成り立つてゐるのが、外ならぬ現行の（軽水炉による）原発技術なのである。

この產生したプルトニウムを未だ完成していない仮定の「増殖炉」で、燃料として利用する。それを燃やして消化しさらに発電する。このような仮定に立つた理論「核燃料サイクル」でもって現行の原発体制は構築されている。

ところがこの理論が、今、崩れようとしている。この「核燃料サイクル」にとつて最重

要で、かつ不可欠な一環である「増殖炉」の実現が、世界でも日本でも破たんしかかっているからだ。その開発はすでに頓挫している。それが事態の現況なのである。

にもかかわらず、思慮浅き、日本のリーダーたちや、そして最近までの米国のリーダーたちは、（ウラン）原発こそが地球温暖化防止の「決め手」などと、巨費を注ぎ込んできた。

確かに、原発は炭酸ガスこそ放出はしない。しかし「増殖炉」なき現行のウラン系核燃料サイクルでは、今後、プルトニウムのヤマが世界各国に厳然として残るのである。日本だけでも、すでに今、70トン程度のプルトニウムを保有している。ちなみにヒロシマ・ナガサキ級の原爆が必要とした原料物質は、プルトニウムであれば、せいぜい8～10キログラムであった。

「トリウム原子力」の最終的な姿は「熔融塩発電炉」方式だと目されている。この方式ならば、理論的にプルトニウムは全く産生しない。しかしこの「本命」にたどりつくまでには、少なくとも10年の開発期間を要するであろう（古川和男博士）。

他方、そこに至るまでの「ツナギ」として、より実現容易な技術もすでに提示されている。トリウムとプルトニウムの混合燃料（棒）を新たにつくり、それを現用の発電炉（軽水炉）に装入する。いわゆる「ブルサーマル」方式の「トリウム」版である（豊田正敏・東京電力元原子力本部長）。

オバマ新政権に代わった米国では、すでにこの「トリウム原子力」への製作転換の兆しが見えかかっている。08年10月、上院へ民主・共和党的議員が共同提案として[▲]Thorium Energy Independence and Security Act of 088（「トリウム原子力法案」と略称）を提出、行政当局との折衝に入っている（Nuclear News誌四月号）。

その折衝の結果か？ 米エネルギー省（DOE）はこれまで進めてきたGNEP[▼]計画の「断念」を最近明らかにしている（朝日新聞4月21日付朝刊一面トップ）。[▲]GNEP[▼]計画とは、ウラン核燃料サイクルを完結すべく、ブッシュ前政権が推し進めていた要（かなめ）の計画だった。

前出の「トリウム原子力法案」は一九五四年に制定された現行法[▲]Atomic Energy Act[▼]を大きく改変するものだ。というよりは「ウラン原子力」を対象にした現行法体制に対して、これとは独立的な[▲]Independence[▼]なものとして「トリウム原子力」を対象とする新しい法的枠組みを打ち出すものとみられる。

この法案は今後、五年間の予算として一五〇億円（\$1150million）が盛り込まれている。

もともと世界でも数の少ない「トリウム」派ではあるが、何故か、そこには京都の大学の人脈が目立つのである。主流の権威を「何ぞ必ずしも」と疑う、反骨・在野の気風のせいかもしけない。

まず最初に、日本でこの火をともしたのが、京都・京大の出であった故・西堀栄三郎博士だ。彼は最初の南極越冬隊から帰国して間もなく、（旧）日本原子力研究所理事の時期

に、この「トリウム原子力構想」を打ち出している。一九六〇年頃だった。△世界最初の原爆被災国・日本こそ、これに取り組むべき。経済性・安全性も高い』など。

彼は京大理学部の助教授を経て、若くして民間に転出。敗戦後も、原研理事として、ごく短い期間を除けば、生涯、在野の技術者だった。在野の『大御所』であった。最後は京都の「名誉市民」にも選ばれている。

この西堀を継承したのが古川和男（現82歳）。彼は当時原研の主任研究員（後に東海大教授）だった。二人は原研にあって、孤立無援に近かつた。

古川は、米国での「熔融塩炉」実験の成果を横目に踏まえながら、これをトリウム系燃料に特化。「発電炉」として理論的にほぼ完成（『FUTI構想』）する。（その要約形である論文が佐藤栄作記念国連大学協賛財団の「核拡散防止への実効ある提言」の懸賞募集で最優秀賞を受けている）。

幸いなことに、このような知的命脈は今日の京都にも引き継がれている。実験系の常置講座こそ未整備ではあるが、大学の内外には、「トリウム」に心を寄せる若手の研究者が

“トグロ”を巻いて、出番を待っている。

だからこそ、京都の大学で本格的な取り組みを一と望みたいのである。それは、広島・長崎の、核兵器廃絶を待望する市民たちとも手を組んで。

飯沼和正氏の正論は、ミニコミ誌紙に発表されていたために私の眼にとまらず、私の古河支持の執筆に影響を与えなかつた。フクシマ後に現れた書物で私が影響を受けたものといえば、その年末に出版された安富歩氏の『原発危機と東大話法—傍観者の論理・欺瞞の言語』というものである。

私はすでに古川学の信奉者になっていたから、この人がトリウム熔融塩原子炉についてはまったく知らずに執筆していることの欠陥は自明だった。しかし東大内でも群を抜く予算を獲得し、原発ムラの中核を担っていた東大原子力学科出身者の「話法（語法）」への批判は峻烈・的確であつて多大に教えられた。古川和男とその支持者たちはトリウム熔融塩炉を取り上げてもらうべく原子力委員会には何度も働きかけ常に拒否されてきたのだが、その委員長の近藤駿介の自分を体制の「外部」と規定したフクシマ後の国会での答弁を批判していたからである。私はこれに刺激されて、もつと突つ込んでこの委員会の陰湿な古川拒否を告発した。

そしてそれから六年以上たつて、安富書を再読して委員長代理の鈴木達治郎の「原子力委員会は、安全性について責任を負つていない」という発言、また「私は推進派の世界では『反対派の仲間』、反原発派の世界では『温厚な推進派』と呼ばれている」とする「傍観者性」が批判されているのを見て、今日の鈴木氏の理解に資するものを見出した。鈴木氏はフクシマ直後のこの年には「我々の仕事は原子力の推進であつて、安全ではない」などとも発言していたとのことである。その後に変化してようやく今日の原発反対論者に成つていると觀察される。

「ウラン・プルトニウム」路線と「トリウム」路線は異なつた世界観・文明觀に属しており、両者に共通するものは何もない。前者は誤った路線、後者に属するワインバーグの言葉で言えば悪魔の、すなわち非人間的な路線であり、後者の天使の、すなわち人間的な路線とは対立する。

地球の表面で膨大な熱が生み出される放射性元素はウランとトリウムである。ウラン同位体のうち 235 を濃縮し三から五%の配合物をつくり、それが通常の原子炉の核燃料として用いられる。またこれを二〇%以上にすると核兵器に使用できる。原子爆弾を製造するにあたって重要なのは、連鎖反応をする核分裂反応を引き起こすべく、費用がかかりむずかしい濃縮をウランに施すことである。

核分裂性元素とは、エネルギーの低い中性子の照射により衝撃を与えられると、その原子核がバラバラに割れる元素のことである。トリウムを代表するのは 233 であるが、これには核分裂性は無い。しかし原子炉の炉心で中性子の衝突を受けると、トリウム 233 に変わった後、続いてウラン 233 に変換する。これは、名称は同じだが、天然のウラン 235 とはまったく性質を異にする。

両者の最大の特徴は、天然のウランが燃焼（核爆発）に際して核兵器にきわめて有用なブルトニウムを産生うるのに対し、後者がそれをまったく産生しないことである。このためまでは米国で後者が葬られ、これを継承発展させ、理論的に完成した古川和男のトリウム熔融塩原子炉も、日本では受け入れられなかった。

二〇〇九年の飯沼和正は「原爆材料を産むウラン系を長男坊だとすれば、それを産まぬトリウム系はあとから遅れてやつてきた次男坊であった」としている。また米科学ジャーナリスト、R・マーチンのフクシマ後の著作では言われている、「トリウムはまるで、ウランのあらゆる反応や性質と相補的な特徴、つまり対照的な特徴を備えているようである。陰と陽、男性と女性である。華々しくて威張り散らす兄のウランとは対照的な——みずからを消費するにあたり、もつと落ち着いてゆっくりとしている妹のようなものかもしれない」と。

△物質系の無秩序の度合いを数量化したもの△と辞書に説明されるエントロピーの学者に植田敦という人がおり、その一九七〇年代からの原発批判の仕事を私は評価する。『原発安樂死のすすめ』（一九九二）にしても、またフクシマ後の『原子力に未来はなかつた』（二〇一一）にしても教えられるものがあった。しかしすでに表題に現れているように、原発が現行のウラン・プルトニウム路線のそれでのみ捉えられていて、トリウムがまったく視角から脱落している。またその結果として、原発については何ごとかを語りえてはいても、それと対を成す核兵器廃絶については何も語れずいる。「死ね！」と言つただけでは死なぬものを、「安樂死」させることができるのは、トリウム熔融塩炉の技術だけである

「トリウムのAININTHETAIN」の異名を有するといわれる米ベンチャーエンタープライズの一人、ドーヴエルニュは言う。「トリウムは何らかの目的があつて地上に遣わされた。神とか何かと呼ぶ超越的な力が天上に存在するとして、もしそれがこの惑星に知的な存在をお創りになつたとしたら、地球をお見捨てにならないだろう。私はエネルギーにもとづく何らかを創造した創り主の存在を信じている。そしてトリウムは造物主による究極の創造物だ」。

プルトニウムは「ダイナマイトと青酸カリをひとまとめにしたような爆発物であり毒物である。人類社会に対する危険度の激しさ、広がり、そして時間の長さを考慮すれば、前者を合わせて一千倍か一万倍したくらいの代物であろう」(飯沼和正)。したがつてこれを產生する軽水炉にはもとより未来はなかつたのであり、自滅する炉だったのであり、フクシマはそれを証明したのだった。

原発の導入に際し、予想されるその危険に恐怖し、強い逡巡を表明した東京電力の担当者にまだ若かった豊田正敏氏がいた。宮仕えの身なので仕方なくその仕事に従事、ついには「安全」と信ずるまでに慣れ、全原発技術者の教科書的著作の執筆者にして編集者代表となり、また東電の原発技術本部長にして副社長の一人と成る。しかしその際にも高速増殖炉「もんじゅ」の継続には異議を唱えていた開明的な人だった。

原発が產生するプルトニウムは、使つた以上のプルトニウムが増殖される魔法のような高速増殖炉で使用されるはずだった。その不可能性を古川和男はどうに見抜いていて、西欧

中世の鍊金術に擬して記していた。「水銀を金に変えられますか? 中世の化学者の願いに反してそれは不可能だが、逆に金を水銀に変えるのは簡単なのである。原発の炉心に金を一年間入れておくと、約半分は水銀になつてしまふのである。神様はお茶目な方らしい」。

原発ムラの大部分が不安を醸成するものとして反発したのとは反対に、豊田氏はきく耳をもつていて、望んで古川に会っている。しかし「原発はすでに安全と成った」と言つて、古川から「馬鹿」呼ばわりされたと聞く。拙書で私はそのように記した。

フクシマ後、氏は慚愧する。トリウム熔融塩炉が良いことは知っていたので、現行炉へのトリウムの導入を提唱する。私は、NHKのインタビューで氏が古川の名を挙げずにその学を賞賛しているのを知り、拙著では豊田氏の案を肯定的に紹介した。そして拙著の公刊後、二〇一五年三月十五日の朝日新聞に同氏の更なる提案、「トリウム炉の採用提案を」を読むことになった。

「プルサーマルの代わりにプルトニウムにトリウムを混ぜた混合燃料を軽水炉で燃やす「トリウム軽水炉」を採用するのである。この炉で生成されるのはウラン233で核拡散上も問題がない。燃料をプルサーマルの倍長く燃やせ、経済的にも有利だ。高レベル廃棄物の発生量も飛躍的に少なく、安価な直接処分が可能となる。良いことづくめの原子炉だと確信する」。

朝日新聞はわが国の「核燃料サイクル政策について」いくども社説を掲げているが、ま

ことに遺憾なことに、この優れた豊田提案を取り上げようとはしない。

古川書に従い、結論するところなる。

世界を支配してきたウラン軽水炉はその一部が誤っていたのではなく、体系として全面的に誤っていた。それはその発明者であるワインバーグが悔恨をこめて指摘し、ついには憂鬱症に陥ったことからも明らかのように、悪魔からの買い物であった。

誤りの第一は、核分裂という物質の変化を扱うプラントであるべきなのに、それまでの発電の通念にしたがつて「火力発電所の原理」に基づき、核燃料体（反応物質プラス媒体）が固体で密封していることである。これを液体、米オークリッジ研究所（ワインバーグ所長）の「芸術品」と賞賛される研究成果、熔融塩炉に変えねばならない。それが成されていなかつたために、福島では爆発が起こったのだつた。

第二は、核燃料として、ウランを排除し、それとは異なつて、プルトニウムその他の放射性物質を產生せず、また資源量において豊富な（したがつて安価な）トリウムに代えることである。これを熔融塩炉で用いれば、安全は全面的に保証され、運転がきわめて簡単になる。核兵器に役立つだけのプルトニウムを產生しないことで、核軍縮に貢献し、またその処理に苦しむことがない。ウラン軽水炉の現状は、この產生物の蓄積により、核戦争によつて消費するか未来の世代に残すかのいずれかを選ばなければならなくなつてゐる。トリウム熔融塩原子炉はそれらを消滅することが出来る。TTTSはその国際特許を古川和男から継承している。

第三に、運転の難しさと危険性が原因で、ウラン軽水炉は城塞のように大型化され、かつ過疎地域に建設されることになった。トリウム熔融塩炉に代えるならばこれを小型化し、電力使用地に建設し、ステーションによつて管理できる。送電距離の短縮（ゼロも可能）により、料金は安くなる。公共性が保証され、国民大衆にとつて親しみやすいものとなる。

しかしながら悪魔に教唆されたかの如く、安全神話振りまき、最後には「原発ルネッサンス」を高唱し、全国に建設した原発は五十四基を数えた。その資産価値は総額で五十一兆円に達するといふ。その大半が稼働できずにはいるのであり、労働組合までが再稼働を求めている以上、彼らの救済のためにも、豊田案の実行が望まれる。これにより軽水炉に勤務してきた人々はトリウムに慣れることが出来、全面的なトリウム熔融塩炉への移行が可能になるだろう。

また原発を軽水炉のみと見なし反対してきた人々も、トリウムが無害であるだけではなく、プルトニウムを消去することを知り、トリウム熔融塩炉の支持者に転じてくれるだろう。その多くは善意の再生可能エネルギーの支持者であるが、古川は、核分裂によるエネルギー取得は、AINシユタインの発見による自然な営みである、と説いてきた。すなわち、かつて地上には自然な核分裂が起こっていたことがあり、その跡もアフリカで発見されている。加えてワインバーグの発明による熔融塩は「核燃料を溶かし込む核反応媒体・反応熱を運び

出す熱輸送媒体・反応生成物を処理する化学処理媒体』の三機能のすべてを果たすという。またそれは、地球にほどよい熱をもたらしている地下のマグマと科学的内容が近似しているともいう。すなわちどこから見ても自然の摂理に適った人間的な炉なのである。

早大教授松尾隆は古在由重、宮本顯治と昵懇の日共党員だった。この党は一九五〇年のコマンドナルム批判に際し分裂したのだったが、ともに統一会派と自称した派に属し、宮本は先に復党し、第六回全国協議会を用意し、党の統一を実現した。古在氏、松尾隆もこれに従い、その指導下にあつた吉田嘉清ら学生運動出身者も同様だった。松尾は二年後に死去、大隈小講堂で行われた平和葬の名の葬儀では古在・宮本両氏は注目すべき葬辞を読んでいる。

それから三十年して松尾の三十九回忌があつて、司会は吉田、冒頭の挨拶は古在氏だったが、宮本氏は招かれなかつた。その二年前の原水協の分裂の余波のためである。「松尾が存命だつたならばどのよう立場をとつたろうか」が隠れたテーマであり、それは同時に発行された文集『松尾隆』にも顕われていた。そしてさらに十五年たつて、東大国際派（統一会派）の『一九全文集』と踵を接するようにし、相互に交流しながら『早稻田・一九五〇年・史料と証言』全六冊の発行が始まつた。私の「松尾隆」は唯一の連載評論だったがその結びで、私は記した。

「その生家の庭からはキリスト教の地、原城跡が見える。教授の西欧への憧憬の根底にはこれがあつた。しかしその人は背後に親鸞お和算を聞いていた人だった。そして西欧に深くのめり込み、西欧と世界に発信するものがないことを残念思つていたと思われる。仏教には歴史哲学が欠落しているのである。ビキニ以降の原水爆禁止の運動に禁忌雀躍しておられたが、それはこの運動において日本人が史上初めて己を人類の名で語り始めたからだった。

相克として存在していたマルクス（その他）とドストエフスキイ（その他）は、また西欧で日本は、ヒロシマ・ナガサキを考える過程で、相互に熔解するのを教授は感じていたのはなかろうか。人類の歴史はヒロシマ・ナガサキをもつてその前史を終え、その前史をおえ、私たちが生きている現在は、「ヒロシマ後」と呼ばれるに相応しい時代である。ビキニ後の原水爆禁止運動の高揚に遭遇して、「この運動は日本の（パリ）コミューンですのう」と島原言葉で語ついていたとき、教授はコミニーン（共産）主義をも新しくとらえなおすヒロシマ默示録、その哲学の樹立ともいうべきものを目指していたのである（一九九九年一二月）。

五回に及んだ連載は文芸評論家的小田切秀雄さんが毎号褒めて葉書をくださつていたものであつたが、またこれよりも遅れて二〇〇五年に原水協理事長だった草野信男さんを偲ぶ会で会つたとき、この部分を激賞してくれた友人に池山重朗氏がいた。一九六四年ソ連の原爆実験再開に端を発し、日本原水協が分裂した際、原水協を去つて原水禁国民会議の発足に尽くし、二〇〇七年に亡くなるまでその中心にあつた理論家だった。彼の激賞の対象とな

つたのは、太字でしめした箇所であると思われ、そこが彼のヒロシマ・ナガサキと共に通したからだった。

「原子力の平和利用」の美名の下での日本へのウラン原発輸出の試み、対応する日本側からの積極的受容は、一九五〇年代、原水禁運動の発生ときびすを接するよう起こった事象であり、米国は一九五六年に広島の原爆資料館で原子力平和利用展覧会を強行した。その後原発が建設されるようになり、それが平和目的であるということで、被爆者たちを含む日本の原水禁運動は全体としてこれを受け入れている。しかし依然としなかつた人々は少數だったがいたのであり、原爆で隻眼になっていた日本被団協初代会長の森滝市郎氏がその代表格だったと伝えられている。また非被爆者では、ソ連の実験再開を擁護したことで日共を離党し原水禁を擁立した池山重朗だった。そして池山は一九七九年スリーマイル島事故を契機に核兵器廃絶と原発反対を理論的に結び付け、これに支えられて森滝を理事長とする原水禁はそれを運動方針とした。池山は二〇〇七年に亡くなつたが、その方針は堅持されていて、フクシマ後原水禁は迅速に福島県で世界大会を開催しえた。対するに原発を容認していた原水協はあわてて反原発を掲げることから始めなければならなかつた。

しかしながらフクシマ後に再刊された池山著『原爆・原発—核絶対否定の理論と運動』を見るとき、もつとも優れた理論家・活動家だった池山にしてなお古川トリウム熔融塩炉についての認識が皆無であつたことに気づく。それは副題にすでに現れていた。彼にしてそうであり、他の類似の論者については言うまでもない。

対するに古川男はどうであつたかといえば、原水禁・核廃絶の運動の外側で生きながら、古川書の最終の第十章は「核兵器完全廃絶への道」と題されている。そこでは己の科学技術上の研究が「世界に冠たる平和憲法を持つ日本人の責務」の遂行である、と宣言されている。池山や私たちの運動とは切れていたのは、無関心のためではなく、疑いもなく専門領域で忙だつたためであり、また私たちの側が、ウラン軽水炉以外に原発は存在しないと思い込んでいたためなのである。

核兵器廃絶がかならずしも原発反対ではなく、原発反対が必ずしも核兵器廃絶を目指していない、という状況がフクシマ以前の日本には存在していた。風力と太陽光だけでやつてゆけると考へるひとは決して多くはなく、人々は現行のウラン軽水炉が危険であり、かつ原発派それ以外に無いこんでいるので反原発なのである。

核兵器は使用されはならず廃絶されねばならない。またそのためにはプルトニウムを產生するウラン原発は廃絶されねばならない。それに代わって太陽光と水力で十分かといえば、食料を輸入に頼っている国であり、平地は農地として使用されるのが望ましく、自然災害の防止のためにも森林は維持されなければならない。プルトニウムを產生しない核エネルギー炉が核兵器の廃絶と安全なエネルギーを提供するのである。これが陽の目をみなかつたのは、米国で一ーソ連においても同様だつたが——冷戦派が核弾頭用にプルトニウムを必要としたからである。

安全で経済的なトリウム原発は、プルトニウムの消滅によって、核兵器の廃絶と一体化す

る。すなわち双方は同一の問題の表と裏の関係にある。またそれは現行の平和憲法を擁護し、これを改変しようとする勢力と対決する。古川のF U J I はそのような炉である。

拙当該書では冒頭で紹介しているが、豊田正敏氏はまだフクシマ以前の二〇一〇年「良いことづくめのトリウム発電炉」を提案、フクシマ後の二〇一三年のNHK取材班『原発メルトダウンへの道』では、二〇一八年七月の日米原子力協定の改訂を見据え、米側からのプルトニウム蓄積批判に備え「先手をとつてトリウム発電の併用に日本は踏み切るべきです」と提案していた。その後の四年間に日本は高速増殖炉「もんじゅ」を止めざるをえなくなり、にプルトニウムは使用の當てはまったく無くなつた。それはその後にも増大し、分離ずみのものだけで七四トン、廃物の状態で一〇〇トンに達すると言われている。六ヶ所村の再処理工場が動かず、使用目的が不明のまま、再稼働された軽水炉から毎日さらに追加されている。こうして六月九日の日本経済新聞は米政府から厳しい問い合わせがあつたことを報ずることになった。「先手をとつて」という豊田氏の提案は顧みられることなく、「心配」は的中したのである。

伝えられるところによると、日本政府は「上限をもうけて」米側の要求に応ずるのだそうである。何のための「上限」なのだろう。「日本の核武装のためである」とは口が裂けても言えぬ以上、どのように説明するのだろう。たとえ核兵器に利用しなくとも、盗難にあり、粉末化され精神錯乱者によって東京都心に散布されれば、大惨事が起ころるのである。逆にトリウム熔融塩炉で燃やすならば簡単に消滅する。

ともあれプルトニウム削減の実は示さざるをえず、それは述べたようにTTSが所有する古川和男と三田地紘史発明の特許「液体核燃料を用いたプルトニウム消滅核反応炉」（二〇〇二）に頼る以外にないのである。事態の展開が注目される。「プルトニウムを消滅させるにはトリウム系燃料炉、それも熔融塩炉に入れるがよい。容れる他にないだろう。既存のおうラン利用炉で燃やしたのでは、炉内でウラン²³⁸から再び燃やした半分のプルトニウムが作られる。ただしトリウム炉でも固体燃料炉であれば、一回の燃焼で入れたプルトニウムの半分くらいしか燃やせない上に、ウラン²³²の高放射能のために、ほとんど後の化学処理・燃料体加工ができない。その点トリウム熔融塩炉であれば、溶かし込まれたプルトニウムは着実に燃焼消滅できる」（『原発』革命（2001）～『原発安全革命』（2011））

ウラン軽水炉の頑迷な擁護者たちはよく知っているのだが、一度その体内にトリウム熔融塩炉を取り込むならば、それが「よいことづくめ」のものであるために、ウラン・プルトニウム路線は崩壊し、トリウム熔融塩炉路線がとつて代わるのである。これは必然の成り行きである。私はそれまさに始まろうとしていると観察する。日本社会の隅々にまで及ぶ巨大な変化が起ころうとしている。原発ムラ体制には亀裂が生じ、それは崩壊に向かい一つある。

二〇一八年九月三〇日文部科学省は、プルトニウムにつき、全量を資源として活用する前提を見直し、廃棄を選択肢に加える方針異転換する決定を余儀なくされた。好んでのことでのこと

はなく、米側の圧力に屈しての仕方なしの態度表明である。その証拠に米側に依頼しようと
しても、膝もと日本のTTSには見向きもしない。トリウム熔融塩炉革命の前夜にあるとは
樂観できぬ状態だ。

古川和男氏の事業は、生前に立ち上げていたITMSFとTTSによって継承発展せし
められており、私は前者の会員、後者の株主である。その中心にある人々からは、本の構想
執筆の段階で多大にお世話になった。

吉岡律夫理博は、東芝で福島原発の数基の設計に係わった人で、早くからその欠陥に気づ
き古川門下に入った人である。事故に責任ありと感じているようで、フクシマ関連の東芝幹
部の訴訟では、告訴側の証人になって出廷している。この人からはワインバーグについて多
大に教えられた。その著『最初の核時代』の白眉は一九九一年の広島・長崎行の所産であ
る「ヒロシマの聖化」の章である。オークリッジ研究所にあつて原爆製造にかかわったこの
人は、ユダヤ、キリスト、イスラムの、いずれも共通の唯一絶対神の宗教にそれぞれに有る
絶対的禁忌のいずれに照らしても、許されざる悪として原爆を把握した。

そして平和公園の梵鐘の音色に深く心動かされたのであって、その制作者を特定し、大き
き重量とともに三倍の同じ鐘を発注した。元軍人らによる反対意見があり、しばらく同市の庁
舎の中に留め置かれたが、やがて外に出され、『International Friendship』の名で市の公園
に据えられた。その広義と狭義のそれぞれの意味についてはすでにかつて述べた。

その「良いこと尽くめ」の値打ちが国際的にも明らかになつて二〇一七年一〇月IAEA
(国際原子力機関)はパリでトリウム熔融塩炉に特定した国際会議を行つた。米国を始めと
し世界ではでは、高名なビル・ゲーツの会社をはじめとし、その実現を目指すベンチャー企
業が二十社以上も輩出している。各國政府もまた公的資金を提供している。もっとも進んで
いる中国では試験炉が建設されており、二〇二〇年には臨界に達し、二〇三〇年には世界初
の商業炉として稼働する。

これらの国際的動向に刺激され、ITMSFは二〇一七年九月プルトニウム原発の被
災都市長崎でフォーラムを行つた。古川トリウム熔融塩炉FUJIが目指すのが核兵器の
廃絶と安全な核エネルギーの提供であり、それはプルトニウムの排除と消滅に帰着する。
その主張を、場所を長崎に選んで全国に発信せんがためだつた。

冒頭木下幹康理事長が古川和男初代理事長の業績を紹介したのは当然として、続いてそ
の著書が被爆者によつて靈感を与えられ、かつまたその究極的願いに沿つて執筆されてい
ることを明らかにしたものとして、拙著をスライドで紹介してくれた。その裏表紙には木下
氏撮影になるオークリッジ公園の日本の鐘が印刷され、帯には、結果として我々を結びつけ
た人である吉田嘉清氏の、古川家とあなたの縁にも触れた推薦の辞が記された本である。

長崎は冒頭に述べたように第二回の原水禁止世界大会が行われ、会期の最終日に日本被
団協の結成宣言が出されたところである。あなたは登壇し、被爆者女性として何ごとかを話

している。新聞社撮影のその大型の写真があり、私はあなたの葬儀では、会場の入り口に最初の一枚として置いた。

列車による往路と復路に観光したモスクワやキエフについては言わなかつたが、ウイーンについて、結婚当初のことだつたが、「あまり齢をとらないうちにもう一度連れて行ってね」と言つてゐた。しかしその願いは叶わなかつた。原因はかかつて一九八四年から始り、二〇一六年まで続き、死によつて終わつた週に三日の人工透析にあつた。この間あなたが首都圏より遠くに出向いたのは、大分県の二度と、北海道十勝のわが家の一度きりで、すべて行き先で透析をうけながらの法要と葬儀のためだつた。ヴィーンはファイルハーモニーの来日公演で済まされた。それと美術館と能楽堂だつたね。もつともそれもまだ歩けるうちのことだつたけれども。

あなたと出会い結婚しなくとも私は樺太について、ということはチエーホフについてとということになるが、書かざるをえずまた書いたらどう。また大学は露文科などに進み、ドストエフスキーやマルクス主義者だつた松尾隆教授という人に師事したのだったから、ドストエフスキーについて、マルクス主義の立場から書いたらどう。現に在つたしました在るようにな。もつともそれらさえもあなたの良人であり、ひとりの遺児をふくも子たちの父親として書いている。しかしながら無しには絶対に有りえなかつたものとして、古川氏関連の本がある。あなたが在つて、古川和男という稀有の人との出会いが起つたのであり、遅れてフクシマになつたが、その人に係わつて書くことになつた。それももともとの専門からはかなり離れた領域に踏み込んでのことだつた。

トリウム熔融塩炉——それがその名称だが、それをもしも知らなかつたならば、私がどうなつていたか、どういう状態のなつていていたか、と思うと慄然とする。私はありふれた反原発論者に留まつていたはずなのだ。

述べて來たように、古川学は出発が米国だつた研究である。しかし熔融塩という媒体の発明に留まつて、弾圧により中止せしめられ先に進めなかつた。本に記したように、研究は日本人古川和男によつて引き継がれ、理論的には一九八五年にF U J Iとして完成した。しかしその実現を目指して設立されたT T SはR in Rの海外での試験を行つてゐるが、資金難で苦しんでゐる。

吉岡律夫と木下幹康は国際的なトリウム熔融塩炉の教科書（米出版社、2017）の衷心的執筆者であり、日本は理論的には世界の先頭に位置してゐるのであるが、日本国内での実現は阻まれてゐる。

世界の先頭を早いスピードで走つてゐるのが、国家企業である中国上海の応用物理研究所（S I N A P）であり、その炉型の基礎は日本のF U J Iのものである。そもそも日本ではいまだに邦訳がないワインバーグの名著『最初の核世紀』の中国訳は一九九六年に出来ているのである。国家による取り組みの差は歴然としている。一一

その総リーダーの徐洪傑氏をI T M S Fは二度セミナーに招いてゐるが、二〇一六年の

講演では、トリウム熔融塩炉が容れられていない日本の状態を「気の毒だ」と評していた。FUJIの祖国でありながら、その祖国からは排除されているからである。日本は二〇一八年六月のトリウム熔融塩炉促進総会にも氏を招いており、私は聴講したが、事業の順調な進捗状況を語つており、他の諸国の講演者との相違には甚だしいものがあつた。中国の場合は、核エネルギー炉に取り掛かるのが遅れたために、またウランを産しないために、ウラン軽水炉ではなく、トリウム熔融塩を選択し、日本を追い越してはるかに先に進み出たと見える。日本は既存のウラン軽水炉の再稼働に執着し、その勢力の一部は、廃棄物の処理に役立つので熔融塩炉の採用に傾いている。それはトリウムにとっては最良の媒体ではあるが、ウランをも使用できるからである。しかし日本の核武装に備えて定量のプルトニウムを確保したいために、トリウムには背を向けている。すなわちトリウム熔融塩炉の全体は受け入れようとはしていない。トリウム熔融塩炉は核兵器の廃絶を目指す炉でもあるのである。

ワインバーグと古川の理想は中国において実現された。この影響はすでに顯われており、疑いもなく今後増大し続けるであろう。また日米原子力協定の終焉にともない米側からのプルトニウム削減の圧力は強化されるであろう。既存の「核燃料サイクル」は日本を窒息死させるものだった。これが崩壊に向かつており、希望はある。

その旧姓で呼ぶならば辛島和子であつたひとよ、わが妻になり、二人の子の母親になつたひとよ。古川和男さんに宛てた年賀状で「あなたは日本と世界にとって大切な方です。どうか名が生きなさつて初志を実現してください」とあなたは書き送つていた。

対するに古川さんは敗戦時には熊本の五高に在籍していて、勤労動員と栄養不足で病院に収容され、空襲警報のサイレンが鳴つても自力では防空後に避難できずにベッドに伏せていましたと記している。当時南九州一帯では、米軍の日本本土攻略は宮崎県の日向海岸への上陸から始まると噂されていて、その際の死は覚悟されていた。徹底抗戦、一億玉碎の日本政府が無条件降伏を決断したのは、原爆が投下されたからであつて、そのことを氏は「あなたたち被爆者の犠牲によつて」「云々とあなたに書き送つてある。かくて戦後、原発研究を志しながらウラン（広島）とプルトニウム（長崎）は排除し、トリウムを選んだ。すでにガンに冒されていた没年の講演では、それによつて「地球と人類を救いましょう」と切実に訴えていた。その声が耳を離れない。古川学は「優れたものは、すべて稀であるとともに困難なのである」という、あなたの兄正道さんもまた書き留めていたスピノザの言葉を想起させるものがある。

あなたの葬儀場には、受付の隣に四枚の拡大写真を置いた。最初は1956年八月、長崎での第二階原水禁世界大会の壇上、大会スローガンを背景に話す新聞社撮影のものである。私が属するITMSFは2018年9月に長崎で活動会崩壊のための研究集会を行つたが、冒頭、現理事長木下幹康が古川和男箸を紹介したのは当然だった。しかし続いて、このトリウム熔融塩炉の思想が、核兵器の廃絶とプルトニウムの消滅を目的としていることで、

被爆者の願いに完全委ねていて、わが『トリウム原子炉革命』をスライドを用いて紹介してくれた。

葬儀場に飾った続く三枚はいずれも1959年の旅のもので、最初はオペラハウスの傍で中国の越劇の女優と中国女性の日本語通訳に挟まれてのものである。中国が力をいれ、材料一式を貨車で運び込んだと伝えられ、それによる料理が振る舞われた中国主催の中交流会が終わってからものである。次が帰路のキエフで公園のベンチでウクライナ女性に挟まれてのものだ。そして最後はナホトカの埠頭近くの広場、近くで遊んでいた子供たちの群れにひとり囲まれてのものだ。これら四枚に、遺影として遺骨の上に飾られた十数年前の鎌倉での写真を加え、計五枚にそれぞれに説明を加え、拙HPで見られるようにした。表題は「わが女主人公逝く」とした。古川和男さんがあなたについてテレビ局の座談の席で「大変な美人でした」と言い、それを本の中で記したので、要望があった。それに応えるための処置だった。

あの団にロシア語通訳として加わっていて、つまり何度もあなたの通訳を務めた人がいる。翌年モスクワ大に留学、ロシア語文法の大著を著して国立大を退職。あの時以来の再開で、最近会って親しく話す機会をもつた。後にHPでそれらを見て「どれもが素晴らしい。

穏やかな綺麗なお顔。日本の女性のよさがじみ出でております」とメールしてきてくれた。あなたに会ったひとは誰もが最初はあなたを被ばく者だとは思わなかつた。しかし手足の火傷は相当なもので、最初の子は悩ましげに「ママの手は、どうしてこんあにキタナイの?」と問うたものだつた。

一九五九年八月十日、十日間におよぶ平和友好フェスチバルの最終日、日本代表団主催の太平洋沿岸諸国集会「太平洋を非核の海に」が行われた。冒頭あなたが挨拶に立ち、英独露語に通訳されたが、それはナホトカ以来、途中の主要駅で、そぞろんウイーンでは連日、一日に何回も繰り返し行われてきたあなたの挨拶の最後のものだつた。往路とは異なつて、帰路のソ連では集会はなく、しなくてすんだのである。

その日の夕べ、薄暮のウイーン市庁舎前の広場での閉会式。最後に、米国から東欧に亡命中だつた黒人歌手ボール・ロブソンがベートーヴェン第九交響曲の「歓喜の歌」を歌つた。

歓喜！歓喜！

歓喜、美しき神々の火花、

樂園の乙女、

われら火の酒に酔い、

天なる汝（おんみ）の聖殿に踏み入る。

世の習わしの、厳しくわけ隔つるを、

敢えて汝が魔力は結びつける。

汝が優しき羽交（はがい）の下（もと）、

長瀬隆の最初の作品は『権太よ遠く孤独な』という小説であつて、日本領であった南権太（サハリン）の村での幼時の体験から始まっている。露日混血の年長の友達が、「ヨツボイマツ（ヨツボイマーチの変形」という言葉を浴びせられて激高するのであるが、三歳だった語り手の「私」は、当時はその意味がまったく分からなかつた。しかし執筆者である「私は、それが「汝の母を犯せ」の三語からなる命令形のロシア語の文である、と解説する。そこから転じての卑猥な罵倒の言葉なのである。このことは、長じた「私」がロシア語を学び、それを知つたということを意味している。

一九四五年ソ連の参戦により、南の中心都市大泊（コルサコフ）の中学校二年生になつていた「私」は、明日はソ連軍が町に入るという日、市の図書館に行く。露和辞典と、気に入る本であつたチエーホフの『サガレン紀行』を持ち帰るためだつたが、両書はともにすでに持ち出されていた。それで「私は、もしもこのとき入手していたならば、読んだはずの一連のチエーホフの日露関係史にかかる文言を読者に紹介する。「サハリン（サガレンのロ

解 説

大槻義彦（物理学）

2019・1・18

完

その両側には各国代表団から選ばれた女性たちが並んだのだったが、がその最も近い場所には、和服姿のあなたの端麗な、そして永遠に輝く姿があつた。

ひとりの気高き女性をかち得た者は、
和して歓呼の声を挙げよ！

すべての人々は兄弟となる。
躍動する生命力をわがものとなしたる者は、
ひとりの友の友とならん。

シア読み）の処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」を始めとする国際主義的なものである。翌日市は占領され、「私」は路上でソ連兵から「南樺太の日本住民、スターリンの赤軍に解放さる」という見出しのビラを渡されて衝撃をうける。

二ヶ月が経過し、小人数で再開された中学校の最初の授業で、物理の教師から「新型爆弾」と報じられていたものの真の名称とともに核爆発の原理を教えられる。マッチ箱大の爆弾により一都市が破壊されたのであり、この結果もはや世界戦争は不可能であり、「君たちの任務は平和で文化的な日本を建設することである」と説かれ、感動する。そして「私」は樺太での敗戦と引揚が生涯の大事件であったことを述べ、それ以上の事件が後の己に有ったかどうかを自問し、有つたとする。それは原爆被爆者の妻との結婚であり、その遠因がこの授業に有つたと記した。

「私」の特徴は、ソ連占領下で暮らし、その間に、自分は将来樺太について書く、否、書かねばならない、と思い立つたことである。その目的の実現に最適の学科と信じ、早稲田大学の当時はそこだけに有つた露文科に進む。そして一九五七年、日ソ国交回復宣言からまだ一年たってはいなかつた年、発足から三年目の日本原水協にその訪ソ使節団のロシア語要員として起用され、訪ソする。そしてその二年後、ウイーンで行われた世界青年学生平和友好祭というものの団に加わる。百四十人の団に日本被団協の代表として送られてきていた被爆者女性辛島和子と会い、翌年に結婚した。

私、大槻義彦は物理学者であり、「火の玉」の物理学的解明で世に知られることになつた者であるが、長瀬よりは五歳年少で、この一九五九年に東大大学院に進学、ウイーン友好祭の報を聞き、これに加わつた。その団で長瀬に会い、また後に夫人になつた辛島和子さんにも会つた。もつとも私の目的は友好祭の参加とは別なところに有つた。そのことを私は二〇〇〇八年刊の『大槻教授の最終抗議』で記している。

（シベリア鉄道の列車で）モスクワへ着くなり、私はモスクワ大学に駆け込んだ。なにしろこの日のために大学でロシア語を選択し、五年間も待ち続けたのだ。約束をとつていない強引な訪問だったが、運よく物理学部の学生と出会えた。（略）

「この大学にはシャーロ・バイアード・モロニア（火の玉）の研究をしている人はいますか？」

「ああ、いるよ。今はカピツツァー教授が研究室を開いているし、昔はクルチャトフ先生がやつていたな」あつさりこう言われ、私は自分の耳を疑つた。カピツツァー教授といえば、極低温物理学、超流動物理学の研究で世界中に知られた人物である。一方のクルチャトフ教授は、「ソ連の原子力開発の父」と呼ばれた偉大な科学者だ。その二人が火の玉の研究も行っていたとは！

「カピツツァー先生にぜひ面会したい。それがだめなら、研究室の学生に合わせてもらえないだろうか？」

（七行略）

良かつた！　まだ間に合う。火の玉の謎は絶対に私が真っ先に解いてみせる。決意を新たにして、私はウイーンに向かつた。ウイーンでも平和友好祭はそつものけ。私はここでもウイーン大学の学生や先生に

会い、火の玉研究について聞きまくった。さらにそのままウィーン大学に留まる算段をしたのだった。

(後略)

十日間の平和友好祭は終わり、帰国し、翌年早々に長瀬は辛島和子さんと結婚する。長子が生まれるが、重度の心不全で四歳十か月で死没。そのことは自伝的に書こうとして、しかし「多大な努力にもかかわらず、書き上げることができなかつた」。そうこうしているうちに七十年代に入つて、敗戦・引揚後絶えて会うことのなかつた樺太の故郷の村の小学校の同級生たちとの再会が実現し、それが重なり拡大する。それにに対する嫌悪感ゆえに意識的に忘却に委ねられていたヨッポイマツの記憶の甦りがあり、初原のテーマに回帰し、一九八四年に樺太の本の上梓ということになった。しかしそれは夫人が発がんにより、両乳房と左腎臓を切除され、人工透析の生活に入った時期と重なつた。これが作用して、一九五九年のウィーン友好祭の物語である『ヒロシマまでの長い道』（一九八六～八九）の物語の執筆が可能となるのであるが、このなかには重要な登場人物として、互いにこのときが初対面だった私、大槻が匿名の物理学院生として登場している。

友好祭の翌六〇年五月の長瀬＆辛島さんの東京での披露宴には招かれて私は出席している。しかし専門と活動分野が違つていたために会うことではなく、九十年代になつて長瀬から連絡があり、しばらくぶりで会い、語り合うこととなつた。火の玉の解明がきつかけとなつて、テレビ出演が重なるようになつた時期のことと、朝日カルチャーセンターでの講義に長瀬が顔を出してくれたりした。

『ヒロシマまでの長い道』は前作の樺太の物語を受けて、辛島和子さんとの結婚を「ヒロシマへの到着」と規定して書いたものである。しかし彼は樺太から引き上げて一足飛びにそこに到着したのではなかつた。進学した早大での学生生活があり、そこでの一人の教授との出会いがあつて生じたものである。戦前は木寺黎二のペンネームでドストエフスキード・シエストフ関連で業績を残し、雑誌『早稲田文学』では文芸評論家として活躍、しかし戦後は松尾隆の本名に戻り、マルクス主義の唯物論哲学の啓蒙家、平和運動家、学生運動への助言者として活動した人である。一九五六年に四十九歳で没。一九八六年にこの人の三十回忌の集会が行われ、文集『松尾隆』が製作刊行される。長瀬は寄稿しているが、その表題は「松尾隆における分裂と統一」というもので、戦前のドストエフスキードと戦後のマルクス（主義）の間に、執筆者名の異同に対応する亀裂が見られること、しかし教育と発生した原水禁運動への期待で統一されていた、とするものだつた。ところが文集の準備の過程で、一連の遺構が発見され、そのなかにはドストエフスキード・シエストフ関連の大きなものがあつて、長瀬はその処理に没頭、小説の発表は先送りした。一年を要して遺構がペレヴエルゼフの『ドストエフスキードの創造』と特定。新たに翻訳し、一九八九年に二つが出版された。

私は父が中国戦線で罹病、そこで戦後に亡くなつてゐる。「火の玉」は「ひかりもの」「人魂」とも言われることがあり、私がそれを見たのは、父の帰還を待ちわびていた時期であつて、父の死靈と見なすことも有りえたわけである。しかし私は中学生だったが、迷うことな

くそれを物理現象と想定し、二十四年を要して解明した。作家の野坂昭如氏と対談したことがあるが、私は述べているのである。「科学者の中には宗教に入信している人も多い。だけどそのような人であっても、若いころ、科学研究をやつて成果を上げた、その時は素晴らしい唯物論者だった。だからこそ成果を上げられたんだ。もしもその若い時の研究段階で、宗教とか靈とかを持ち出していたら、研究成果として見るべきものは出せなかっただろう。その成果を出した時点では素晴らしい唯物論者だった。しかし、人間というものは弱いものだから、その後いろいろな過程があつて、晩年宗教に肩入れした。ニュートンがそうですけどね」。

この『導く力』に明らかにされているように、長瀬はこの後、樺太の本の発展である『日露領土紛争の根源』（2003）、ペレヴエルゼフ『ドストエフスキイの創造』の邦訳（1998）の発展である自著『ドストエフスキイとは何か』（2008）を公刊する。そして二〇一一年三月一日東日本大震災によるフクシマ原発事故に遭遇する。これが、雑誌に連載され一書を成すに十分な枚数なのだがまだ実現していない早大での恩師の評伝『松尾隆』を含めると、八冊目となる書、『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』の執筆を結果した。これは以下の経緯によって実現したものだつた。

今日では「トリウム熔融塩炉」と呼ぶ方がより適切なこの原子炉は、ウランを装荷するすべての原発とは異なつて、それがトリウムであることによって特徴がある。その日本における発明者は古川和男理博（1928～2011）である。大分市の生まれ、ごく近所に辛島という家があり、同年生まれの娘がいた。一九四五年十八歳で結婚し、夫の陸軍の經理将校に従つて広島に住み、二週間後に被爆、夫とも死別、救出されて大分市に戻る。古川家は戦後程なく京都に移り、彼女は長期にわたり和男氏の消息は知らなかつた。ところが一九八七年に弟の雅章氏が旧知の和子さんを訪ねて来、長瀬も同席して兄の研究としてトリウム溶融炉の話を聞いた。

続いて一九九九年に当の和男氏が弟に案内されるようにして和子さんを訪ねて來たのであって、長瀬は挨拶しただけで外出している。二年後、一般向けでは最初とすることになるトリウム熔融塩炉の紹介書『原発』革命』を上梓する。現行のウラン原発を廃止してトリウム原発に代えよ、と主張するものであり、和子夫人は謹呈されていたが、長瀬は手にとつてみようとはしなかつた。所属する平和事務所（日本原水協の流れをくむ）でチエルノブイリの被ばく者の救援にかかわり、現地にも行って來ていたにもかかわらず、だつた。これがフクシマ後、同書の増補改訂版である『原発安全革命』が出て、目覚めたのである。

私、大槻義彦は宮城県の南端、福島県にちかい角田市の出身であり、日本の原発は出発点型誤っていた、と思つてきた。その初期、乞われて委員会に属していた湯川秀樹は、アメリカからの直輸入に反対し、原子力基礎研究の必要を説き、排除されている。このために旧帝大に原子力工学科が設置されたとき、物理学者はこれに加わらなかつた。自民党の一部政治家による拙速強引な開始だったのであり、その付けが廻つての事故であると見なしていた。しかし長瀬書に刺激されて古川書をひもとき、古川博士が、また同氏の学兄である米ワイン

バーグ博士が、事故が避けがたく、またそれが過酷なものになることを予見していただけではなく、その解決策を提示していたことに感銘を受けた。

古川和男はF.U.J.I（不二、富士）が原発にかかる全問題を解決すると固く信じ、それが受け入れられなかつた理由を、「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きの中で、ときに不当な扱いをうけることがある」（前掲書20頁）と説明していた。長瀬はこれを『カラマーヴの兄弟』の序文に在る「奇人こそが時にようと全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風に吹きまわしによつて、ひとり残らずなぜか一時の奇人委背を向ける」場合に相当すると考えた。ドストエフスキイは十字架上で殺害されたキリストを念頭において記したのであるが、古川は肉体的には殺されなかつたにしても、社会的には抹殺されていて、長瀬はこれに相当すると考えた。

事情は米ワインバーグ博士の場合ではもつと顕著である。一九四五年五月、すなわち原爆の開発以前に「論文で」「（ウランによる）軽水炉で冷却できない」と、燃料が破損し、プラント全体が放射能で汚染され、修復はきわめて困難になる」とフクシマを予言していた。したがつてこの科学者は、地上での公用発電所ではトリウム熔融塙炉を良しとし、芸術的と評される熔融塙を開発した。しかしづルトニウムを産出しないということで、冷戦派の弾圧を受け、研究を中止せしめられた。この結果ウラン原発（軽水炉）が排他的・独占的に跋扈する存在となつた。憂鬱症に陥つたワインバーグは「悪魔の買物」と罵るようになり、オーラリッジ研究所を解任されている。その後に広島・長崎を訪ね、『最初の核時代』（本邦未訳）を著すが、そこでは過ぎ去つた世紀が冷戦によつて汚染された邪な時代と概括され、来るべき第二の世紀がトリウム熔融塙炉の時代となるだろうと待望されている。

いずれにせよ文系の人である長瀬が理系とも見なされる、しかし小説的な本を執筆したのであり、私は驚いたが、彼の場合これは若い時代から運命的に用意されていたことでもあつた。本書の冒頭、1章にソ連作家レオーノフ（1899～1999）の戯曲がスター・リン問題との関連で取り上げられているが、この作家がAINシユタインのドストエフスキイ愛好に言及していることに注目していたのである。またそのことを『ドストエフスキイとは何か』の結語でも述べていた。それが古川関連書の執筆によつて避けられぬ問題となり、「AINシユタインとドストエフスキイ」の執筆を構想していることは、彼から直接聞いていた。

AINシユタインは唯物論者であり、若いころから「神とは気体上の脊椎動物である」と冗談めかして語っていた。その人がドストエフスキイを評価し愛好したのはなぜか？ それには格好の科学史家クズネツォフがソ連にいた。その大冊『AINシユタイン』と小著の『AINシユタインとドストエフスキイ』の掲載となつていて。

AINシユタインは唯物論者であり、若いころから「神とは気体上の脊椎動物である」と冗談めかして語っていた。その人がドストエフスキイを評価し愛好したのはなぜか？ それには格好の科学史家クズネツォフがソ連にいた。その大冊『AINシユタイン』と小著

である『ドストエフスキイとaignシユタイン』は邦訳されていた。しかし前者は大幅に書き直されており、後者はペレヴエルゼフと比較して物足りなかった。ともあれソ連崩壊、およびチエルノブイリ原発事故以後、ロシアに顯著になったロシア正教への回帰、その立場からドストエフスキイ賛美、それの日本への浸透、それらを批判克服し、ドストエフスキイ自身が言っていた「最高のリアリズム」を明示するために、長瀬は古川関連書の後、自身の「aignシユタインとドストエフスキイ」の執筆が必要であると考えた。

その構想を聞いて、共著の提案もしたことのある私なのである。しかし奥さんの死に遭遇して、彼はエツセイ（本書の3章）に留め、和子さんの死を物語ることになる。

夫妻との縁は深く、私は『ヒロシマまでの長い道』の次作である『微笑の沈黙』にも登場しているのである。『子供は理系にせよ』の著者であつて、私は文系のこの人とはジャンルを超えた相互理解ができるのである。物理学（科学）も文学（芸術）も人類の文化である。「文化の歴史が可能なのは、歴史的諸主体を貫き通して定義しうる、何らかの同一の基層の存在が有るからである」というクズネツォフの言葉を長瀬は紹介しているが、私たちの間にはその「同一の基層」が有ると確信される。

続く4章では、がらりと調子が違つて、私たちが共有する一九五九年のウィーン友好祭関連の出来事が物語られる。祭り終了後に離団してプラハ大に留学した者に小野田勇がいて、その兄なる人物から「私」が、「弟の留学の経緯について知りたい」という問い合わせがあつたのである。長瀬がすでに『ヒロシマまでの長い道』に詳細に記してある出来事なのだが、その本を知らず読んでいない人からの、質問であった。これに対し回答の過程で明らかになつたことに、モスクワ大留学を目指して出国していたにもかかわらず、それを断念・放棄して帰国し、辛島和子さんと結婚したのでへ書くことに到着しており、留学していたならば書くことに到着しなかつたことであり、その改めての確認であった。それが、結婚が英字紙に『Love in Vienna（ウィーンでの愛）』の見出しで報じられたので、それを表題にしたこの章の意味である。

ところで私が物理学を目指したのは、小学校五年生の九月、自宅で入浴中に「火の玉」を見たのがきっかけだった。ただしその後絶えて見ることがなく、栃木県那須に観測点をもうけ、その撮影に成功したのは一九八四年である。ただしそれ以前に、良書として版を重ねた『相対性原理の視点』（1991）を上梓している。すなわち物理学全般を勉強してきた者なのであるが、私が広く知られるようになつたのは火の玉の再現実験に成功してからである。テレビから出演依頼が重なることになつたからだつたが、それはオカルト・チームが起つた時期と重なつた。私としては「火の玉」研究がまじめな科学研究であることを示すためにもオカルトを批判・否定する必要があり、それを継続しているうちに、テレビタレントと擬儀されることになつた。

私は非科学的な迷信と闘つて来たのだったが、オウム事件では衝撃を受けた。私は「恥を忍んで言えば、オウム事件を契機に、私はようやく科学者として目覚めたのである」と著書に記し、一九九六年早大理工学部に講座「科学とは何か」を開設した。そのような私が二〇

一年三月十一日にどのような衝撃を受けたかは言うまでもないだろう。非常に早くから現行のウラン・プルトニウム路線に反対し、トリウム熔融塩炉を提唱してきたワインバーグおよび古川和男両博士に敬意を表し、私はその事業の後継者諸氏に協力したいと願うものである。すなわちこの書の5章「トリウム熔融塩炉」の主張に賛成である。

東大大学院で先輩であり、私の環境電磁気学とは異なつて、より原発に近接する原子物理学者である方に元文部大臣有馬朗人氏がいる。かつて麻原逮捕の日のNHKラジオの生特番で「オウム事件の実行者に物理学科の学生や大学院生までもが含まれていたことで、自身も科学者、教育者として非常に恥ずかしい思いをしている。今まで、科学者の中でもオウム真理教や様々なオカルトをメディアでたたいて来たのは、ここにいる大槻だけだ。今後は自分たちも大概に倣つてオカルトを批判し、毅然とした態度をとつてゆく」と語つてくれた。その有馬氏が、古川FUJIを採用したトリウム熔融塩炉を建設中の中国上海に一度にわたり足を運び、支持を表明しているのである。私としては自然な道程である。

古川和男氏は被爆後の辛島和子さんの惨状を見、それがウラン・プルトニウムの拒否とトリウム熔融塩炉の選択およびその固執と持続とに繋がつた、と長瀬は想定している。すなわち夫人が古川学の「導く力」だったと見ているのだ。それでは長瀬はどうしてこの女性と結婚することになったのだろう。『ヒロシマまでの長い道』には次の記述がある。

原爆は彼女にとつて思い出しくはなく常に忘れないものだったので、それが団に代表として送り出されることになつて、話さざるをえなくなつた。それでもソ連の停車駅ごとに催される集会でのスピーチは、毎日だったが短く一日に二度以上ということはなかつた。
だがウイーンではそういうわけにはゆかず、毎日二度も三度も、長くかつ多く話すことを強いられた。つまり終日それを思い出さねばならぬ日々が一週間以上も続いたのである。「どうしてこんな目に合わねばならないのだろう」と思うと、被爆者であることが情けなくて泣いたものだったわ」と後に彼女は良人に語ることになる。しかしそれはウイーンの日々にあつても、彼女とおなじひとつのテントで起居していた女子美大生から彼が聞いていたことだった。エスベランチストの団体から出されてきていた女子学生は彼女を「お姉ちゃん」と呼んで親しんでいたのだったが、毎晩横になつてから泣いていると彼に告げ、「何とかしてあげてよ」と困惑していたのである。

一九八六年になつて空中に生ずる火の玉の学者として一般にも知られることになつた物理学者がいる。

(略) 学者は一九五九年の旅では大学院の学生で全学連のグループに属していた。シベリア鉄道ではバイカル湖畔で一小時間過ごすサービスがあつた。何人かが思い出のために小石を拾つて列車に戻つたろう。「こういう習慣は欧米人にはないんだそうだよ」と何かで読んだことがあって彼が言つたろう。すると未來の火の玉学者が、ウイーンに行つたならばチロルまで足を延ばそうと思つてのこと、ヨーデルの好きな末の妹にそこの「小石を拾つてきて」と頼まれたためであると語つた。ウイーンの日程が後半に入つて、隣り合つて起居していた彼は、物理の大学院生がいよいよほんとうにチロルに行こうとしていることを知つた。

こうしてウイーンでは早朝に発ち夜汽車で帰った四人の男女による小さなチロル行が実現したのである。午後には最終日の日本代表団主催の「太平洋を非核化するための沿岸諸国集会」に出席した。冒頭団の象徴だった被爆者女性は挨拶に立ち、私もこれは謹聴している。すでに故人である妻女を「あなた」と呼び、彼女に借りかけるように自身の著作活動（多寡の相違はあってもそのほとんどにこの女性への言及がある）を概括して来たこの『導く力』という作品は、一九五九年八月十日の夕べ、薄暮のウイーン市役所前広場での閉会式の模様を記して閉じられている。黒人歌手がベートーヴェン歓喜の歌の独唱し、その最も近い場所に、和服姿で立つ「あなた」の永遠に輝く姿があつたのである。思えば私もまたそれを見ていたのだつた。